ISSN 2188-1987

Volunteer Center

明治学院大学
ボランティアセンター報告書
第18号

VOLUNTEER CENTER YEAR-END REPORT

2021

明治学院大学ボランティアセンター

MEIJIGAKUIN UNIVERSITY VOLUNTEER CENTER

目　次

明治学院大学　ボランティアセンター報告書　第 18 号　2021

学長挨拶「コロナ禍におけるボランティアセンターへの期待」村田玲音 1
ボランティアセンター長挨拶「2021 年度ボランティアセンター報告書の刊行にあたり」猪瀬浩平 2

特　集

ボランティアセンターでの 11 年間に取り組んできたこと 波多野洋行 5
岐阜県下呂市の団体等とのオンラインによるボランティア活動 2 年間の記録 田口めぐみ 11

Ⅰ. 2021 年度活動報告

2021 年度ボランティアセンター行事一覧 23
2021 年度　コロナ禍の中で行った『ボランティアサークルインタビュー』を振り返り/2021 年度来室者数 24

＜全学プログラム＞

1　明治学院大学ボランティア大賞 29
総括
大賞「洋服に新たな命を～4 年間のボランティア活動で見えたもの～」
国際学部国際学科 4 年/藤井るな 31
研究部門賞「平和と希望の実践～平和活動と学習支援ボランティアのつながり～」
法学部政治学科 4 年/林ことね 34
実践部門賞「思いを形に～バルーンアートプロジェクト～」 心理学部教育発達学科 4 年/河森明依 37
奨励賞「在住外国人（留学生）の立場から、外国につながるこどもたちの教育支援活動にかかわりながら、学んだこと、広がったこと、つながったこと」社会学部社会福祉学科 4 年/JIA RU 40
奨励賞「学習と心のよりどころ」法学部法律学科 3 年/鈴木日菜子 43
奨励賞「ボランティア報告書「日本語を教える事」の意味について」
法学部消費情報環境法学科 3 年/三河眞弓 46

2　明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム 49
総括
『明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム』に関するアンケート調査 53
修了生の報告
「文化や作品を支えるイベントとそのボランティアの関係性」文学部芸術学科 4 年/冨岡仁湖 61
「ボランティア活動と芸術」文学部芸術学科 4 年/富田汐里 63
「居場所～ボランティア活動を通して～」文学部フランス文学科 3 年/二見朋香 66
「感動体験が笑顔の源」社会学部社会学科 3 年/森橋江里夏 69
「人と人とのつながり」社会学部社会福祉学科 3 年/瀬戸瑞生 72

※鈴木日菜子さんは「明治学院大学ボランティア大賞」に掲載済のため、未掲載とさせていただきました。

＜ボランティアセンター主催プログラム＞

3　ボランティアファンド学生チャレンジ 74
総括／2021 年度助成企画
ぬいぐるみ旅行（りもぐるみ） 76
MGsChool（MGCloset） 79
子どものよさを伸ばすには？（障害児医学ゼミ 18PE） 82
ガールズプロジェクト（UP!UP!UP!） 83
ボランティアファンド学生チャレンジ 2021 採択団体一覧 85

4　いつでもボランティア・チャレンジ 86
総括／2021 年度助成企画
みんなで考えよう、ジェンダーの問題（ユートピア） 88
Who is responsible for the future?（UBUNTU：ウブントゥ） 89
今、大学から考えよう～持続可能な社会のために～（NEOm） 90
選挙カフェ～あなたが政治に求めるものはなんですか？～（選挙カフェ） 91
ガールズフェスティバル（UP!UP!UP!） 92

5　1 Day for Others（1 日社会貢献プログラム） 93
1 Day for Others 2021 参加者数/これまでの参加者数とプログラム数 104

6　ボランティアカフェ
総括 105
各回報告 107

Ⅱ. 新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題 -「2021 年度新入生ボランティア活動アンケート」 113

Ⅲ. ボランティアセンター資料

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま 119
2021 年度マスコミ報道一覧 119
各委員一覧 120
明治学院大学ボランティアセンター規程 121

学長挨拶
コロナ禍におけるボランティアセンターへの期待

学長　村田 玲音

2020 年春から世界的に拡がった新型コロナウイルス感染症は、今でも収まる気配がありません。いつ収まるか、少し状況が良くなってきたら何ができるだろうかと、世界中で暗中模索しているうちに、二年がたってしまいました。それだけではありません。コロナに対して世界中の人々が助け合わなくてはならないこの時期に、ロシアがウクライナに侵攻する事件が起き、ウクライナの人々はもちろん、世界中の人々がコロナへの不安に加えて、戦争や命の心配をしなくてはならなくなっています。何か行動を起こしたいと思っても、コロナや政情不安に妨げられて、動きがとれないというのが現実でしょう。

明治学院大学は《ボランティア活動》と《国際交流》に力を入れてきた大学です。これは創設者であるヘボン博士の業績や、《Do for Others》という本学の教育理念と深く関わる活動だからです。こうした明治学院大学の特徴が、コロナや政情不安によって大きな影響を受けていることは否定できません。国際交流の場合、「外国に留学に行く明治学院生の人数」「明治学院大学で勉強するため外国から来る留学生の人数」を見るなら、この二年間は大きく活動が低下してしまいました。ただ、コロナ下での時間が長引いている現在、私たちはこの時間を「新しく何ができるか模索する」「コロナが終息した後に備えて布石を打つ」ことに使うことはできます。国際交流の場合、「外国の教育研究機関とオンラインで教育研究の交流を進めてみる」「コロナ後の時代に備えて、明治学院生の外国語能力や留学意欲を高める努力をする」といった方法が模索されています。状況はボランティアセンターでも同様かと思います。「小さなことでも何かできることはないか」と、その人の個性を生かしながら積極的に行動することはとても貴重なことです。これがまさに《Do for Others》の実践なのではないかと思います。

先日、2021 年度にボランティア活動で活躍した皆さんの成果報告を聞きました。例年より人数は少なかったそうですが、この中で私は学生の皆さんの《コロナ禍の中でできることを見つける》という強い姿勢を感じました。特に、コロナで沈滞しがちな社会を元気づけようとする試みに感心させられました。コロナが三年目に入り、コロナの下での生活が長引くにつれて、《コロナによる不自由な生活の影響》が人々の心の中にジワジワと拡がってきているように思います。これは本来の《病気に対する恐怖》よりも、もっと深刻なのかもしれません。ある意味では、社会の多くの人が社会的弱者になりつつあるのが現実なのです。こうした時代にこそ、ボランティアセンターには、「他者に何ができるか考える」という、ボランティア精神を守り育てていってほしいと思います。今ほどこの精神が強く求められている時代はないのではないでしょうか。

2021 年度ボランティアセンター報告書の刊行にあたり

ボランティアセンター長　猪瀬浩平

ボランティアセンター報告書をお届けしました。

2021 年度のボランティアセンター基本方針では、ボランティアを「人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである」と定義しました。社会課題に向きあう学生を育てるというのが、ここ数年のボランティアセンターの目標でしたが、その延長でボランティアをなぜするのか、積極的に言語化しました。

2021 年度も、前年同様に新型コロナウイルス感染症と向き合いながら、社会課題と向かう学生を支えるための試行錯誤する一年でした。

ほとんどの活動がオンラインだった前年度に比べて、2021 年度は一部対面の活動も実施し、新型コロナウイルスの感染状況などを見ながら、適宜、対面、オンライン、ハイブリッドを組み合わせながら活動しました。また、2020 年春以降学生に呼び掛けてきた「新型コロナウイルス感染症に伴うボランティア活動についての考え方」も、ボランティアサークルの学生たちへの聞き取りも行いながら、適宜見直しを行ってきました。

以下、2021 年度の基本方針で定めた、４つを活動の柱に沿って説明していきます。

１. 構成員全員のボランティア活動への参加促進と支援

一日体験プログラム「1Day for Others」はオンラインで16プログラム、対面で５プラグラム、ハイブリッドで２プログラム実施しました（前年度はオンラインで10プログラムのみを実施）。

「ボランティアファンド学生チャレンジ（以下ボラチャレ）」は５件の応募があり、４件を採用しました。「いつでもボランティアチャレンジ（以下いつボラ）」には９件の相談があり、８団体が応募しました（採用は７団体。うち１団体は2022年度の実施）。ボラチャレの応募件数は前年度とほぼ同数ですが、いつボラの前年度の相談件数2件、応募が１でしたので、大幅な増加になっています。

前年度からはじめた「ボラカフェ」について、今年は春学期１回、秋学期３回、春休み２回、合計６回実施しました。国際学部の竹尾茂樹先生に、ご自身が長野県小諸市で行う社会的起業の取り組みを語っていただく回や、鹿児島県喜界島の町役場で働く卒業生をゲストにした回、NGOプラン・インターナショナル・ジャパンのスタッフをゲストにまねく回などを行い、好評でした。

秋学期には、初めての教職員向けボラセンガイダンスも実施しました。

２. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラムの展開

2022年2月現在、2020年度生18名、2021年度生44名が活動しています。2年目生以上に

ついては各学部運営委員に指導いただく一方、ボランティアセンターではボランティア・コーディネーター（以下、コーディネーター）を中心に実践指導をしています。2022年度は6名の学生を認証しました。例年にくらべて数は多くありませんが、コロナ禍に直面し、活動の継続が難しくなり、モチベーションの維持がむずかしいなか、認証にいたった学生たちを讃えたいと思います。

３．ボランティアセンターの交流・活動・研究の場としての機能の充実

学生たちに安心して活動してもらうべく白金、横浜のボラセンの感染対策を十分に行いました。また、WEB会議用のカメラや、スピーカーなど、オンライン・ハイブリッド対応のための機材整備をしました。

コーディネーターを中心に、ボランティア学関連科目や、各学部・学科のゼミや基礎演習などで、ボラセンガイダンスや、授業協力を行いました。また、コーディネーターのネットワークを活用し、農村における住民組織の役割について調査する国際学部付属研究所の研究プロジェクトへの支援も行いました。

４．ボランティアセンターにおける活動の発信・広報の強化

前年度末にボランティアセンターの紹介ムービーを教務課の協力のもと作成するとともに、ボランティアセンター独自で、1Day for Othersや、明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム紹介のムービーを作成しました。

ボランティアセンター動画 QR コード

ボランティアセンター紹介

1 Day for Others

サティフィケイト・プログラム

コロナ禍のなかで、人と人と、人と現場とが対面することの意味や、大学の空間としての意味が問われています。この１年間私たち自身ができたこと、できなかったことを振り返りつつ、さらに小さい声や、弱い声を聴けるようになること、大きな力に頼ることなく、他者と共に生きられるようにしていく力をボランティアセンターに蓄えていきたいと思います。この報告書をお読みいただき、忌憚なくご感想やご批判をいただきますことを、お願いいたします。

特　集

【特集】

ボランティアセンターでの 11 年間に取り組んできたこと

2022 年 3 月 31 日に 36 年間在職した明治学院を早期定年退職することになった。早期退職制度があるとはいえ、自分の意思で退職を決めたのだが、退職にあたりセンターでの 11 年間を振り返るページが用意された。また遡っての 3 月 16 日(水)にはボランティアセンター研修において、通常のセンター内研修とは異なり、他部署の教職員にも公開するかたちで振り返る機会をいただいた。東日本大震災復興支援、ボラセン 20 周年企画などの経験から、上述のボランティアセンター研修で触れた項目から一部を抜粋して記したいと思う。

1. ボランティアセンターでの初仕事は東日本大震災復興支援

2011 年 3 月 11 日。すでにボランティアセンターへの人事異動が公示されていた筆者は学生部内で引き継ぎを意識しつつも通常業務を行なっていた。14 時 46 分。突然生じた激しい揺れは、震源地から離れた東京都心においても至近のロッカー一つが倒れるほどであった。この地震により交通機関が麻痺したことで帰宅できなくなった 300 名ほどの学生を翌日まで寝ずに見守るとともに、翌週からは学生部最後の仕事として災害救助法適用地域出身学生の安否確認を他部署と連携して行なうこととなった。

このとき、被災者・地域の力になりたいとボランティアセンターに集まった学生については、異動前であったことから直接対応はしていないが、三々五々に集まった学生を一つの組織に纏めた上で卒業式(震災の影響で中止となり卒業証書授与のみ行なわれた)当日にキャンパス内で募金活動を行なった。

他方ボランティアセンタースタッフの元には、主立ったものとして、日本ユニセフ協会からは、被災地にディーゼル車を届けて欲しいと要請があり、岩手県立大学の教員からは岩手県沿岸地域に人を派遣して欲しいとの要請があった。ボランティアセンターではこの要請に対応するために、宿泊拠点や安全面を確保した上で、2011 年 4 月 4 日(月)にユニセフのディーゼル車に学生 4 名を乗せ、原田勝広センター長（当時）の運転で仙台市に向けて出発した。ただ車を送り届けるだけでなく、その後一ヶ月にわたり、3 つの学生グループがほぼ 10 日ごとに交代して活動した。日本ユニセフ協会との協働プログラムの始まりであった。一方、4 日後の 2011 年 4 月 8 日(金)には、浅川達人センター長補佐（当時）とともに 3 名の職員・コーディネーターが岩手県、宮城県沿岸部への視察のために陸路 2 泊 3 日の予定で東北学院大学に向けて出発した。4 名の視察により東北学院大学と岩手県立大学とのふたつの協働プログラムが生まれた。

帰京後すぐにポータルサイトを活用して支援活動に参加する学生を募り、2011 年 4 月 19 日(火)には岩手県立大学との協働プログラムによる岩手県大槌町吉里吉里地区での学校再開支援活動が始まり、5〜6 日を目処にゴールデンウイークまで 3 グループが交代で活動した。

ディーゼル車に乗り仙台へ

支援物資の仕分け作業

出発前には教員・コーディネーターによるオリエンテーションを行なったが、2 割の学生が親の承諾を得られず参加を断念した。宿泊拠点確保と安全面に配慮することを前提とした活動ではあったが、発災直後に被災地域入りする我が子を心配する親心は十分理解できるものであった。

筆者が引率した第 3 グループが活動する頃にはすでに明治学院が大槌町内で支援活動を行なっていることが町民には口コミで知れ渡っており、徒歩移動中に声を掛けられ急遽行なった埋もれた写真を捜索する活動では、作業を依頼した町民から「明治学院、ウワサ通りね」との一言が発せられた。現場に居合わせた就任間もない筆者にとっては、ボランティアセンターが臨機応変に活動を行ない、内外の評価を得ていることを実感した瞬間でもあった。また現地で体感した被災地域に漂っていたガソリン、散乱した腐臭物などが混じり合った匂いは足を運ばなければわからないものであった。

一方、2011 年 4 月 24 日(日)には東北学院大学との協働プログラムによる活動のため 4 名の学生が引率者とともに出発し、東北学院大学ボランティアステーションの協働運営や河北新報社発行の震災写真集の英訳、塩竈市での倉庫復元作業といった活動を行なった。

その後、日本ユニセフ協会との協働プログラムは 2011 年度末まで、東北学院大学との協働プログラムは気仙沼大島でのオリジナル活動を含めて 2016 年度末まで活動した。岩手県立大学との協働プログラム(大槌町吉里吉里地区での活動)は 2021 年度末に現役学生による活動報告書を発行して一区切りとした。また、陸前高田市では 2012 年度の現地キーパーソンとの協働活動「かわいい子には旅をさせよ」を皮切りに 2019 年度まで活動した。日本赤十字社、生協連、Gakuvo の支援活動へも 2011 年春学期いっぱいであるが学生の派遣を行なった。これらの活動から以下の刊行物が生まれた。

「吉里吉里から今伝えたいこと 1(2012 年発行※)、2(13 年発行)、3(19 年発行)

※1 はマスコミに取り上げられたことから配布希望者が殺到し第 4 刷まで 12,500 部発行

「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム」活動の軌跡（2013 年発行）

「明学・気仙沼復興支援」活動報告書（2016 年発行）

「吉里吉里カルタ」（2015 年発行）

「吉里吉里へ最終号　ありがとう」（2022 年発行）

英語版「吉里吉里から」(2014 年発行)
「ゆめ紀行」～陸前高田に行こう～(2016 年発行)

未曽有の大災害に対する支援活動は、刻々と変わる状況に対して現場では都度判断を迫られる緊迫した業務であったが、この活動で得たノウハウは、2013 年 11 月の伊豆大島台風 26 号災害復興支援活動や、2016 年の熊本地震復興支援活動に生かされた。さらには筆者自身のその後の考え方・生き方に大きな影響を与えるものとなった。これほどの大きな業務に携われたことは、震災自体は不幸な災害ではあるものの、個人的には感謝しなければならないと感じている。

「活動を記録した刊行物」

「吉里吉里カルタ」

2. ボランティアセンターで核となる取り組み

○1 Day for Others

1 Day for Others は、これからボランティア活動を行なう新入生を主なターゲットに企画された 1 日社会貢献プログラムである。2011 年 1 月にリーダー学生とともに結団式を行ない同年 5 月開催を目指したが、東日本大震災発生により延期を余儀なくされ、同年 10 月 15 日(土)に開催した。延期により実施プログラムに多少の変更があったが、23 プログラムに 245 名の学生が参加した。この日ボランティアセンタースタッフは全員で手分けをして活動を見学した。当初は授業優先とすること、授業欠席は自己責任ということを学生に周知することに苦心したが、徐々に浸透した。

2019 年度には 70 プログラムに約 700 名の学生が参加するまでに拡大し、ボランティアセンターの看板プログラムの一つとなり、学外関係者と接した際にノウハウを聞かれるなど一番関心を示される取り組みとなった。

1 Day for Others は、ボランティアセンターの努力のみで実現できるものではなく、CSR 活動を行なう一般企業、NPO 団体等から趣旨に賛同して活動体験の場を提供していただいたものである。また明治学院同窓会・大学保証人会からも複数のプログラムを提供いただいている。こうした多くの方の理解無しには成り立たない取り組みであり、この場を借りて感謝申し上げたい。

コロナ禍によって 2020 年度以後の実施プログラム数は激減しているが、オンラインの活用といった新たな環境での活動スタイルが生まれつつあり、1 Day for Others のさらなる成

長が期待できると感じている。1 Day for Others の広がりは、ボランティアセンターの引き出しが広がることでもあるので期待したい。

〇ボラカフェ

コロナ禍で学生が通学できない環境の中で、2020 年にコーディネーターのアイデアから生まれた交流プログラム。参加学生から「この企画で初めて授業以外で同級生と話した」、「初めて他学科生と話した」という声も聞かれた。企画したスタッフも試行錯誤しながら交流企画、書籍紹介といった企画を実施したが、振り返ればそれで良かったと感じている。

ボラカフェも 2 年を経過し、当初はコーディネーター主体の企画であったが、参加した学生が新たに企画したプログラムが生まれるなど、ボラカフェ自身が進化を続けている。成長の余地を残すというよりは、無限大の可能性を秘めたプログラムであると言える。

「ボラカフェ」に参加中の学生

1 Day for Others「久地円筒分水」清掃作業

3. 協定・覚え書き

〇岩手県大槌町･･･2012 年 3 月 28 日(水)に「明治学院大学と大槌町との協働連携に関する基本協定書」に調印

〇日本赤十字社･･･2013 年 4 月 5 日(金)に「日本赤十字社・明治学院大学共同宣言―ボランティア・パートナーシップ・ビヨンド 150－」に調印

〇日本財団ボランティアセンター（本件のみ両ボランティアセンター間の覚書き）･･･2011 年 12 月 24 日(土)に「学生ボランティア活動推進に関する協定書」に調印

いずれも在籍中に取り交わされた協働連携協定であるが、現時点ではコロナ禍という事情もあり活発とは言えず、ボラセンのみならず大学として考えて欲しい案件と考える。

4. 20 周年行事

ボランティアセンター20 周年にあたる 2018 年度には以下の企画を実施した。

〇現役学生・OG との対談･･･阪神・淡路大震災で復興支援活動に参加した OG と東日本大震災で復興支援活動を行なった現役学生による対談を猪瀬浩平センター長補佐(現ボランティアセンター長)の進行で実施した。

この企画は、阪神・淡路大震災発生当時に学生支援のために行なった募金活動の発起人であった大西晴樹元学院長(現東北学院院長)に当時中心的に活動していた卒業生にコンタクトを取っていただき実現した。

○Do for Others パネル展示･･･ボランティアセンター学生セクション、大学公認 4 団体、いずれにも所属しない学生団体が行なっている Do for Others を実践する活動をパネルにして両キャンパスで開催した。

体育会サッカー部がユニフォームをアフリカの子どもたちに贈るという取り組みを行なっていることをこの機会に知った。明学のユニフォームをアフリカの子どもが着てサッカーボールを蹴る姿を想像したことが記憶に残っている。

○公開講座（教養教育センターと共催）･･･加山久夫名誉教授（初代大学ボランティアセンター長）による公開講座「みんなで生きる～賀川豊彦とボランティア」を開催

○学生ボランティアフェス･･･トークセッション「ボランティアをしたら私はこうなった」を開催

20 周年企画で唯一学生主導の企画であったが、同日開催となった公開講座からボランティアフェスへ流れる聴講者は一握りの大人と大部分を占めた学生という構成の中で、本音を出し合うことが出来たプログラム構成は秀逸であったと感じている。

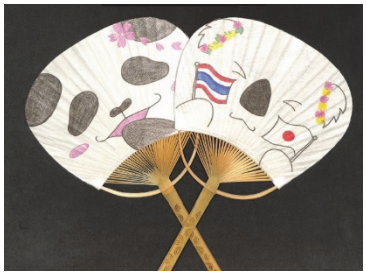
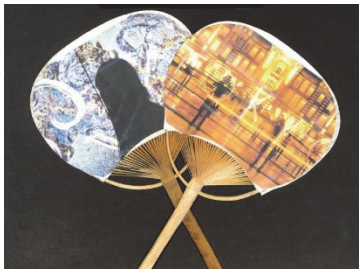
○朝日教育会議（広報課とのコラボ企画）への参加･･･基調講演「3．11 と大学（高橋源一郎教授)、トークセッション「ボランティアってなんだっけ？」、パネルディスカッション「今求められる他者とのつながりとは～Do for Others の実現のかたちを考える」の 3 部構成。

朝日新聞の企画に広報課との協働企画として、予算的にもボランティアセンター単独では実現不可能な企画を 20 周年という節目として考慮いただいた大学、広報課には感謝しかない。20 周年企画は冊子「ボランティアセンター20 年のあゆみ」をご参照いただきたい。

5．ボランティアセンターの枠組みを超えた明治学院教育ビジョンの取り組み

明治学院は創設者ヘボンの思いを継承するために 2011 年に「明治学院一貫教育宣言」を発表した。この宣言をきっかけとして、2016 年度に中高大連携プログラムとして「明治学院教育ビジョン」を立ち上がった。ボランティアセンターはボランティアスピリッツの醸造をテーマにキャリアセンター、国際センターとともに教育ビジョンの中核として位置づけられた。まずは 2018 年度にボランティア教育一環宣言を発表するとともに、国内のボランティア活動（白金地域活動のふれあい運動会、1 Day for Others の戸塚ふれあいマーケット、見沼田んぼ福祉農園）に中高大連携して取り組んだ。

さらに海外ボランティアの企画を検討し、タイ YMCA パヤオセンターとの交流として「パヤオプロジェクト」を立ち上げた。2019 年度に先遣隊による現地視察を経て 2020 年度から実施に向けて準備を進めたものの、2019 年度末から蔓延した新型コロナウイルスの影響により渡航が困難となったために、オンラインで子どもたちとの交流を図った。

高校生が作成してパヤオセンターに贈ったうちわ

パヤオセンターの子どもたちから手作りマスクが届いた御礼に高校生が手作りの扇子・うちわを贈った。学内でもタイの諸問題を考える取り組みとして、講演会・学習会やタイ料理を提供する食堂企画を行なった。中高大の学生・生徒はコロナ禍でも出来ることを考えるとともに後輩に活動を繋ぐことも意識して実行しているが、オンラインでの交流後は今度は直接会って交流したいと思うのは必然である。コロナが収まり実際にタイに足を運べる日が来ることを願っている。

6. 11 年在籍して思うこと

○ボランティアセンターは既存の部署と異なり歴史の浅い部署であることもあって、1Day for Others、いつでもボランティアチャレンジ、ボラカフェといった新しい取り組みにチャレンジしやすく、軌道修正を図りやすい、フットワークの軽い環境であったと言える。フットワークの軽さはメリットであるとともに、前例のない取り組みを行なうにあたって既存の部署間との調整を行なったこと（初心を貫くか、落としどころを探るか）が懐かしく感じる。交渉時に真摯な姿勢をつらぬくことは、いずれボランティアセンターの支援者となり得ることも実感。11 年の間に教職員支援者は着実に増えていると感じている。

○大学ボランティアセンターがこの業界では先駆的な存在として内外から評価を得ていることは、被災地や各種イベントに参加した際に体感したが、最近では後発の大学ボランティアセンターが元気であると感じている。組織が大きくなると即断即決することは難しくなるが、フットワークの軽さを忘れてはいないか。本学も上述した新しい取り組みを興すなど進化しているとは思うが、連携活動が弱いと思う。新興の大学ボランティアセンターにも学ぶ要素が埋もれていると感じるので、学校訪問や企画への参加で積極的に外の空気を吸い、交流を深めて横のつながり・協働活動を構築して欲しい。

○本学ボランティアセンターは試行錯誤を繰り返しながら現在に至っている。社会情勢の変化、当初の目的を達成したといったことで取りやめた取り組みも存在するが、そうした取り組みの積み重ねが今の明学ボランティアセンターの礎となっていることから、「故きを温ねて新しきを知る」ことも大事である。

（職員　波多野洋行）

【特集】

岐阜県下呂市の団体等とのオンラインによるボランティア活動 2 年間の記録

1　はじめに

2019 年度卒業式に続き、2020 年度入学式も中止になり、大学構内への学生の立ち入りは制限され、オンラインでの授業が開始された。ボランティアセンターは通常の年度初めには連日多くの新入生がボランティア活動の情報や仲間を求めてやって来るのが常であったが、学生が誰一人ボランティアセンターを訪ねて来ない新年度を迎えることとなった。

ここでボランティアセンターとして考えたのが、授業と同じようにボランティア活動の相談や実施もオンラインを通して行うといったことであった。その試みの一つが遠く離れた岐阜県下呂市の団体とのオンラインによる交流を通したボランティア活動であった。岐阜県下呂市という特定の地域を相手先として選んだのは、この記録の筆者である田口めぐみコーディネーター（以下　田口 Co）の居住地であり、その地域の障がい者施設や団体とは日頃から深く関わっており、オンラインでの交流活動への協力依頼を打診してみたことが始まりであった。

２　１　2020 年度オンライン交流の始まり

ボランティアセンターでは、白金校舎の学生と横浜校舎の学生がボランティア活動の打ち合わせなどをオンライン会議で行うことは日常的にあったが、ボランティア活動そのものをオンラインを通して行ったという実例は無かったといえる。

猪瀬浩平ボランティアセンター長補佐（当時）の授業である「ボランティア・市民活動論プログラム」では、例年は学生の問題関心をもとに、全国各地のボランティア・市民活動団体でインターンを行ってきた。2020 年度は授業そのものがオンラインで行われることとなり、教員も学生も自宅等でそれぞれのパソコンの画面に向かう形での授業が始まった。この授業の交流先として次の二つの団体に声をかけた。

種別	名称	会員	会員数	活動頻度
親の会	障がいをもつ子と親の会ホープフルハーツ	幼児から成人までの障がいのある方とその家族	約 30 家族	季節ごとの行事や旅行
ボランティア団体	益田どんぐりの会	会員：障がいのある方の余暇活動を支援するボランティア 利用会員：障がいのある子や成人とその家族	約 30 家族	月 1 回の行事

どちらの団体も、前年度の終わりからコロナ禍の影響で活動を中止している状態で、活動の機会を模索していた。けれどもどちらの団体もオンラインでの活動の経験はなく、対面で

の活動ができないなかで、オンライン会議未経験の会員に対してその取り扱いを教えることは極めて困難であると思われた。

そういったなかで、「障がいをもつ子と親の会ホープフルハーツ」（以下「ホープフル」）会長中島茂美氏（以下　中島会長）と「益田どんぐりの会」（以下「どんぐり」）代表西野裕之氏（以下　西野代表）の両氏により、まずは会員の間でのオンライン会議が成り立つかどうかを試行してみて、そこで会員相互の交流が図れるかどうかを確認してみようという決断がなされた。

それぞれの団体がオンライン会議システム「ZOOM」を使って会員間での接続を試みた。対面することはできないため、会長や代表が会員に電話で指示しながらオンライン会議をつなぐという方法で接続テストが進められた。苦労して接続が繋がり、学校が休校になり作業所が休業になっているためにしばらく会っていない仲間と画面で出会えて手を振りあった時は、新しい人とのつながり方を手に入れた喜びの瞬間であった。

一方で、作業所に通う 20 代 30 代の会員で、なんの苦も無くすんなりとオンライン会議に入ってきた事例もあった。日常的にスマートフォンを利用し、動画を見たりオンラインゲームを楽しんだりしている彼らにとって、オンライン会議は特別なことではなかったことも分かった。

「ホープフル」と「どんぐり」が ZOOM 接続テストの ID を教えあって相互に自由に入れるようにしたことで、新たな出会いがあったり、懐かしい同級生に再会したりと対面活動では関わりのなかった二つの団体が親しくなるという思わぬ効果もあった。ただし、二つの団体とも会員全員がオンライン会議の利用が可能になったわけでなく、会員への平等な活動の提供という観点での課題は残された。

２　２　2020 年度「ボランティア市民活動論」の授業での交流の取り組み

教養教育センター科目「ボランティア市民活動論」は学部学科の異なる 1 年生 10 名、2 年生 2 名が受講していた。

下呂市の二つの団体で、オンライン会議が活用できそうな見通しが持てたこと、人と出会うことにおいて有効性が感じられたことで、授業との交流が開始された。

以下がその日程等の記録である。

月　日　曜日	時間帯	ゲスト参加者	内容
5 月 15 日（金）	4 限 「ボランティア市民活動論」	田口 Co	下呂市の「ホープフル」「どんぐり」について、今までの活動の様子を写真等で紹介
5 月 22 日（金）	4 限 「ボランティア市民活動論」	ホープフル 中島会長	わが子がどのように育ってきたかといった親としての歩みや、親の会を設立した経緯について紹介
5 月 29 日（金） ※特別支援学校	4 限 「ボランティア	小学生から成人まで 5 家族の会	第 1 回交流会 自己紹介など

は休校、通所作業所なども休業していた時期	市民活動論」	員	ブレイクアウトルームでの個別の交流
6 月 27 日（土） ※学校や作業所が通常通りに戻ってきた時期	19：00～	高校生から成人まで 5 家族の会員	第 2 回交流 学生のリードで一緒に歌を歌う ブレイクアウトルームでの個別の交流
8 月 7 日（金）	昼休み	高校生から成人まで 3 家族の会員と中島会長、西野代表	第 3 回交流会 お互いに昼食をとりながら交流 自分の今日の昼食の紹介 「ネーミング班」から交流活動のネーミングについて候補の紹介と投票の呼びかけた結果「あんきなホットルーム」に決定
10 月 31 日（土）	14：00～	高校生から成人まで 3 家族の会員と中島会長	第 4 回交流会 「交流班」の企画した「さいころトーク大会」が行われた。
12 月 5 日（土）	19：30～	幼児から成人まで15家族の会員が参加。 同席した家族を含めると約30名が参加	第 5 回交流会 「交流班」が企画したクリスマス会を行う。 学生の進行でゲーム、歌、会員によるお話の読み聞かせなど 「ぬいぐるみ旅行班」が会員から預かったぬいぐるみの旅行風景をパワポで紹介

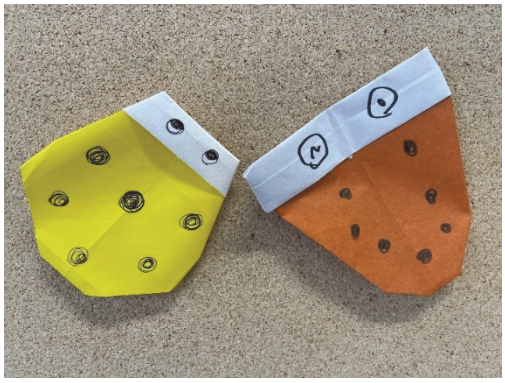
学生は、毎回の交流を計画運営する「交流班」、交流のネーミングを提案する「ネーミング班」、交流先から預かったぬいぐるみを旅行させてアルバム制作をする「ぬいぐるみ旅行班（のちに、「りもぐるみ」と名乗る）」に分かれて、この交流に取り組んだ。

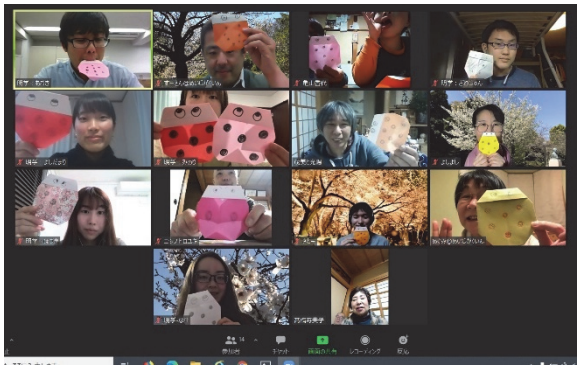
さらに派生的な活動も行われた。「交流班」のリーダーで毎回の交流で司会進行を務めた 2 年生 O さんから申し出があり、「1 Day for Others」として一般学生を募集し、下呂市の 2 団体とのお花見の会を企画し運営したいとのことであった。

3 月 24 日（水）	19：30～	下呂市からは 5 家族、参加学生は 5 名	1 Day for Others 「下呂市の団体とオンラインでお花見の会をしよう」 学生がそれぞれの自宅近くの花の名所などを画像で見せる 折り紙を一緒に折る

この時期、首都圏は桜の盛りを迎えており、一方下呂市は春まだ浅い時期であった。お互

いの異なる季節感の写真を見せ合ってオンラインでの「お花見」を楽しんだ。





２　３　2020 年度の活動を振り返って

①オンラインでの交流の効果について

交流を始めた頃の学生の感想として

「オンラインだと会話の間ができたときに対面以上にどうしていいか分からない」

「表情が十分見えなくて、相手のことを傷つけることを言ってしまったらどうしよう」

「交流相手にはまだ言葉が出ていない段階の子や、話すことが苦手な人もいるのに、楽しんでもらえるか心配」

「遊びを準備しておきたいけど、人によって好きなものは違うと思うから」

といった不安を訴える声が多くあった。

第 1 回・第 2 回の交流ではブレークアウトルームに分かれて、少人数で触れ合った。その時の感想は前向きなものに少しずつ変わっていった。

「不安だけど、人と出会うのはオンラインでもやっぱり楽しみ」

「交流相手のお父さんがお子さんと学生がうまく話せるように話をリードしてくれて嬉しかった」

「マジックをやってみたら画面の向こうで親子で笑ってくれて、こんなことで親しくなれるんだなってほっとした。次回までに別のマジックを準備して練習しておこうと思う」

活動の中で楽しさを見出したり、交流相手に心を許したりする気持ちが芽生えていることが分かる。

さらに第 3 回のランチをしながらの交流中にホープフル会員の高校生のＫさんが

「エレベーターが大好きで、明治学院大学にはどんなエレベーターがあるか興味がある。」

と話したときに、「ぬいぐるみ旅行班」の学生から

「Ｋさんのぬいぐるみを大学に送ってくれれば、ぬいぐるみと一緒にエレベーターを背景に写真を撮って送ってあげますよ。」

といったやり取りがあった。下呂市の団体の皆さんと明治学院大学生の皆さんという集団対集団という関係ではなく、下呂市のＫさんと明治学院大のＧさんといった個別のつながりができてきた段階だといえる。

このように回を重ねながら関係を深めていくことができ、授業としての最後の交流であったクリスマス会には下呂市から 15 組もの家族が参加し、楽しい時間を過ごした。会が終わっても別れを惜しむようにいつまでも画面に残って話している会員家族や学生もいて、遠く離れていて対面で会ったことはないけど、お互いが大切な仲間になっていることが感じられた。こうして自信をつけた一人の学生が前述の通り、授業を離れて 1 Day for Others を企画した。その「1 Day for Others」が終わった折に寄せられたホープフルのお母さんからの感想には次のようなものがあった。

> いつも学生さん達が企画の為に丁寧に向き合って下さり、感動しています。
> ズームだとどうしても発表会的になってしまいますが、折り紙したり歌ったりちょっとドタバタもあり、楽しかったです。
> 我が家は携帯なので、大画面ならＨ（お子さんの名前）も学生さん達のお顔が覚えられるのに‼と思います。皆さんにきれいなお花をありがとうとお伝え下さい🍀

文面から親子で交流を楽しんでもらえたことが伝わってくるとともに、お子さんもいつも司会をしてくれる大学生のお兄さんを少しずつ意識できるようになっていることが感じられるあたたかな感想である。

2020 年度の取り組みを振り返ると、オンラインだからこその不安な面はあったし、繰り返し交流して時間をかけて親しくなる積み重ねを必要とするが、オンラインを通してでも人と人とがお互いのことを知り親しくなり楽しい時間を分かち合う交流が成立したといえる試みであった。

②オンラインでの交流における 2021 年度に向けた課題点

2021 年度は 4 月から 5 月にかけて学校は休校になり通所作業所等も休業になった。そのため、大学生の授業時間に交流相手が家庭にいる状態であったことから、無理なく授業での交流をスタートさせることができた。

しかし、学校や作業所での日中の活動がほぼ通常通りになれば、日中に継続的な交流をするのは難しくなる。今回のような親の会等との交流は、今後は「クリスマス会」「花見の会」などとして休日や夜間に行う行事活動として実施することが適切と考えられる。したがって「1 Day for Others」など単発での扱いに向いているといえる。

一方で、平日の日中の交流活動は、障がいのある方が通所している作業所や通学している学校に移行していくことが適切であると考えられる。作業所は交流を希望しても必要な機器が整っていない場合もある。そのため、交流先への貸し出し用として、白金ボランティアセンター、横浜ボランティアセンターに 2 台ずつ貸し出し用の iPad を備えることにした。

3　2021 年度の活動

2020 年度の活動の成果と反省を受けて、2021 年度は下呂市の各団体と多様な形でオンライン交流を進めてきた。

３　１　「１Day for Others」による通所作業所との交流

下呂市にある「就労継続支援 B 型事業所　下呂市障がい者就労センター　ぎふちょう金山」（以下「ぎふちょう金山」）は 12 名の方が通所している作業所である。染色などの自主製品の制作作業や、食品の袋詰めなどの受託作業をおこなっている。

管理責任者兼サービス管理責任者後藤健氏（以下後藤所長）は、大学生の施設実習を受け入れるなど学生の育成にも理解があり、明治学院大学学生とのオンラインでの交流の申し入れも快く引き受けて下さった。昨年度末に交流用に準備した iPad を貸し出して交流を進めることになった。

「１Day for Others」での交流を考えて、参加学生を募集したところ、定員の５名の応募があり、その中で O さん、K さんがサポート学生となり、企画の段階から学生が関わって交流を進めた。

第２回の交流会では、２台の iPad を貸し出して、１台を交流先の参加者を写すカメラとして使った。もう１台を作業紹介の様子を写すカメラとして使い、参加学生は作業の様子を製品や作業の手元までじっくり見ることができた。

後藤所長からは、「交流で行ったしりとりやじゃんけんが利用者さんの間でブームになって繰り返し楽しんでいます。コロナじゃなくなったら、みんなで東京に行って明治学院大学にも行ってみたいねと話しています。東京や横浜という遠く離れたあまり縁のない地域が、一人一人の学生と画面で触れ合ったことで、急に身近なところとして感じられたようです。」といった感想が届いた。

月	日	曜日	時間	参加学生人数	活動
7	27	火	10：00～		参加学生顔合わせ
8	26	木	10：00～	５名	第１回交流会 自己紹介、しりとり
9	16	木	10：00～	５名	第２回交流会 作業所の仕事の紹介、クイズ

交流先からの嬉しい反応を受けて、サポート学生 O さん、K さんから次はクリスマス会を行う提案があった。サポート学生はそのままで新たな「１Day for Others」として参加学生を募集した。前回の経験を活かしサポート学生が交流先の後藤所長への連絡から企画運営を積極的に取り組み、学生主体の「１Day for Others」が行われたといえる。

手作りのクリスマスカードを事前に送っておいて、交流場面で開けてもらったり、事前にお互いに練習しておいたダンスを一緒に踊ったりと、オンライン交流であっても工夫次第で一緒にいる楽しさを感じあえることを実感できる活動であった。

月	日	曜日	時間	参加学生人数	活動
11	15	月	16：00～		ぎふちょう金山とサポート学生の打ち合わせ
12	6	月	15:15～		参加学生顔合わせ

12	13	月	15:15～	8 名	クリスマス会① 自己紹介　しりとり　次回の予告など
12	20	月	15:15～	8 名	クリスマス会② ダンス　クリスマスカードなど

３　２　ボランティアチャレンジファンドを活用した中学生との交流

前年度の猪瀬センター長の授業「ボランティア市民活動論」で結成された「ぬいぐるみ旅行班」は交流先の団体の皆さんからぬいぐるみを送ってもらい、ご本人に代わってぬいぐるみが首都圏を旅行する様子を写真に撮ってアルバムを制作しプレゼントする活動を担当した。この活動には「いつでもボランティアチャレンジ（以下、いつボラ）」から資金提供を受け、「りもぐるみ」という名称で取り組んだ。

「りもぐるみ」のメンバーはそのままで、さらに１年間の新しい活動を目指して「ボランティアファンド学生チャレンジ（以下、ボラチャレ）」に挑戦し、独自での活動を行うことになった。その交流先としてお願いしたのが「下呂市立金山中学校」であった。母語が日本語ではない外国籍のＢさんが別室で授業を受ける時間にオンラインで交流することになった。日本に来て間もないため、まずは年の近い大学生と親しく触れ合い、安心感を育むことが学校の希望であった。

交流が始まると「りもぐるみ」のメンバーは、前年度の授業の交流では３つの班で協力して行っていた活動を全て背負うことになり、活動のスタートは戸惑いが大きかった。特に前年度は「交流班」「ネーミング班」が行っていた相手と親しくなる部分の難しさを、実際に自分たちが前面に出て取り組むことで改めて感じた。それでも、リーダーのＧさんが中心になって ZOOM のホワイトボードを使って絵しりとりをすると、日本語の発話に抵抗のあるＢさんが安心して応じてくれることが分かり、まずは音声ではなく絵を描くことで親しくなろうとした。

また、ぬいぐるみを先方から送ってもらう前に、まずは学生一人一人が自分のぬいぐるみをＢさんに送った。Ｂさんは学校内のあちこちに学生のぬいぐるみを連れていき写真を撮ってはそれを学生に見せてくれた。自分の撮った画像を見せるという発話が少なくても気持ちの通じる活動がこの頃のＢさんのニーズに合っていたといえる。そういった中でＢさんの発語も少しずつ増えてきた。また、大学生が話しかけた日本語が分からない場面では、パソコンで検索して英語に変換し、自分なりに理解するようになってきた。嬉しそうに大きくうなずいて理解できたことを学生に示す姿が見られるようになった。

交流の窓口である熊﨑和彦主幹教諭と交流場面に同席してくださる中村いすず支援員からＢさんの成長と学生の関与による効果について、たびたび学生にあてて声をかけていただいたりメールをいただいたりした。それが学生の大きな励みとなっていた。

こうして安定的に学生とＢさんが交流できるようになったタイミングで、先生からＢさんにとって少し抵抗のある活動が提示された。それはＢさんが自分で書いた日記を読んで学生に聞かせてそれに対する学生からの質問に日本語で答えることや、Ｂさんが事前に考えた日本語での質問を学生に問いかけそこから会話をするというものであった。安心できる仲間となった学生が相手なら、苦手なことだけどチャレンジしてみようとＢさんが思える絶妙なタイミングでの先生の提示にＢさんが応じて日記や質問が活動に加えられた。

Ｂさんの成長に沿った交流を続けながら、Ｂさんと他の生徒のぬいぐるみも大学に送ってもらい、学内や首都圏でのぬいぐるみ旅行を実施した。年度末にはぬいぐるみ旅行のアルバムを届けることができた。「ボラチャレ」の期限を越えたので、改めて「いつボラ」を申請して資金を得た。

Ｂさんと一緒にぬいぐるみを送ってきた生徒の中には、不慣れな相手との関りに抵抗がある生徒もいたが、顔を会わせなくてもぬいぐるみを通して触れ合う形の「りもぐるみ」には安心して参加できたようである。さらに、機会があれば学生とオンラインで話してみたいという希望も語っていたということであった。

「りもぐるみ」の活動の当初の発想は、コロナ禍で旅行に行けない交流相手のぬいぐるみを預かって旅行を実現するといったものであった。実際に活動してみるとノンバーバルなコミュニケーションを希望する相手との交流に特に有効な交流方法であることが分かってきた。

Ｂさんと「りもぐるみ」とのオンライン交流は、2021 年 9 月から 2022 年 3 月まで、毎週 2〜3 日、朝 9 時半から約 1 時間、合計 55 回にも及んだ。

2021 年度も終わりに近づいた頃に、Ｂさんが今年を振り学生に向けて書いた日記には、Ｂさんが学生のことを「好きだ」と書いてくれている。Ｂさんが人の気持ちに寄り添える生徒で、そのＢさんのよさがこの少人数の活動では安心して表出でき、それが支えとなってＢさんの所属している大人数の学級の仲間のなかにも入れるようになってきたことがうかがえる。

金山中学校からは「りもぐるみ」に対してさらに別の依頼もあった。岐阜県内の全小中学校では毎年人権週間に合わせて「ひびきあいの日」という学校ごとの人権教育の全校活動が

行われる。金山中学校では今年度ボランティア活動をテーマにして全校生徒が学年を超えた小グループで話し合いを行った。その活動のゲストスピーカーとして「りもぐるみ」メンバーが招かれた。当日は ZOOM の画面を通して、メンバーそれぞれがボランティア経験や活動に対する思いや願いなどを全校生徒に向けて話し、生徒からの質問に答えた。

「りもぐるみ」メンバーは、Ｂさんの周囲の生徒たちと触れ合いＢさんへの理解が深まった。また「りもぐるみ」の話を聞いた生徒達は、Ｂさんの立場を改めて考えるきっかけとなったと思える。この頃からＢさんの会話に友人の個人名が出るようになり、ぬいぐるみの写真に他の生徒が一緒に写っていて「これは友達の〇〇君」と紹介することもあった。

こうして「りもぐるみ」の 2021 年度の活動は終えたが、活動を続けながらリーダーのＧさんは新しいメンバーの発掘にも取り組んできていた。活動途中から 4 名ほどのメンバーが加わった。そのメンバーから 2022 年に活動を引き継ぎたいという申し出があり、引継ぎがなされ新しい体制で活動を続けることとなった。

３　３　小学生とボランティアサークルとの交流

対面でのボランティア活動ができないなか、ボランティアセンターでは、学内のボランティアサークルがどういった活動状態であるのかをサークルの代表などにオンラインで聞き取り調査を行った。その結果、活動ができていないサークルがほとんどで、対面活動が 2 年間できていないことから、サークルを閉じることになった団体もあることが分かった。

調査に応じたサークルの一つ「OPENROOM」は障がいのある方の支援活動を行ってきた大学公認のボランティアサークルである。コロナ禍になる前は都立特別支援学校で月ごとに行われる卒業生の集会の手伝いなどの定期的な活動の場があった。聞き取り調査には 3 年生の代表と副代表が応じ、長く活動ができておらず、1 年生 2 年生は入部して以来ほとんど活動の機会がないままであるということであった。

後日改めて連絡をとり、ボランティアセンターで提供できそうなオンラインでの活動としては、継続的な交流活動、あるいは単発の行事での交流活動とが考えられることを伝えた。代表Ｋさん、副代表Ｍさん、Ｒさんからは、どちらもやってみたいという意欲的な返事があった。

そこで継続的な交流を下呂市立竹原小学校あおぞら学級にお願いした。担任の今井幸子教諭と志冨典子教諭によれば、あおぞら学級の一部のお子さんはオンラインでの交流を近隣の小学校と定期的に続けているとのことであった。今回の明治学院大学の申し出に応じてあおぞら学級全員で大学生との交流を行えば、それも成長の機会として生かせるのではないかという前向きな返事をもらえた。

交流を依頼した先が、すでにオンラインでの交流を行っていてその効果と課題の理解がなされていたことで話がスムーズに進んだといえる。

竹原小学校あおぞら学級と「OPENROOM」の交流は以下のような日程で行われた。

月	日	曜日	時間	
10	18	月	15：30〜16：30	先生と学生の打ち合わせ
11	10	水	8：25〜9：10	自己紹介　しりとり
11	15	月	8：25〜9：10	自己紹介続き　しりとり
12	6	月	8：25〜9：10	小学生の発表　クリスマスクイズ ツリー折り紙の制作
1	17	月	8：25〜9：10	「1 Day for Others」
1	19	水	8：25〜9：10	小学生の発表　お正月クイズ
2	21	月	8：25〜9：10	小学生の発表　節分クイズ
3	23	水	8：25〜9：10	小学生の発表　思い出クイズ

「OPENROOM」の３年生は、コロナ禍に入る前に活動経験もあり、最初の交流から内容を主体的に考えて、先生方との事前の打ち合わせも学生の力で進めることができた。交流を重ねるなかで、一人一人のお子さんの興味関心を理解して、それを次のクイズの材料にするなど繰り返しの中でお互いが成長できる姿が見られた。

１月の交流は「１Day for Others」として一般学生の参加も広く募集して行い、この活動の楽しさと意義を学内の仲間に知らせる役割も果たした。「OPENROOM」は対人支援を長く続けてきたサークルであり、今回コロナ禍で従来の活動はできなくても、サークルとして大切にしてきたことが引き継がれているといえる。活動機会が得られなかった１年生、２年生の部員もこの交流で活躍することができ、2022 年度の代表、副代表となり交流を継続していくこととなった。あおぞら学級のお子さんが年度最後の交流で学生に向けて発表してくれた振り返りでは、それぞれのお子さんが交流を生き生きと楽しみながらそれを成長の機会にして、自分の伸びを小学生ながら自己理解していることが伝わってきた。

３　４　親の会等の団体とボランティアサークルの交流

ボランティアサークル「OPENROOM」は単発の行事活動にも取り組みたいという意向であったため、前年度は授業を通して交流を行った「ホープフル」「どんぐり」のクリスマス会の企画運営を依頼した。

受け入れる側の両団体は昨年度の経験があるので、「OPENROOM」に対して見通しを持った提案がなされた。「昨年は自己紹介に時間がかかったので短くなる工夫をしてほしい。」

「手品の得意な会員がいるからその人の手品を見せたい」などといったものであった。「OPENROOM」からは一緒に歌いたいクリスマスの歌を３曲示して、会長、代表に選んでもらうなど、よりよい活動になるような具体的なやり取りを重ねて当日を迎えた。

月	日	曜日	時間	内容
11	14	木	19：30〜20：30	会長代表と学生の打ち合わせ
11	24	水	20：00	リハーサル
12	4	土	19：30〜21：00	クリスマス会（歌、絵本の読み聞かせ、しりとり、手品、首都圏のクリスマス映像の紹介、飛騨地方の冬映像の紹介など）

当日は前年度を超える20家族ほどの会員が参加して行うことができた。ここでのしりとりは「自宅にあるものしりとり」で、各家庭にある実物を画面で見せながらのしりとりであった。オンラインでみんなが自宅で参加しているからこそできる活動を豊かな発想力で工夫した楽しい取り組みであった。

手品を披露したＫさんのご家族からお礼のメールをいただいた。

> おはようございます
> 夕べはありがとうございました
> オンラインでしたが、久しぶりに皆の元気そうな顔が見れて嬉しかったです。絵本を聞きながら思わず顔がニコニコになりました。しりとりも何がでてくるか？ワクワクしながらみてました。皆が楽しめたクリスマス会を学生の皆さん企画や準備ありがとうございました。つたないマジックでしたが、皆さん見てくださってありがとうございました

３　５　小学生と読み聞かせを通した交流

ボランティアサークルに対する聞き取りの時に、児童教育研究会の代表Ｈさんからも子どもと触れ合える活動の機会があれば取り組みたいという要望があった。そこで、Ｈさんがサポート学生となりオンラインで子どもに絵本を読み聞かせる「１Day for Others」を設定した。

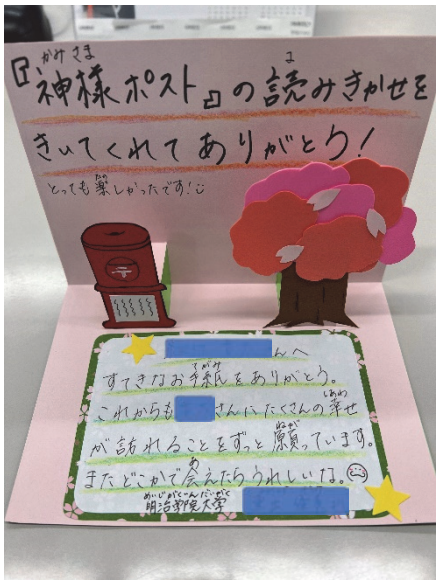
交流先を依頼したのは下呂市立金山小学校である。「りもぐるみ」の活動で金山中学校の窓口となっている熊﨑和彦主幹教諭は金山小学校にも兼務されていることから話を進めてもらうことができた。

読み聞かせのお手本や指導は下呂市のボランティア団体「おはなしもくば」（以下「もくば」）に依頼した。この団体に絵本作家の月夜ぼたん氏が所属しており、その著書「神様ポスト」をここでの読み聞かせに取り上げることにした。

月	日	曜日	時間	参加学生人数	内容
3	7	月	9：00〜11：00	6名	読み聞かせ練習会 「おはなしもくば」によるお手本の読み聞かせ、作者の講話、朗読のポイント

					についての講話、読み聞かせの練習
3	8	火	8：25～	6 名	学生の自己紹介 小学生への読み聞かせ 子ども達の感想

前日練習は「もくば」のメンバーと一緒に行った。翌日の小学生への読み聞かせはサポート学生のＨさんが進行し、学生が中心となり子ども達と触れ合う形で進めることができた。「神様ポスト」のお話なので、当日は教室にポストを置いてもらった。お話を聞いてもらった後に小学生がお手紙を書いてそのポストに投函した。そのお手紙が大学に届いてから学生が分担して返事を送った。オンライン画面での交流だけでなく、紙に書いたお手紙を届けあうという交流もできた。



３　６　2021 年度の活動を振り返って

2020 年度に「ボランティア市民活動論」の授業を通じてオンライン交流をしたことが足がかりになって、2021 年度は様々な形で下呂市の皆さんとオンラインで交流を深めることができた。活動の形態、活動の目的、交流の相手、交流の頻度などを試行錯誤しながら交流の効果を高めるよう試みることができた。

2 年前の開始当時には、対面での交流が叶わない状況なので、次善の手段としてオンラインでの交流を選択した要素が大きかった。今後は対面かオンラインかという選択ではなく、場面や目的に応じてオンラインも柔軟に選択できたり、対面とオンラインを効果的に併用したりする試みがなされることを期待している。

４　謝辞

明治学院大学学生とのオンラインによる交流にご協力いただいた下呂市内の団体、施設、小中学校の皆様に心より感謝申しあげます。

（ボランティアコーディネーター＊　田口めぐみ）

＊2017～2021 年度

Ⅰ．2021 年度活動報告

2021 年度ボランティアセンター行事一覧

4 月	ボランティアセンター・ガイダンス（オンライン） ボランティア・サティフィケイト・ガイダンス（オンライン）
5 月	ボランティア・サティフィケイト・ガイダンス（オンライン） 戸塚まつり参加（オンライン） 2021 年度第 1 回ボランティアセンター運営委員会
6 月	ボランティアファンド学生チャレンジ 2020 中間報告会 1 Day for Others 春 実施（2 件） インテグレーション講座（登録 1 年生対象）
7 月	ボランティアカフェ①開催 1 Day for Others 春 実施（1 件）
8 月	ボランティアフェア開催 1 Day for Others 春 実施（3 件） トークセッション コロナ禍のボランティアを考えよう（学生団体ヒアリング）
9 月	
10 月	ボランティアカフェ②開催
11 月	ボランティアカフェ③開催 ボランティアファンド学生チャレンジ 2021 募集 第 2 回「ボランティア大賞」開催 インテグレーション講座（登録 1〜3 年生対象） 2021 年度第 2 回ボランティアセンター運営委員会 1 Day for Others 秋 実施（3 件）
12 月	ボランティアカフェ④開催 1 Day for Others 秋 実施（2 件）
1 月	1 Day for Others 秋 実施（4 件）
2 月	ボランティアカフェ⑤開催 1 Day for Others 秋 実施（2 件）
3 月	ボランティアカフェ⑥開催 1 Day for Others 秋 実施（8 件） ボランティア・サティフィケイト・プログラム　修了式 2021 年度第 3 回ボランティアセンター運営委員会 オープン・キャンパス参加

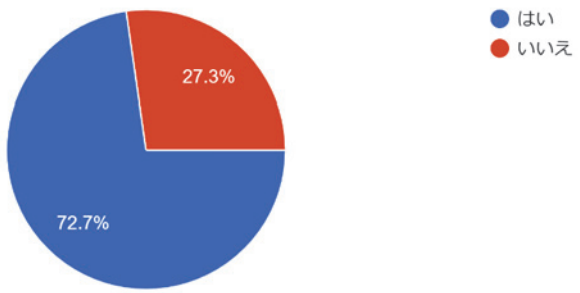
2021 年度、コロナ禍の中で行った「ボランティアサークルインタビュー」を振り返り

ボランティアセンター（以下、ボラセン）では 2020 年 3 月より、大学ホームページ内に「新型コロナウイルス感染症に伴うボランティア活動についての考え方（以下、考え方」)」を掲出していて、2021 年度終了までに 4 回の内容更新を行った。
「考え方」は、学生部発信の「新型コロナウイルス感染症に伴う課外活動の取り扱いについて」を依拠しつつ、ボランティアのもつ特性を考慮しながら、折々のコロナウイルス感染症の状況を踏まえた発信を心掛けた。そして 4 回目の更新時には、これまでボラセンの視点のみで「考え方」を更新してきたことの検証も踏まえ、コロナ禍の中で活動しているボランティアサークルの意見反映も目指すこととした。
結果として、このインタビューはこれまで発信してきた「考え方」の検証に留まるだけでなく、学生ボランティア団体とボランティアセンターとの関係性や、学生ボランティア団体の立ち位置など、多くの気づきを残すことになった。

ボランティアサークルインタビュー
（2021 年 6 月 22 日〜7 月 6 日にオンラインで実施）
※下記は、インタビューの結果をアンケートにして纏めたものである。

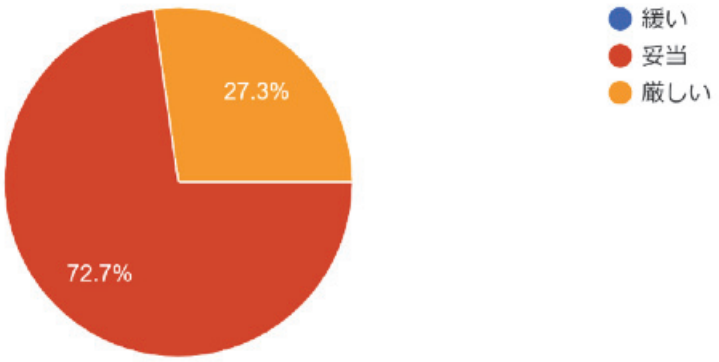
①活動団体名※今回インタビューに協力の団体
NYANKO、PEACE☆RING、児童教育研究会、OPENROOM
手話サークルぽっけ、ぽけっと、ハビタット MGU、JUNKOASSOCIATION
(順不同)

② 大学HPに「ボランティア活動についての考え方」があるのを確認している
11 件の回答



③　「ボランティア活動についての考え方」　の内容について

11 件の回答



④　③の質問について、そう感じた理由をご記入ください。

※青字が「「考え方」の内容が厳しい」の意見

・サークルで主催のカフェにおいてオンライン開催の難しさを感じており、対面授業が再開している今は特に対面に戻したいと考えているため。

・コロナ禍でのことを踏まえているから。

・ボランティアを行なったことで感染者が出ると元も子もないから。

・コロナ禍においてボランティア活動は密になりやすいと思うので、自宅でオンラインなどを活用した活動が求められていると思う。

・感染を広げないための基本的な指針と思ったから。

・「考え方」の「ボランティアサークルとして一か所に集まり、対面で行う活動は引き続き積極的に自粛の検討をお願いします。」について、一言に対面活動といっても、感染するリスクは活動する環境などによって差異が生じると考える。たとえば、大人数での大規模な活動は感染リスクが高まる恐れがあるが、三、四人程度の少人数に分けたグループでの活動であれば感染リスクを比較的最小限に抑えられることが期待できるだろう。そのため一概に対面活動の自粛を要請することは妥当ではないと考える。また「自粛」という言葉も定義が非常に曖昧である（強制ではなくあくまでも任意という意味になる）。そこで対面活動を「許可する」或いは「禁止する」、部分的に許可する」、条件付きで許可する」などはっきりした対応をしたほうがよいかと考える。

・コロナ禍において、集団でボランティア活動を行なったとして、もし感染を広げてしまったら逆に大変な目に遭わせてしまう危険性もあるため、一時的な活動自粛は妥当であったと考える。

・ボランティアをするために、誰かの命を落としてしまうのはボランティアの理念において矛盾すると思うから。

・人が集まることへのリスクをしっかりと考慮できている。

・規則の量がちょうど良いと感じたから。

⑤コロナ禍での活動で葛藤したことがあれば、その内容を教えてください。
・やろうにも人が集まるか心配。
・オンラインでできる活動に縛られてしまうこと。
・対面での活動を検討した際に、学生課及び顧問の先生から厳しいと言われてしまったこと。
・活動したいのにできない。
・活動国現地にいけると思ってサークルに加入したが行けず、モチベーションが下がってしまった。
・オンラインだと本来より場が硬くなってしまっている。
・対面活動ができないことによりメンバーのモチベーションが下がってしまい、メンバーの活動に対する参加度が著しく低下した。
・対面活動を再開すべきか、また参加するべきか迷う部分が多くあった。
・活動以外の学校生活においても同じだが、人と直接関わることができなかったので、再開後の活動における人間関係が心配。

⑥コロナ禍の活動において、自団体で工夫していること、もしくは他団体の工夫で感心したことがあれば教えてください。
・（昼休み活動時間以降の）3 限も引き続き話せるようにしている。
・オンラインでできるボランティアを探していること。
・モチベーションを保つためにも出来るだけ現地の人との交流をすること。
・現在はオンラインで zoom を使って活動している。対面活動が再開した際には、オンラインと対面を併用にして行っている。
・zoom で顔合わせしてから、meeting を行うことで再開時の人間関係の緊張がほぐれる。
・オンラインショッピングによる資金集めなどは、対面でなくてもできる良い例だと思った。
・家族制度：メンバーを三、四人程度の少人数の”家族”グループにわけ、その”家族”ごとで交流を行ったり、雑談などを行っている。
・自団体はオンラインでブレイクアウトルームを活用しながら、カフェ（対話型カフェ）を運営していること。他団体も同じようにオンラインで工夫していると感じた。

⑦「新型コロナウイルス感染症に伴うボランティア活動についての考え方」に加えてほしいことがあればお示しください。
・付け加えてほしいことではなく、修正してほしいことになるが、先にも記載したように「自粛」という言葉は定義が非常に曖昧であるため（強制ではなくあくまでも任意になるから）、そこで対面活動を「許可する」、或いは「禁止する」、部分的に許可する」、条件付きで許可する」などはっきりした対応をなされたほうがよい。
・オンラインでの活動に対するアドバイス。

⑧コロナ禍の状況で、ボラセンへのご要望があれば是非教えてください。
・ボラセンと学生団体との繋がりをもっと濃密なものにしていき、活動のアドバイザーとして助言していただければ幸いかと。
・決して縛るものではなく、緩い横の繋がりの形成があるといい。
・様々な情報の提供をいただけるとありがたい。
・団体同士で意見交換をする機会がもっと欲しい。

以上、アンケート結果

アンケートに現れないインタビュー回答には、「ボラセンが何をやっているところなのかわからない」、「そもそもボラセンの使い方がわからなかった」という耳の痛い意見もあり、ボランティアの特性としての自主性は重んじながらも、ボラセンから学生団体に歩み寄る必要性も考えさせられている。
あわせてこのことは、2019 年度に行ったボラセン内にあった学生セクション解体と、その後の学生支援の在り方について、コロナウイルスの影響は否めないものの、うまく周知できていない裏返しでもあり、今後開かれたボラセンになっていくためにも、方針や活動はもとより、ボラセンの様々な側面も含んだ広報/発信に努めなければと感じさせた。

最後に興味深かったエピソードとして、参加依頼をした学生団体の中に、「そもそも自らの団体をボランティア団体と思っていなかった」、「今回のインタビューで、ボラセンから声がけがあることを意外に感じた」という声があったことを残すとともに、普段より「ボランティアってなんだっけ」を集う人が問い、話し合い、共有するような、固い内容でも実は柔らかさを持つ「場」づくりが、ボラセンでできれば…、と思った。

参考：大学ホームページ内
「新型コロナウイルス感染症に伴うボランティア活動についての考え方」
https://www.meijigakuin.ac.jp/news/archive/2022/l4M5tORz.html

（職員　高橋千尋）

＜2021 年度来室者数＞

2021 年度は前年度に比べ、数値はかなり増えている傾向にあるが、新型コロナウィルス前に比べ減退していることは否めない。オンライン対応については前年度踏襲で実施しているが、少しずつ定着している様子があり、約 2 倍に増えている。引き続きオンラインの実施も組み合わせて来室者数の増加を図りたい。

年度	月	来室者数(白金)	来室者数(横浜)	来室者数(オンライン)	年度	月	来室者数(白金)	来室者数(横浜)	来室者数(オンライン)
2020	4	2	15		2021	4	53	231	74
	5	0	0	-		5	15	39	41
	6	0	0	-		6	14	136	40
	7	3	4	5		7	30	97	15
	8	0	0	7		8	7	7	14
	9	16	56	8		9	16	51	9
	10	41	102	21		10	30	90	17
	11	33	72	43		11	48	152	25
	12	23	73	10		12	39	165	3
	1	11	14	6		1	26	77	7
	2	5	22	4		2	4	8	-
	3	23	19	0		3	47	29	7
	計	157	377	104		計	329	1082	252

1　ボランティア大賞

総括

本学では「明治学院大学教育連係・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」をはじめ、学生のボランティア実践と、大学の学びとの融合を意識した取り組みがなされてきた。その成果を発表してもらい、学内外に発信していくことで、教育理念である Do for Others を具体化していくことを目的に 2020 年度から開始したのが「ボランティア大賞」である。

前年度からコロナ禍に見舞われ、時期によって緊急事態宣言やまん延防止法など、学生の活動を大きく制限してしまう状況の中で、企画の段階と実施の時期とでは社会の状況も大きく変化しているなど、学生にとっては活動をしづらい一年であったが、その中でも工夫した様子がよく伝わる内容が多かった。

■応募資格
本学在学生（院生含む）による活動であり、応募は個人によるものとする。
※科目等履修生、団体としての応募は除く
教育理念（Do for Others）の具現化を図る活動であると言えること
応募者は 1 次審査通過の場合、必ず 2 次審査時の発表を行なえること
申請者が明治学院大学入学後の活動を審査対象とする
■申請期間
9 月 21 日（火）～10 月 6 日（水）
■広報
・7 月下旬からポートヘボン、ホームページニュース欄、ポスター掲示等を通じて実施
■応募状況
・期間内に 11 件の応募があった。
■審査
（1）予備審査　10 月 8 日（金）にボランティアセンター内で実施。9 件を選定した。
（2）一次審査　予備審査で選定した 9 件をボランティアセンター運営委員に送り、審査をした。その結果、合計の上位 6 件について二次審査を行うこととした。
（2）二次審査　11 月 6 日（土）　オンラインにおいて、一次を通過した 6 件のプレゼンテーションを実施した。
（3）最終審査　11 月 6 日（土）　審査員により合議を行い、各賞を決定した。
■審査結果
【大賞】
「洋服に新たな命を-4 年間のボランティア活動で見えたもの」藤井　るな(国際学部国際学科 4 年)
【研究部門賞】
「希望と安心のための実践・平和活動と学習支援ボランティアの繋がり」林　ことね(法学

部政治学科 4 年)

【実践部門賞】

「思いを形に～バルーンアートプロジェクト～」河森　明依(心理学部教育発達学科 4 年)

【奨励賞】

「在住外国人（留学生）の立場から、外国につながるこどもたちの教育支援活動にかかわりながら、学んだこと、広がったこと、つながったこと」JIA RU (社会学部社会福祉学科 4 年)

「学習と心の拠り所」鈴木　日菜子(法学部法律学科 3 年)

「日本語を教えるボランティアを通じて学んだ事」三河　眞弓(法学部消費情報環境法学科 3 年)

※学年は応募当時

今回は、自らの学びの深まりと、ボランティア活動の広がりとを時系列でわかりやすく報告してくれたもの、学校や企業など多くの方々との協力を得て行ったもの、また、学習支援地道に実践してきたことから学んだものなどそれぞれが特徴ある内容であった。

昨年の振り返りでも出されたことであるが、現場での実践を通じて学んだことも「帰納法的」にフィードバックする視点をもつことは次年度以降の課題である。

（ボランティアコーディネーター　菅沼彰宏）

表彰式：2021 年 11 月 30 日　白金校舎記念館大会議室において

【ボランティア大賞】

洋服に新たな命を～4 年間のボランティア活動で見えたもの～

国際学部国際学科 4 年　藤井るな

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

大学一年次に履修した田中教授の文化研究の基礎でファストファッションの闇を描いた映画“The True Cost”を見たことがキッカケとなった。講義の中で、今自分が着ている服が一体どこから来たのか、誰によってどんな背景で作られているのか、そして最終的に廃棄される服の量が膨大であることを学び、映画を見た。ファッションが好きだと思いながらも、なにも知らず、自分も負の連鎖に加担していたことに絶望した。そして、自分のように問題を知らない人が多くいて、問題とそれをどう解決するのかを知り、自分の選択についてより多くの人が責任を持てば、あらゆる社会課題の解決の一歩になるのではないかと考え、MGCloset を立ち上げた経緯がある。

すべての活動の根幹には、より多くの人に課題を知ってもらい、そこへの対処を一人一人が考えることで、問題が解決すると考え、学内外の人を巻き込みながらのイベントや啓発活動を続けた。

私は、ボランティア活動は座学だけでも、実践だけでも実りある活動をするのは難しいと考える。実際に、活動を長期に渡って続けていたが、関連する講義をいくつも履修することで、自分の活動に対しての頭の整理を行っていたと思う。講義で学ぶ事例の内容と直接的に同じ活動はしていないが、団体メンバーの意識の維持の仕方だったり、継続というところだったり、常に自分の活動に置き換えていた。この事例に沿わせれば、今の団体の壁は解決できると思って実践したり、悩んでいるところが同じで共感したり、とさまざまだった。学びと実践の双方向でできたことは結果的に、どちらにも自信がつき、相乗効果を生み出していたと感じる。

2. ボランティア実践の内容

実践期間	実践	実践先
2019/9	①Where it again!? 古着で構成されたファッションショー	学内外問わず
2020/5	②Online cinema	明治学院大学
2020/4 ～12	③MGCloset Magazine	学内外問わず
2020/11	④白金ファッションショー(オンライン)	学内外問わず

2020/12	⑤1Day volunteer	学内、グリーンピースさんと企画
2020/6　～現在	⑥UP!UP!UP!でキニトピ、隔週でのディスカッション	
2021/ 3	⑦ジェンダー問題から見るファストファッション	学内外

① 服が及ぼす環境や人権問題の影響を踏まえ、今ある服を大切にすることを啓発するため、学内の生徒から古着を集め、衣装を作成。入場チケットを販売。フリマも開催し、1着あたり気持ちの寄付をしてもらうことで古着の循環も目指す。売り上げは NGO グローバルヴィレッジへ寄付。学内外から100人ほど参加。

② MGC を設立したきっかけにもなった映画を上映した。服を購入する際や生活の中で何か一つでも意識してもらうことを目的にした。

③ オンライン雑誌を作成し、他の団体や企業に取材し、本の紹介などを行った。
目的：学外の活動についての認知、啓発。

④ 学外の学生団体とコラボや古着の着回し動画を作成し、発信。
目的：コロナ禍でも情報を楽しく学内外問わず発信。

⑤ 衣服×プラスチック問題のイベントを企画し、開催。講義をしてもらい、ディスカッションと T シャツ1枚をエコバックにするというワークショップ。
目的：楽しく社会課題に対して関心を持って自分事にしてもらう。自分の生活で実践してもらう。

⑥ UP!UP!UP!でジェンダー問題をテーマに、隔週で学習会キニトピを行った。多様性を意識。

⑦ ファッションという視点から、生産者側のジェンダー格差を参加者とともに考えた。

3. 実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

この活動を始めるキッカケとなったのが、先ほども記載したように「文化研究の基礎」でファストファッションの闇を描いた映画“The True Cost”を見たことであり、同時期に履修していた「サスティナビリティ学 1.2」で、人間が農薬などを使用することで自然界の生態系を壊してしまうこと、結果的に人間の健康被害にも繋がることを学び、映画で描かれていたコットンの栽培に使用していた農薬によって生産者側の健康被害が出ていた光景が結びついた。消費者が問題を知らず、安い服を大量に欲しがるために、どこかで誰かが犠牲になり、命を落とす。さらには、環境にも負荷を与えている。今からでもできることをするために MGCloset としての活動が始まる。環境負荷が少なく栽培されるオーガニックコットンにも関心があり、二年次の大岩ゼミでのブータンのフィールドワークでは、オーガニックコットンの栽培、糸紡ぎ、染色、織りなどを現地の人と実際に体験することで、作り手側の苦

労を再確認し、一着の衣服を大切にすること等を自分たちが発信していくことの大切さを感じる。

また、衣服の生産に従事している方の労働環境を学んでいくうちに、過酷労働をしている人の割合は圧倒的に女性が多かったことにも疑問を感じ、ジェンダー論を履修した。そこで、ジェンダーにまつわる様々な問題を知ったことで、ファッションの問題だけでなく、ジェンダー問題についても知ってもらう機会を作ると同時に自分も知識を付けるために、「UP!UP!UP!」を友人と共に立ち上げ、イベント開催や勉強会を定期的に行った。興味のあることを講義で学び、自分自身の活動でアウトプットするということを貪欲に行った 4 年間だった。

4.　今後の課題、方向

「維持可能な衣服との付き合い方」の論文も書き終え、卒業を迎えた。ボランティア活動は継続が一番大切で、難しい。さらに、ただ継続することは簡単だが、その時の状況は刻々と変化するため、対象者と相談しながら、本当に必要なものを判断しなければならないことを学んだ。これも踏まえつつも、私は社会人となっても常に吸収し、状況を見ながら、この活動を変化させつつも継続させたいと思っている。

また、この活動を通して、気候変動の抑制にも関心を持ったことがキッカケで、「Green Innovator Academy」というエネルギー関連を学ぶアカデミーに所属した。そこで、フィールドワークで福島の第一原発を訪ねた。根深くて、とても大きな問題だが環境問題を考えるときにエネルギー問題は切っても切り離せないことだと感じたが、一人一人の生活に密接に関わることであるので、より多くの人に知ってもらう必要がある。その学びも含め、卒業後も OB として学内の電力を再生可能エネルギーに変換するための活動にも小さいことからでいいので力を入れていきたい。

将来的には、様々な社会課題を色々な人に発信することのできる企業を設立したいと考えているため、今ある繋がりを大切にしつつ、同じ志のある仲間の輪を広げ世界に影響をもたらしていきたい。常に色々なことにアンテナを張り、当事者意識を持つことを忘れず、行動で示せるような社会人になる。

「MGCloset で企画した
古着ファッションショー

【研究部門賞】
平和と希望の実践～平和活動と学習支援ボランティアのつながり～

法学部政治学科４年　林ことね

１．ボランティア活動に至るまでの経緯

大学入学後、大きく分けて「平和に関する活動」と「学習支援」の二つを行ってきたが、すべての始まりは一年次に履修した「現代平和研究１」である。国際学部の高原孝生教授の授業で、毎週ゲストスピーカーにお越しいただき、戦争、被爆、核兵器などに関する講義を受けた。講義を受ける中で、平和を希求するために必要なことを考えた。授業の繋がりで一年次の夏休みに広島長崎スタディツアーに参加。ツアーの中で被爆者の方と出会い、その方の口から語られた「戦争で亡くなった人にも、一人ひとり夢や希望があった」という言葉があった。このお話から希望や夢をもてることが当たり前ではないと気づいた。今でもこの言葉は私を動かしている。

ツアー終了後、一息ついていた時に、貧困を理由に学びたくても学べない、学力が理由で将来の選択肢が少なく希望が持てない子どもたちの存在を知った。被爆者の方から頂いた夢や希望の気づきと子どもたちの現状が繋がり、貧困世帯への学習支援に取り組み始めた。

２．ボランティア実践の内容

今回取り上げるボランティアはサークル活動として運営した「Café du PRIME」と学習支援ボランティアである。

一つ目は Café du PRIME である。スタディツアー終了後から、「平和について考え・学び・発信する」をモットーに活動する大学の任意団体 Peace☆Ring に所属している。活動の一つとして、国際平和研究所（PRIME）と共に Café du PRIME を運営している。Café du PRIME とは社会問題や時事問題、また 3 月に震災、8 月に広島長崎のような月ごとの記憶を扱い、学生、教職員の皆さま、地域の方とディスカッションを行う会のことで、週に 1 度、昼休みに開催している。天皇の代替わりについてのイベントや横浜キャンパス内に ICAN のバラを植えたことについて、新聞に掲載していただいたこともある。

また、他大学の友人と Café du PRIME について話していたら、学生や教員が一つの空間で「平和」をテーマに話し合える環境があまりないことを知った。友人との会話をきっかけに、首都圏の大学生が参加できる「対話カフェ」のイベントを開催した。明治学院大学白金キャンパスをスタートに対面では 3 回、コロナ禍ではオンラインで全国から参加できるイベントに切り替えて実施した。

二つ目は貧困世帯への学習支援である。一年次の秋には NPO 法人「Learning for All」（以下、LFA）にて、二年次の一年間は「湘南戸塚 YMCA」（以下、YMCA）にて取り組んだ。どちらも学習支援だけでなく、居場所支援も兼ね合わせている。LFA では週に 1 回、葛飾

区内の中学校に行き、カリキュラムに沿った学習と自己肯定感を高めることを目的とした「褒め」を意識した会話を重ねた。YMCA では戸塚駅近くにある湘南戸塚 YMCA の教室で、生徒がやりたい科目、範囲を一緒に進めた。中学校で演劇クラブに所属している生徒と一緒に「外郎売」を覚えようとしたこともある。

3．実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

明治学院大学での生活は「学びが実践に、実践が学びに結びつく」と考えている。大学の授業を受けたことで問題意識を持ち、ボランティアに参加し、ボランティアに参加したからこそ考えたい問題意識を授業に持ち込むことができたからである。

冒頭（1．ボランティア活動に至るまでの経緯）に記載した通り、私がボランティアに参加したきっかけは大学の授業である。その後、貧困世帯への学習支援のボランティアを経験し、「貧困」「社会福祉」への関心を持った。三年次以降の授業選択では貧困や社会福祉全般について学べる授業を積極的に履修した。特に三年次では菅正広教授のゼミに所属し、法律的な観点、政策的な観点から貧困削減に何ができるのかを考えた。

4 年間の実践と学びを振り返ると、私の活動の軸は「平和」であるということに気づいた。平和について考える対話カフェの時間と学習支援のボランティアは全く別の活動と考えていたが、どちらも「平和」の実践のための活動だった。

私が考える「平和」とは、「すべての人が怯えることなく、安心して希望を持てる状態」である。これまで何となく使っていた「平和」という単語を、大学生活を通して自分の言葉で定義できるようになった。授業を受けるだけ、ボランティアをするだけのどちらかではこの定義は生まれなかったと思っている。

こうして自分の活動軸が見えた時、私にとってのボランティアの概念が大きく広がった。これまでボランティアとは、ぼんやりと「困っている人がいて、その人を助けるための行動」のように思っていた。しかし、私の活動はどれも「平和」な社会を作りたいと思って、行っていたことである。Café du PRIME や首都圏の大学生とのイベントには直接的に困っている人がいたわけではない。学習支援では貧困という問題に対して困っていたかもしれないが、私は困っている人を助けたいと思ってやっていたわけではない。子どもたちがたくさんの選択肢を持てるようになってほしい。みんなが希望を持てる社会を実現したいと思って活動していた。

私がボランティアへ取り組むときの意思をまとめると、ボランティアというのは困っている人を助けるだけではなく、「希望を持てる未来を作るための行動である」と結論づけることができた。

4．今後の課題、方向

私は 2022 年 3 月で明治学院大学を卒業するが、①「誰もが怯えることなく安心して希望を持てる社会を作る」こと、②大学生活で得た知識、③Do for Others の精神の三つを忘れずに、これからも活動していきたいと考えている。

在学中は引き続き Café du PRIME の運営に参加する。一人でも多くの学生に参加してもらい、一緒に平和の話を、未来の話をしたいと考えている。オンライン開催しているため、他大学の学生が参加できる強みもある。この機会に他大学の学生にも参加してもらい、多くの大学に Café のような場が広まっていってほしい。

卒業後、ゆくゆくはプロボノとして日本の貧困問題に取り組む団体に参加したいと考えている。ゼミを通して感じた問題意識から、「生活保護制度を必要な人が利用できるようにするために、制度面や社会の態度の変化」に取り組みたい。それだけではなく、金融業界に就職することを活かし、NPO 法人など貧困に取り組む団体が持続可能にしていくための方法を考えていきたい。

【実践部門賞】

思いを形に～バルーンアートプロジェクト～

心理学部教育発達学科 4 年　河森明依

1.　バルーンアートプロジェクトに至るまでの経緯

体験活動先での子どもたちとの出会いが原動力となり、バルーンアートプロジェクトを立ち上げた。

私は、小学校と特別支援学校の教員免許を取得できる、教育発達学科に所属している。「子ども理解」に強みを持った先生になるため、2 年次から教育発達学方法論、通称、体験活動の授業があった。週に 1 回、横浜市内の小学校に通い、学習支援をすることで子どもたちの成長を肌で感じた。さらに、ボランティア支援員として、運動会や修学旅行の学校行事にも参加をし、他学年の子どもたちや地域の方々とも交流を深めていった。

そんな最中、新型コロナの感染が国内で広がりを見せ始めた 2020 年。突然の要請で始まった全国一斉休校に伴い、相次いで学校行事が中止になった。体験活動先の校長先生から「6 年生の卒業式を中止にした」と涙の電話をもらった。その後も、緊急事態宣言が発令され、他府県ナンバーの自動車に嫌がらせをしたり、感染者に対して誹謗中傷が問題になったりするなど差別や偏見が深刻となった。子どもたちだけでなく、日本中、そして世界中が暗闇に包まれた。

この状況を受け、私は「こんな時だからこそ子どもたちを勇気づけ、社会に対して思いやりの心を持つことの大切さを伝えたい」と強く思い、バルーンアート制作実行委員会を結成した。もしも、体験活動で子ども理解を学んでいなかったら、「コロナのせいで」と言い訳をつくり何もしなかっただろう。しかし、体験活動での子どもたちとの思い出が原動力となり、「子どもたちの笑顔のために」とボランティア活動のスタートを切った。

カンボジアでの教育支援の様子

デザイン画コンテストの審査会の様子

2．バルーンアートプロジェクトの内容

この活動は、コロナ禍で学校行事がなくなった子どもたちに「一人じゃない」「心はつながっている」と元気を与え、「思いやり」の気持ちを忘れない社会を、そしてなくなった 2020 年を一緒に築き上げていくことを目的としている。

活動内容として、はじめに、コロナウイルスと共存をテーマにした絵本を製作し、絵本に登場するモンスターを子どもたちに自由にデザインしてもらった。次に、デザイン画コンテストで選定されたモンスター2 体を高さ約 6 メートルのバルーンとして制作した。制作工程では、地域の服飾専門科の高校生にも協力をしていただき、裁断やミシン掛けを行った。そして、制作したバルーンとともに、絵本やデザイン画を展示したイベントを開催した。これらの活動以外にも、イベント会場の現地視察や支援金募集のための企業訪問も行った。

プロジェクトは決して楽しいことばかりではなかった。時には、地域の方々から非難の声も挙げられた。デザイン画募集の際には、学校側の協力が得られず、先生方から、「休校明けでそんなことをしている時間はない」と厳しいお言葉を頂いた。それを受け、私たちは学校教育との関連性を持たせることで、子どもたちに学びながらプロジェクトに参加してもらえると考えた。そこで、「共存」をテーマにした絵本を作り直し、命を守ることや差別をしないという SDGs が学べるようにした。さらに、絵本を製作したことによって、文字が読みづらい障害のある子どもでも参加できるように工夫した。そして、何度も学校を訪問し、先生方に訴えた。その結果、小中高・特別支援学校合わせて 7 校 200 名の子どもたちがプロジェクトに関わってくれた。この他にも、バルーンの制作費用を募るため地域の企業を 1 社ごと回り、プレゼンをした。報道関係者にも呼びかけ、プロジェクトの周知を図った。

このように様々な壁を乗り越えて、多くの方々の協力の下、プロジェクトを完遂させることができた。

イベント会場の現地視察の様子

3．学びから実践、実践から学びへ

このプロジェクトから学んだことは数多くある。私は、コロナ禍で学校行事がなくなった子どもたちに「笑顔になってもらいたい」と思い、活動を始めた。しかし、プロジェクトと進めていく中で、自分たちの思いが周囲に受け入れられない悔しさに何度もぶつかったと同時に、学校教育や地域社会の課題を学ぶ、良い機会にもなった。学校現場では、「SDGs を

知らない」「裁縫の指導ができない」と言った声を聞き、教員不足や指導力の低下を実感した。また、地域では、施設の運営について疑問に思う点が多々あり、学校と地域、地域と社会教育が連携できていない現実も目の当たりにした。

こうしたことを踏まえて、自分たちのプロジェクトを振り返ってみると、私たちの活動はこれらの問題を解決する大きな力があったのではないだろうか。

学校現場では、同じプロジェクトに様々な背景を持った子どもたちや、企業が関わっていることを知ることで、多文化共生社会の基本である多文化教育を学ぶことができる。地域では、このイベントを各地で行うことで、人々の交流の場ができ、円滑な社会教育経営が実現できる。そして、最も重要なこととして、感染者や県外ナンバーに対する誹謗中傷に対して、「誰かを思いやる気持ち」が「誰かを助ける」ことにつながると、人権問題へ訴えかけることができるだろう。

このように、プロジェクトを通して、多くのことを学び、自分自身を成長させることができた。

新型コロナとの「共存」をテーマにしたバルーンが展示されたイベントの様子

４．今後の展望

今後もこのイベントと同様に、県内外での展示イベントの開催を予定している。

この活動が子どもたちだけでなく、地域の方々や大人たちにも「共存」することや誰一人取り残さない社会をつくることについて考えるきっかけとなることを願っている。そして、多文化社会の第一歩として、「多様な人々とよりよく生きていくにはどうしたらよいか」と、一人ひとりの心に問いかけていきたい。

【奨励賞】

在住外国人（留学生）の立場から、外国につながるこどもたちの教育支援活動にかかわりながら、学んだこと、広がったこと、つながったこと

社会学部社会福祉学科 4 年　JIA RU

1．ボランティア活動に至るまでの経緯

私は日本に暮らしている外国人である。他の日本人の支援者達と比べて、子供に教えることができることはそう多くはないかもしれないが、本国の言葉で子供達と交流し、学校の勉強でつまづいている内容を把握させることができることはひとつの強みかもしれないと思った。

明治学院大学で「多文化共生」の理念については、授業から多く学んでいた。多文化、多国籍といった様々なルーツで日本に暮らしている人々が楽に暮らしていくためには、言語や知識などの支援が必要とされている。微力ながら私は一年近く外国人の子供達に向ける教育支援活動に参加した。

私が教えているのは小学生から中学生までの子供である。この年の子供は自分の意志ではなく親の事情で日本に暮らしている。その中でも特に、中学生の頃突然日本に来た子供は日本を嫌うことが多い。突然自分の知らない土地に来て、言語が通じない、学校では友達が作れない、学校の授業で真剣に聞いても先生のいうことが分からない、解けるはずだった問題が問題を読めないから何を書けばいいか分からないなど、疎外感や無力感が積み上がる一方で、誰もこの土地を好きになるはずがない。

そのような子供たちに対して私ができることは、彼らが分かる言語で話す、年の差が広くないので友達になってあげる、学校で理解できなかったことは私が理解できる言葉で教える、読めない問題を翻訳してあげるついでに必要な日本語を混ざって教えるなどである。例えとすればまだ飛べない雛を飛べるまで見守り、こうして少しでも彼らが楽に暮らせるとすれば幸いであると考えた。留学生の立場とは異なる子どもたちの状況を知ることができた。これは、ボランティアの実践をしなくては知ることができないことだった。

2．ボランティア実践の内容

自分も外国人なので、日本で生きるための大変さは知っている。自分と同じあるいはそれ以上に大変な人と会えたら、少しでも力になれることがあるとしたら、出来る範囲で手伝う。2020 年秋、卒業するための単位はほとんど取得できていた。その時に社会実践を参加して経験を積みたいと考えた。何をすればいいかは悩んでいた時に、1 年生の時に「多文化共生各論 3」の授業でお世話になった矢部先生を思い出し、先生に相談したところ、横浜市で中

学生の学習支援を行っている「みらとび教室」を勧めていただいた。子供の大多数は中国人なので、私は中国語で会話し教えることができる。それから、「みらとび教室」の先生達と矢部先生の紹介で他の「ワールドキッズ」などいくつかのボランティアにも参加してきた。2021 年に、内なる国際化プロジェクトの多文化共生ファシリテーター認証のための科目でもある「ボランティア実践指導」を受講し、難民等外国につながる子どもたちの学習支援にも取り組んだ。

３．実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

ボランティア実践の中で様々な子供に授業を教えて、子供の親にも会話する機会があった。そのため、ボランティア実践指導の授業において、他の学生より経験を積んでいて、さらに自分も外国人であることも加え、授業の課題について討論する時、ボランティアの経験を活かすことで、他の皆が見えないところを気づくことができた。

逆に、ボランティア実践指導で「さぽうと 21」の非中国籍の子供に触れることができ、そこは自分にとって新たなチャレンジであり、授業で学んだ知識を活かす場所でもある。日本に来て数か月や一年二年の子供にとって、言語の壁があって学校では友達を作れない子が多い。故に年齢が近い、言語の壁のない人がいってくれれば彼らにとっては癒しになると思った。実際、私が教えた子供は授業が終わった後でも暇話や生活上分からないことで連絡してくれる。先生よりは兄、私もこんな関係を楽しんでいる。

「ワールドキッズ」で教えた子は覚えることには問題ないが、理解するのはとても苦手な子である。初めて出あった時は中学校一年生。基本なかけ算割り算もまだまだ解けない状態だった。私が担当し始めてから少し進んでいて、3 か月の間に、中学 2 年までに必要な計算問題が全て解けるようになった。その時の自分の達成感は強烈だった、この達成感のためでも、この子を教え続ける。彼も私をとっても懐いてくれる。一回の授業は 1 時間半だったが、実際毎回 2 時間まで延長していた。その後帰り道でも「もう少しはなそう」でまた３０分はかかる。好かれるのはとっても嬉しい事だが、一度他の先生に変えたらやる気が無くなって帰ろうとする、そこまで依存されることはまた問題である。

４．今後の展望

やはり子供達が学校の授業についていけることを目指して努力する。だがその前に、日本に生きていける力を身に付けてほしい、友達を作れる力を身に付けてほしい。私は彼らの生涯の先生を務めることはできない。いつか彼らから離れるが、日本に暮らしている以上彼らはいずれ問題に直面することになるでしょう。その時に彼らの力になるのは生活上の知識と頼れる友。もちろん親を頼れる子供もいるが、私の教え子の中に親の日本語もいまいちの方も沢山いる。故に生活上よく使われる日本語を覚えることと困ったらどうやって助けを求められるかを教えたい。今は授業に時間制限があるのでこういうものは授業のあとに少しだけ教えるだけだ。

それから私が教えていた子供達の親のこともなるべく話す機会を設けたい。私の教え子

は主に中国人、その親も中国式の教育、受験戦争のための教育を強く信じている、それでこそ一人前になれることだと。それで子供に無理をさせる、子供の努力を正しく評価してくれないことも何度も見てきた。微力ではあるが、少しでもその親たちの考え方を変えられるよう努力したい。

【奨励賞】

学習と心のよりどころ

法学部法律学科３年　鈴木日菜子

1.　ボランティア活動に至るまでの経緯

私は中学、高校時代からボランティア活動を行い、自分の行動で誰かが喜んでくれることに喜びを感じていた。そのため、大学生でも様々なボランティア活動に挑戦したいと考えていた。高校当時はただボランティア活動をすることが楽しく、多くのボランティア活動をすることを望んでいた。大学に入学後、最初のボランティア活動でも活動を他者のためではなく、自分自身の楽しみのために行っていた。しかし、授業を受けていくことでボランティア活動に対しての意識が変化し、自分なりの考えを持つようになった。

「ボランティア学」の授業でボランティア活動について学んだことで、ただボランティア活動をするだけではなく、ボランティア活動の意味・起源を知り、ボランティア活動に対する考え方が変化した。ボランティア活動について考えていくうちに、ボランティア活動は他者のために行うことであるが、自分の時間を奉仕することで得られる自己満足や達成感も存在することに戸惑い、活動を行うことにためらいを持つこともあった。けれども、ボランティア活動による支えを必要としている人が常に存在していることに気づき、私自身の力も誰かに必要とされているのではないかと考えるようになった。また、近しい存在ではない「他者によるボランティア」だからこそ手を差し伸べることに意味があり、心の声を聞くことができるのではないかと考えるようになった。

そこから、また新たに私が参加することのできるボランティア活動を探した。その過程で出会うことができたのが、現在も活動を行っている「戸塚無料塾」である。ボランティア活動を行っていく中で、自分が心から楽しいと感じて活動を行うことで子どもたちも心から楽しんで時間を過ごしてくれることを体感した。ボランティア活動の意味を知ったことで悩みも生まれたが、活動を通してその時を心から楽しむことがボランティア活動には大切であると感じることができた。

２．ボランティア実践の内容

「戸塚無料塾」では、小学生・中学生が自主的に学習することを目的としている。生徒１人に対して１人のスタッフが付き、生徒がわからない点を指導する。また学習サポートだけ

でなく、子どもたちにとって安心できる場所となることを目指している。

私は小学５年生の生徒を担当し、その子が苦手としている算数を中心に学習を進めている。長期のボランティア活動であるため、生徒とのコミュニケーションが取りやすく、生徒の性格を踏まえながら学習サポートをすることができる。私は生徒が心をひらき、学習や学校生活での相談をしやすい環境を作るため、体の向きや視線を生徒に合わせ、生徒の興味のあることを会話することなどを行った。その結果、生徒は学習面の不明点を気軽に質問してくれるようになると共に、「戸塚無料塾に参加することが楽しい」と話してくれるようになった。また、苦手科目である算数を克服するため、私は生徒と共に成功体験を積むことを心がけた。計算のスピードが少し速くなったことなど些細なことを褒め、生徒の「できた」ことを声に出して承認することで、本人の苦手意識を減らした。その結果、生徒は算数を自宅で自主的に学習し、その成果を見せてくれるまでに変化した。

また「戸塚無料塾」の場を生徒の学習サポートだけではなく、居場所や心のよりどころとなるよう、意識しながら活動を行った。その結果、生徒が戸塚無料塾の存在を「よりどころ」と話してくれるようになり、私自身が意識しながら行ったことが、「相手に伝わる」ということを体感することができた。また、「学習」という目的を達成するために学習指導だけに注力するのではなく、何気ない会話をするなどコミュニケーションを取ることで、生徒の学習意欲の向上に繋がるという相手との対話の重要性を学んだ。

３．実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

「戸塚無料塾」に出会い、子どもの貧困問題・核家族と地域の繋がりについて興味を持つようになった。そこから、選択した「高齢社会と法」の授業の内容が身近に感じられると共に、学習意欲がさらに増した。その結果、授業で学んだことを踏まえながら、子どもたちと接することができ、以前よりもより良い関係を築くことができたと思う。

「高齢社会と法」の授業において、貧困問題や社会保障などを学び、公的な補助や保障の必要性を理解することができた。さらに、子どもを地域全体で見守ることの必要性や公的支援の重要性も理解することができた。公的な支援以外にも、金銭的な問題から塾に通うことのできない生徒にとって、「戸塚無料塾」のように低額で学習支援を受けることができる場が存在することは、家庭や生徒の必要な支援の一部であることを知った。

また「高齢社会と法」の授業で行われた最終レポートにて、子ども食堂についての課題本を読んだことから、家庭だけではなく地域全体として子どもたちを見守ることの重要性を理解した。さらに、この気づきをボランティア活動と重ねることで重要性をより実感することができた。

子どもにとって家族との時間も大切であるが、家族には話しづらいことを「他人であるスタッフ」だからこそ話せることもあると活動を通して感じた。そのような場所が存在することで、子ども自身に自然と安心感が生まれ、ひとりで問題を抱え込まずにいられると思った。他のボランティア活動においても、普段家では兄として振る舞い、わがままを言わず我慢をしているが、スタッフと１対１で遊んでいる時は甘えたり、自分のやりたいことをしたりと我慢していた分を発揮しているように感じた。子どもたちにとって家族だけでなく、他にも自分の気持ちに素直になれる場所が必要であり、戸塚無料塾はそのような家庭とは別の「心のよりどころ」となっているように感じ、自分もその一部を担うことができていることに喜びを感じた。

４．今後の課題、方向

戸塚無料塾のような子どもたちの「心のよりどころ」となるような場はさらに増えていくべきだと思う。しかしこのコロナ禍の中で新しく活動場所を設け、新しい「よりどころ」を増やすことは難しいだろう。今私にできることとしては、現在戸塚無料塾に参加している生徒の中でも、より多くの生徒の心のよりどころとなれるよう、働きかけを行うことであると考える。また、戸塚無料塾に参加する生徒を増やすことや、担当のスタッフ以外のスタッフとも交流することができる機会を増やすことであると思う。

現在私は基本１人の生徒との交流のみだが、今後は他の生徒との交流も深めていきたいと思う。生徒たちも１人の担当者だけではなく、多くのスタッフと関わることで、スタッフとの繋がりが深くなり、「心のよりどころ」となりやすくなると考える。そのためにはまず交流できる場が必要であると思うため、生徒・スタッフ全員で実験を行う企画などコロナ禍においても皆で交流することのできる機会を設けていきたいと思う。また、戸塚無料塾の存在をより多くの小学生・中学生に知ってもらい、無料塾に参加する生徒を増やし、多くの子どもたちの「心のよりどころ」としたいと思う。そのために、近隣の学校への広報活動を行ってみたいと考える。

【奨励賞】

ボランティア報告書「日本語を教える事」の意味について

法学部消費情報環境法学科 3 年　三河眞弓

1.　ボランティア活動に至るまでの経緯

「日本語を教える事」を始めたのは、高校生時代に遡る。高校生でオーストラリアに留学した時、知り合いの子供に日本語を教える機会があった。その時、初めて自分の母国語を母国語にしない人に対して教えるのは難しいことだと痛感した。また、同時に彼らの学習へのモチベーションを保つ為、教え方も工夫しなければいけないことも実感した。実際、日本語の文法や文字の使い分けは複雑、且つ、覚えるのに忍耐力を要する。日本でしか使わない言語にもかかわらず、修学に時間を要する。時に、文句を言われることもあったが、当時は言い返す言葉もでなかった。この経験を機に、「なぜ、日本語を学ぶ人がいるのか」という、根本的な疑問に陥った。

大学に入学して、技能実習生など「外国の人」で日本に滞在している人達のことを学んだ。複雑な言語を学び、日本にきても、人権や生活環境、これらのストレスからくる心身の疲れが彼らの精神を削っていると講義を通じて痛感した。日本国憲法では、外国人労働者も国民と同様の権利を享受する権利があると述べているが、実際、給与未払いや時間外労働を強いられるケースが報告されている。この学びをきっかけに、彼らが日本語を勉強しているのは、「出稼ぎ目的」だけでなく、「日本で生活するための必要な情報」を逃さない為ではないかと、考えさせられた。そこで、サレジオ教会の活動に参加した。

スウェーデンのトゥンバ高校でのボランティアは、スウェーデンの教育制度に興味もあったことから、留学コーディネーターに相談して、参加させてもらったのがきっかけである。実際、技能実習生のように日本へ稼ぎに行くわけでも、滞在しているわけでもない生徒が如何にモチベーションを保っているのか、興味があった。

2.　ボランティア実践の内容

-サレジオ教会-

サレジオ教会での活動は、「ベトナム人の為の日本語教室」という名前で活動している。活動の時間中は、夕食を一緒に食べたり、活動を知ってもらえるように広告を作ったりした。技能実習生が、「わからない＝怖い」という感情を無くす努力をした。

実際、日本語は教えているが、学習の時間は 1 時間のみである。他の 2 時間は、技能実習生の悩みを聞いたり、繋がりを作ったりすることを念頭に活動していた。日本の制度や生活、仕事の悩みを相談することで「言語」を教えるよりも、より実用的な支援ができたと思う。実際、異国にいると同じ国同士でかたまる傾向があるように、日本人と触れ合う機会はあま

りない様子だった。日本人の知り合いとして名前が挙げられる人々は皆、職場の人だった。日本語を話す機会があっても、それは多少たりともストレスや緊張という負荷が掛かっている。敬語ではない形で会話できる場所・人間や職場の悩みを相談できる人を持つことで、精神状況は大きく異なる。現に、一度相談に来た人は、皆、2度・3度と訪問するようになった。実際、日常生活における不安や、仕事の悩みを法律や規約を元に解決方法を一緒に考えた。労働法を振り返ったり、宅建で学んだ内容の相談が来たり等、自分の学びを振り返る事も多々あった。

他方、解決できない課題もあった。区の相談窓口の存在を知らなかった技能実習生に窓口の場所を教え、仕事帰りに寄るよう促した。しかし、一人で知らない場所に行くのは怖いことである。実際、活動の日に会った際、窓口に行けたか訪ねると、「躊躇して行けなかった。」と、言われたことがある。ついて行きたい気持ちもあったが、自分は未だ学生で、彼らと活動時間が異なったため、全てをサポートすることは出来なかった。また、相談できない悩みを抱えている技能実習生に参加してもらいたいものの、翌朝(早朝)に仕事があったり、夜遅くまで仕事があったりなど、スケジュールが合わない人が居た。この活動の名目である「気軽に」という目的が中々実現できずにいたのは、活動を振り返って悔やまれる点である。

-トゥンバ高校（スウェーデン）-

「ベトナムから来た技能実習生に日本語を教えること」と「スウェーデンの高校生に日本語を教えること」。この両者の活動の大きな違いは、「日本に慣れる為」か「日本を知るため」だと認識している。同じ「日本語を教える」という趣旨でも、「誰に教えるか」によって、活動の形態も大きく異なる事を学んだ。トゥンバ高校の学生で日本語を履修している子の多くが、日本語修学のきっかけは「漫画」や「アニメ」、「ゲーム」だと、言っていた。スウェーデンでは、日照時間が5時間という厳しい季節がある。夜が長いことも有り、日本の娯楽に救われた子供達も多い。

彼らが日本語専攻のクラスに入って、最初に衝撃を受けたのは、日本語の難しさである。文法の構造や文字、単語が大きく異なるアジアの言語を興味本位で勉強し始めた事に後悔している生徒もいた。しかし、彼らにとって、専攻を変えることは、もう1度、高校生活をやり直す事を意味する。その手間を惜しむ事と天秤に掛けた時に、留まることを選ぶ生徒もいた。このような生徒の日本語へのモチベーションを保つ為に、授業では日本のアニメや日本の景観を流したり、日本料理を作ったり、桜が咲けば、遠足に出かけた。このように、日本に触れる機会を増やして、日本への興味・関心を保っていた。

3.　実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

明治学院大学で履修した長谷部先生の「多文化共生」や猪瀬先生の「ボランティア学」の講義を通じて、自分のボランティア活動のあり方や、どのような支援が求められているのかを学ぶことが出来た。講義で学んでいなかったら、私の支援は実用的だとは言えなかったと思う。この学びを実践に生かせたことで、文献や資料では読み取れない技能実習生が抱える

悩みを知ることが出来た。また、日本は「多様性」のある社会を目指している。しかし、蛯原先生の「憲法 1, 2」で得た知識と技能実習生の現状を照らし合わせると、彼らの生活や人権は十分とは言えない。毎年、海外から日本に来る労働者が増えている状況を見ると、彼らの扱い方を迅速に対応・見直すべき課題であると考える。他にも、消費情報環境法学科で必修・選択必修となっている科目や明治学院大学が提供している「宅建試験対策講座」で得た知識が、技能実習生を助けることに繋がった。

4.　今後の課題・方向

前の項目でも触れた通り、日本は「多様性」を目指しているものの、対応仕切れていない部分がある。他方、私が留学しているスウェーデンは、真の「多様性」に満ちた国である。日本で技能実習生が抱える悩みや現状について教えてもらった事を元に、如何にスウェーデンが「多様性」を確立したのか、大学の講義や高校生達から学ぶ。この知識を踏まえ、今後、日本社会は如何に対応していくべきか。活動を通じて考えていきたい。

2　明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム

1.1　総括

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」は、本学で活発に行われているボランティア実践と、大学の学びを融合する全学的な取り組みとして2016 年度に始まった。

このプログラムは、①135 時間以上のボランティア実践、②各学部学科と、共通科目を担当する教養教育センターが指定した科目のうち 16 単位の修得（2016～2019 登録生）、変更後は、自分の実践と関連する大学での学びを自分で指定した 3 科目の習得（2020～登録生）、③135 時間のボランティア実践と、大学での学びを結びつけるための手がかりをつくる「インテグレーション講座（4 回）」を受講した学生に、サティフィケイト（修了証）を授与するものである。

2018 年度末に 12 名の 3 年生が最初の認証を受けた。授与式は記念館において学長より学生一人一人に修了証が手渡された。それに続いて、2019 年度末には 9 名の 3 年生と 2 名の 4 年生の合計 11 名が認証を受けた。ただしコロナの流行が徐々に始まった時期であり、授与式は行わず郵送により修了証を渡した。

2020 年度末には 10 名の 3 年生が認証を受けた。認証にあたってはボランティアセンター運営委員会において「コロナ禍により活動時間が確保できなかったことを考慮して、135 時間に満たなくても 67 時間以上のボランティア活動の実績があれば最終報告書を受け付ける。その場合は別紙で申告書を添付して現場でのボランティア活動に代わりどういった取り組みをしたかを申告すること。」という決定がなされ、これに従って認証がなされ授与式を行った。

昨年度に続き今年度（2021 年度）も、コロナ禍に対応した体制でこのプログラムを進めてきた。

まず、春学期に行う第 1 回インテグレーション講座は対面とオンラインを交えてどちらでも受講できる形で実施した。秋学期に行う第 2・3・4 回インテグレーション講座は全面オンラインで実施した。

また、11 月のボランティアセンター運営委員会において昨年度と同様にコロナの状況に応じた認証について検討された。その結果「コロナ禍により活動時間が確保できなかったことを考慮して、135 時間に満たなくても 67 時間以上のボランティア活動の実績があれば最終報告書を受け付ける。その場合は別紙で申告書を添付して現場でのボランティア活動に代わりどういった取り組みをしたかを申告すること。」という昨年度の決定が踏襲されることとなった。

67 時間とする根拠は、135 時間は 3 年間で「ボランティア活動 100 時間＋ミーティング 35 時間」として考えた時間数であることから、100 時間のうち約 3 分の 1 を緩和する

という考え方により 67 時間以上とした。

最終報告書は 2022 年 1 月 11 日の提出〆切までに、3 年生 4 名、4 年生 2 名の提出があった。それぞれの学部運営委員によりメールやオンラインでのやりとりにより指導がなされた。学部の専門性を深める熱心な指導がなされ、3 月 1 日の認証委員会において最終報告書を提出した全員の認証が認められた。

3 月 16 日に小チャペルで授与式を行い、学長より一人一人に修了証が手渡された。

（ボランティアセンターコーディネーター　田口めぐみ）

1.2　2021 年度スケジュール

月日時	内容
3 月 4 月	大学から新入生に郵送される配付物にて「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」についてチラシを配布、大学ホームページで告知
4 月	「サティフィケイトプログラムだより 2021 年 3・4 月号」発行
4 月 9 日（金） 4 月 12 日（月）	ガイダンスの実施（ボランティアと教育の連携についての意義、プログラムの概要を説明）
6 月 22 日（火）5 限 6 月 23 日（水）3 限 7 月 3 日　（土）2 限 7 月 30 日（金）2 限	第一回インテグレーション講座　対象：1、2 年生 【テーマ】「ボランティア実践から学ぶとは」 【内　容】「大学での学び」と「ボランティア実践からの学び」の違いについて理解を深めた。 【講　師】猪瀬浩平（ボランティアセンター長　教養教育センター教授） 菅沼彰宏（ボランティアコーディネーター） 磯野昌子（ボランティアコーディネーター） 田口めぐみ（ボランティアコーディネーター）
9 月	「サティフィケイトプログラムだより 2021 年 7・8 月号」発行
11 月 6 日（土） 学生：オンライン 進行運営：白金校舎ボランティアセンター	第 2・3・4 回インテグレーション講座　対象：全登録生 【テーマ】 登録 1 年生：「出会いからの一歩を踏み出すために」 登録 2 年生：「自分のボランティア実践を大学での学びに結びつける」 登録 3 年生：「ボランティア実践と大学での学びを融合した“私の Do for Others”」 【内　容】 午前の部：「ボランティア大賞」の聴講 午後の部：登録 1 年生は、ボランティア大賞の感想共有後、教養教育センターの猪瀬教授と長谷部准教授の対談「出会いからの一

	歩を踏み出すために」を聞き、考え学んだことをワークシートに記入して提出した。 登録 2 年生、登録 3 年生は学部ごとに分かれ、3 年生は自らの「ボランティア実践と大学での学び」の成果をプレゼンテーションした。2 年生は聴講のうえ、レポートを提出。後半は 2 年生がそれぞれの学びと実践の現状を報告し、3 年生が自身の経験に基づきアドバイスした。 【講　師】 登録 1 年生：教養教育センターのボランティアセンター運営委員（猪瀬浩平教授、長谷部美佳准教授） 登録 2・3 年生：各学部のボランティアセンター運営委員
11 月	「サティフィケイトプログラムだより 2021 年 9・10・11 月号」発行
12 月 8 日（水）	登録生交流会
2022 年 1 月	「サティフィケイトプログラムだより 12・1 月号」発行
1 月 26 日（水）	登録生交流会
2 月 10 日（木）	登録生交流会
3 月 16 日（水）	修了証授与式（記念館 1 階小チャペル：認定対象者 6 名、うち欠席者 1 名は後日別途授与）
3 月 22 日（火）	登録生交流会

1.3　2021 年度プログラム登録者数

	学部						合計
	文	経済	社会	法	国際	心理	
2019 年度登録生 第 4 回インテグレーション講座 （2021.11）を受講した者	1	0	3	2	1	5	12
2020 年度登録生 第 3 回インテグレーション講座 （2021.11）を受講した者	2	1	3	0	2	0	8
2021 年度生 第 2 回インテグレーション講座 （2021.11）を受講した者 （　）内は第 1 回インテグレーション講座を受講した人数	4 （8）	4 （4）	15 （21）	5 （6）	2 （8）	7 （11）	37 （58）
合計	7	5	21	7	5	12	57

1.4　取り組みの様子

2021 年度に新たに登録した学生は、58 名であった。そのうち 11 月の第 2 回インテグレーション講座を受講しレポートを提出し、1 年目を終えた登録生は 37 名である。

2020 年度登録学生のうち、11 月の第 3 回インテグレーション講座を受講しレポートを提出し、2 年目を終えた登録生は 8 名である。

1 年目生、2 年目生は、全学的に授業の管理にも活用されている「manaba」を通して毎月の活動報告書を提出している。ボランティアセンターからのフィードバックも「manaba」で返している。

2019 年度登録学生のうち、11 月の第 4 回インテグレーション講座で自らの学びとボランティア活動をプレゼンテーションした登録生は 12 名いた。その後 1 月に最終報告書を提出した登録生は 4 名であった。残りの学生は今年度は最終報告書の提出を見合わせた形になる。来年度 4 年生として大学に在籍している場合は、改めて最終報告書を提出することで認証される道が残っている。また、登録 3 年目生のなかには、今年度の第 4 回インテグレーション講座の受講を見合わせて、来年度に改めてプレゼンテーションをしたいと考えている学生もいる。コロナ禍で納得のいく発表や報告ができないと考えて、認証を翌年度に延ばすことを選択する登録生が複数いることから、4 年間をかけて認証を目指している登録 4 年目となる学生に対しても適切に働きかけていきたい。

（ボランティアコーディネーター　田口めぐみ）

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」に関するアンケート調査

1　1　はじめに

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」（以下「サティフィケイトプログラム」）は 2016 年度の初めに最初の登録学生を迎えて、3 年後の 2018 年度末に 12 名の最初の修了生を輩出した。それ以降 2019 年度末に 11 名、2020 年度末に 10 名、2021 年度末に 6 名の修了生を輩出している。

当初は、指定科目が学部学科ごとに指定されていた。運用していくなかで、登録学生が自分で指定するよう改善が図られた。また 2020 年度からはコロナ禍となり活動が制限されてきたことで活動時間についても緩和が図られている。

最初の登録学生 2016 年度生は、卒業後 2 年目を迎えている。今までの修了生にこのプログラムに取り組んだ当事者としての意見を問うことで、プログラムをよりよくしていくことを目的として、今回のアンケート調査を行った。

1　2　調査の対象

① 2018 年度末、2019 年度末、2020 年度末に「サティフィケイトプログラム」を修了して、認証を受けた修了生。

② 2021 年度末に大学に在籍している学生のうち、過去に「サティフィケイトプログラム」に登録したが、継続を辞退した学生。

1　3　調査方法

① 2018 年度末、2019 年度末に認証された修了生に郵送で依頼し、Google フォームで回答してもらう。2020 年度末に認証された学生は学番メールで依頼して Google フォームで回答してもらう。

② 継続を辞退した学生宛にポートヘボンでアンケートへの回答を呼びかけ、併せて個別に学番メールでも回答を依頼し、Google フォームで回答してもらう。

1　4　調査項目

修了生に対しては、2　2 の結果に示す通りの調査項目を用いて調査を進めた。

辞退者に対しては、2　4 の結果に示す通りの調査項目を用いて調査を進めた。

2　1　調査参加者

①修了生の内 7 名が回答をした。その内 4 名が個別の聞き取りにも応じられると回答した。

②辞退者の内 2 名が回答をした。その内 1 名が個別の聞き取りに応じられると回答した。

２　２　修了生の回答のまとめ

以下に、アンケートの設問ごとに回答者が選んだ数値を、記す。

数値を選択する問は、１（極めて低い）～７（極めて高い）から選んでいる

１．サティフィケイトプログラムに登録したことを、今になって振り返るとどのように感じていますか。

		2016生		2017生	2018生			
		A	B	C	D	E	F	G
問1	ボランティア活動に取り組めよかった	6	7	6	7	7	7	7
問2	活動と学びをつなげられよかった	5	5	5	7	6	6	7
問3	インテグレーション講座を受講できてよかった	6	6	5	7	7	7	7
問4	ボラセンを活用できてよかった	6	7	6	7	6	7	7
問5	プレゼンや報告書が作成できよかった	5	6	5	7	7	5	6
問6	サティフィケイトを取得できよかった	5	7	4	7	6	7	7
問7	所属学部の教員の指導が受けられよかった	4	5	5	6	6	6	6
問8	所属学部以外の教員の指導が受けられよかった	4	4	4	6	6	6	7

2.サティフィケイト取得後にそのことを活用できたり、思い出したりする場面はありましたか。

		2016生		2017生	2018生			
		A	B	C	D	E	F	G
問1	就活で履歴書やシートに記述した	7	4	3	2	4	5	1
問2	就職面談で自己アピールとして話した	7	3	4	4	6	7	7
問3	仕事において生かすことができた	5	4	5	5	5	4	3
問4	自分の自信や心の支えになっている	5	5	5	5	7	6	6
問5	よい思い出になっている	3	7	7	6	6	6	7
問6	今もボランティア活動に携わっている	1	1	3	6	7	5	3
問7	証書を大切に保管している	4	5	6	6	7	6	7

３．社会人としてボランティア活動に取り組むことについてどのように感じていますか。

		2016生		2017生	2018生			
		A	B	C	D	E	F	G
問1	一市民として取り組んでいる	4	5	7	4	7	7	7
問2	支援専門職として仕事において社会貢献している	4	1	1	1	7	5	1
問3	組織のなかの社会貢献部門で働いている	1	2	1	1	5	5	1
問4	寄付活動をしている	1	1	1	1	4	6	1
問5	学生時代にやりつくし燃え尽きた感がある	6	6	2	3	3	3	2
問6	忙しくて取り組む時間がない	5	7	6	3	3	4	3
問7	身近に適切な団体がない	4	7	4	5	1	2	6

４．以下の項目は、プログラム登録時にお尋ねしたものです。このプログラムに取り組んだことでご自分の以下の能力がどう伸びたと感じていますか。

		2016生		2017生	2018生			
		A	B	C	D	E	F	G
問1	問題発見力（日常から課題を見つけられる）	6	2	6	5	6	6	5
問2	問題解決力（問題を解決まで取り組める）	4	4	2	4	6	5	5
問3	主体性（自分からものごとに取り組む）	5	5	5	6	6	6	5
問4	コミュニケーション力	6	6	6	4	5	5	4
問5	他者を理解する力	6	6	5	4	7	6	5
問6	理想とする生き方	4	3	4	6	7	5	4
問7	大学の勉強に対する問題意識	4	4	4	7	5	6	4

2　3　修了生の聞き取り調査のまとめ

聞き取り調査は、調査に応じる修了生の希望日時にオンラインで個別に行った。

①2016 生　S さん

現在は市役所で高齢者支援課に勤務しています。大学での学びを生かせる部署での仕事にやりがいを感じています。

就職する際には学生時代に頑張ったことを記入するシートに自分のボランティア活動やサティフィケイトプログラムについてしっかり書きました。ボランティア活動は多くの時間を費やして実際にやったことなので、面接ではどんな質問をされても臆せず答えられました。サティフィケイトプログラムについては面接担当者からも「それはどういったプログラムですか？」と質問され、人とは違った視点で話ができたと思います。

サティフィケイトプログラムの認証を得るために必死になったということはなかったと思います。まず 135 時間の活動時間は意識しなくても活動している間に満たしていました。指定単位もほかの授業と同じように受講したので苦労は感じませんでした。ただインテグレーション講座は、学びと活動を結びつけるといわれても、最初は何をどうしたらよいか本当には分かってなかったかもしれません。夢中になって活動して、授業も受けていたら徐々に結びついてきたように思います。

ボランティア活動に取り組んでよかったことは、それまで人見知りだったのが薄れたことです。ボランティア活動では社会人の方と接する機会も多くあったし、メンバーをまとめる必要もありました。親からも社交的になったと言われて、対人面で自分が変わりました。

授業では猪瀬先生のボランティア関係の科目が印象に残っています。社会福祉学科での学びとは違った角度からボランティア活動を考えることができて、ボランティアについて考えを深めることができました。

学生の頃は、ボランティアをやっていない仲間から「ボランティア活動なのに決められた枠で取り組むのはおかしい。」と言われたことがありました。「ボランティア＝偉い」みたいなイメージを持たれていました。自分としては、いやいややっているわけじゃなくて、自分がやりたいことを素直にやっていただけだし、自分のやりたいことが認証という形になるのだったらやり切りたいというそんな気持ちでした。

例えばアクセサリー作りが好きという気持ちから、趣味の延長みたいにボルネオ島のパールを使ったアクセサリー作りに取り組むといった敷居の低さも大事だと考えています。

②2016 生　T さん

卒業して 2 年たっても大学の時のボランティア活動の仲間とは親しく連絡をとりあっています。ともに活動した仲間は離れていても今でも大切なよりどころです。

今思い返すと第 1 回インテグレーション講座の頃は何となく聞いていただけで、活動と学びのつながりと言われても本当には分かっていなかったと思います。2 回目以降のインテグレーション講座で先輩の話を聞く大切な機会があったことで、少しずつ意味を考えられ

ました。学年を超えて一緒に学べるインテグレーション講座はこのプログラムの大きな特色で、講座を通して学年を超えた新しいつながりもできました。年に 1 回あったことも適切な間隔だったと思います。

インテグレーション講座の講師が自分の学部の先生だということもプログラムの魅力で、学科の学びとの結びつきを直接相談でき、私の場合はサティフィケイトプログラムでの取り組みが卒業論文につながっていきました。私の大学生活はボランティア活動の実践がメインになっていたけど、サティフィケイトプログラムという足がかりがなかったら、学びとは全く別のもののままだったかもしれません。自分が大切にしてきたことを卒業論文のテーマにでき、自分で自分の学生生活を再確認できたような気持ちでした。

135 時間という活動時間はサークルや団体などに入っていれば通常の活動で満たす時間数なので、活動時間を気にしたことはありませんし、認証していただくのに妥当な時間といえると思います。

私は社会福祉学科で、同級生に登録学生がたくさんいて、仲間がどんな取り組みをしているかよく知っていたし、お互いの活動について普通に相談していました。恵まれた環境だったのだと思います。

そういった意味でボランティアセンターからのフィードバックは大切だと思います。フィードバックが返ってくれば、ちゃんと見守ってもらえるという気持ちになって頑張れますし、困ったことがあったらボラセンに相談できるという保証になって安心できます。フィードバックはボラセン対個人のやり取りですが、不安になっている人は仲間のことをもっと知りたいという気持ちがあるかもしれません。インテグレーション講座だけでなく、仲間の取り組みの状況やお互いの活動を気軽にディスカッションできる場があると 3 年間という息の長い取り組みの支えになるかもしれないと考えます。

③2018 生　O さん

私の場合は 1 年生から 2 年生にかけてボランティア活動の土台作りをしたように思います。「ボランティア学」の授業を受講したことや、団体に所属して先輩の活動の様子を見たり教えてもらったりしたことが問題を発見し解決しようとするその後の基礎になっています。

高校生までは狭いコミュニティーの中でしか考えられなかったけれども、今まで見えていなかっただけで、本当は困っている人が近くにいるのではないかと思うようになりました。そして自分は何ができるのだろうと考え始めました。

そこで自分から相手を探してアプローチしたことが、自分で一歩前に進む力になったと思います。それまでは人見知りだったり、あきらめたりしていたけれども、やってよかったという勇気を感じられました。

今取り組んでいる活動には、ネットなどでいろいろと調べてたどり着きました。自分のやりたい気持ちだけでなく「通いやすい」「活動内容」「授業との兼ね合い」など現実的なことも考えて、facebook で見つけて連絡を取ったのが、外国籍のお子さんの支援活動です。

ボランティア活動は自主性によるもので、サティフィケイトを取得したいという気持ちとは対極だという見方もあると思います。ですが私は登録したことで、やり続ける動機となり、135 時間という活動時間が目安になりモチベーションが維持できたと感じています。あくまでも目的は相手のためにということと、相手の不利益への配慮を忘れなければ有効なプログラムだと思いますし、満足しています。

インテグレーション講座では登録 1 年目から先輩の話を聞くことができて、広い分野の学びと実践を知ることができ新しい発見がありました。私たちの学年は 2 年生までは通常通りに活動できましたが、3 年目はコロナ禍となりました。私はオンラインで活動ができたので 135 時間の活動時間を問題なく確保することができました。登録した仲間のなかにはコロナ禍で 135 時間の活動ができないという人もいました。また心理学部は指定科目が幅広く心配なかったのですが、他の学部の仲間では指定科目が壁と言う人もいました。

大学でのボランティア活動で得たことは心理の専門職を目指すことにも大きく影響しています。今支援している難民や移民のお子さん達からそれぞれの立場について意見を求められることもあります。心理学部での学びを生かしながら生き方を一緒に考えていきたいと思います。

④ 2018 生　K さん

私には音楽という中学生から続けている趣味があり、偶然知り合いから聞いて音楽を通して海外の貧困問題に取り組んでいるボランティア団体を知りました。音楽という自分のやりたい趣味にも時間を使いながらボランティア活動に取り組めたことが、活動を継続できた大きな要素だと思います。

135 時間の活動報告は特に難しいものに感じませんでした。活動したら帰りの電車で入力するようにしていたので、報告にも手間をかけなくても提出できていましたし、長期での海外での活動も多かったので気がついたら時間を満たしていた感じです。

途中で辞退した友人の中には 135 時間が難しいと言っていた人もいました。1 Day for Others にとても数多く取り組んでいた友人も、135 時間は満たせなかったそうです。どこかに属して継続的に取り組める活動でないと 135 時間には届かないのかもしれません

インテグレーション講座は 2 年生の第 3 回の時には同じ学科の人がいませんでした。また 3 年生の第 4 回の時も同じ学部の人数が少なくて、国際学部の人と合同で行いました。登録している仲間が減っていくのは残念ですが、少人数のために他学部と合同の分科会が行われて他学部の登録学生の発表が聞け、他学部の先生の話が聞けたりしたことにも魅力を感じました。

インテグレーション講座の 4 回という回数は適切だと思います。ただ、2 回目以降は日程の選択肢がなくて、決められたその日に出席しないといけないので、日程を合わせるのはやはり大変でした。

ボランティアセンターに来れば本当にたくさんの情報があって、配架されている情報の中にはきっとそれぞれの願いを持っている学生一人一人に合ったものがあることでしょう。

でもその情報にたどり着けていない学生が多くいるように思います。これを広くみんなに知らせる方法を工夫できたなら、多くの学生にとってもっともっとボランティア活動が身近なものになると期待しています。

2　4　継続辞退した登録生への調査の結果

2名の回答を〇印で示した。記述の回答は原文のまま示した。

1　登録した時の気持ち
・ぜひ最後まで続けたい
・できたら最後まで続けたい　〇　2名
・試しに登録して無理だと思ったら継続を辞退しよう
・なんとなく登録
・覚えていない
・その他

2　辞退したいと思った時期
・第1回インテグレーション講座以降
・第2回インテグレーション講座以降　〇　1名
・第3回インテグレーション講座以降　〇　1名
・覚えていない
・その他

3 辞退した理由
・実践時間数135時間が負担　〇　1名
・インテグレーション講座4回受講が負担
・指定科目16単位が負担
・活動報告書を書くのが負担
・思ったようなボランティア活動ができなかった　〇　2名
・サークル活動を優先したい　〇　1名
・アルバイトを優先したい
・登録によってボランティア活動を義務のように感じてしまう　〇　1名
・学業を優先したい　〇　2名
・友人などの付き合いを優先したい

4 どういった手立てがあったら継続できたか（記述）
回答なし

2　5　辞退者の聞き取り調査のまとめ

聞き取り調査は、調査に応じる辞退者の希望日時にオンラインで個別に行った。

①2019 生　T さん

私はサティフィケイトプログラムの途中で辞退しましたが、このプログラムに対してはよい印象を持っていますし、ありがとうございましたという気持ちなので、この聞き取り調査にも応じました。

入学した頃には対面の活動が普通に行われていて、「1 Day for Others」で舞岡公園の田植えや祭りのお手伝いなど体を動かすような活動に多く参加していました。登録 2 年目の第 3 回インテグレーション講座の日程が成人式の前撮りの日と重なってしまい出席できませんでした。それでもすぐに辞退したわけではありません。翌年受講できると聞いたので、しばらくはそのまま登録していましたが、コロナ禍で人と関われる活動も少なく、このままでは 135 時間活動することは無理かもと思うようになって、フェードアウトしていった感じです。

プログラムは辞退しましたが、ボランティア活動は続けています。「樹恩」の「1 Day for Others」ではボラセン職員の青木さんから声をかけてもらいサポート学生をやりました。また障害のある人と一緒にクリスマス会をする「1 Day for Others」もあって、対面でなくても自分のやりたいことのできる活動に参加しています。

3　1　考察

まずは、数値での回答から全体の傾向について見てみたい。回答数が少ないことから、一定の傾向を読み取ることは難しいが、それぞれにこのプログラムを有効に活用できたといった回答や、自分の能力を伸ばすことができたといった回答が多いことから、このプログラムに登録して修了まで続けることに、それぞれに意味を感じていることが読み取れる。ただし、回答した修了生は、もともとこのプログラムに対して前向きな姿勢であったことも考えられるので、修了生全体の傾向であるとは断定できない。

卒業後に何らかのボランティア活動に継続的に取り組んでいる傾向はみられず、活動していないという回答が多い。回答した修了生が就職して間もない段階でまずは社会人生活に適応することが優先される時期であることや、ここ 2 年間続いているコロナ禍で活動が制限されていることの影響も考えられる。

記述での回答や、聞き取り調査によれば、活動時間数については、コロナ禍以前の登録学生は 135 時間の活動時間に対して負担感を訴える意見は見当たらない。適度な時間数であると感じているといえる。コロナ禍以降の意見では、負荷になっているというものがある。この課題については状況に応じて活動時間数を緩和している。

インテグレーション講座について内容は魅力があるという意見が多く、3 年間で 4 回という回数に対しても適切だといった見方が多かった。ただし 2 回目以降は、日程が 11 月の土曜日 1 回に固定されていることについては日程調整の困難を訴える意見はあった。

指定科目の学科ごとの違いによる困難を訴える意見もあったが、現在は登録学生が科目を指定する方法となっていて、すでに改善されているといえる。

今回のアンケートでは、継続を辞退した学生からも回答があり聞き取り調査にも協力してもらえた。辞退に至った様々な理由を選択しており、3 年間という長い取り組み期間のプログラムであることから、学生生活の途中で優先順位が変わる学生がいることは当然である。辞退してもボランティア活動は続けているといった言葉から、ボランティアセンターにとっても修了まで続けられることだけを大切にするのではなく、いろいろな立場の学生の活動を支援をするためのプログラムでありたい。

3　2　謝辞

忙しいなかで、今回のアンケート調査に応じてくださった皆様と、個別の聞き取り調査に応じてくださった皆様に心より感謝いたします。それぞれの調査のなかで、後輩達やボランティアセンターに対して温かな気持ち感じました。今後ともボランティア活動に取り組む後輩達を見守っていただきますようにお願いいたします。

文化や作品を支えるイベントとそのボランティアの関係性

文学部芸術学科４年　冨岡仁湖

１　ボランティア活動に至るまでの経緯

大学生活の目標の一つとしてボランティア活動に取り組む事を考えていたが、経験や繋がりが元々無かった為ボランティアセンターを利用し、1Day for Othersの参加からボランティア活動を始めた。何度か1Dayでのプログラムに参加した後、自主的に好きな事とボランティアが直接繋がっているようなイベントにスタッフとして参加をした。

２　ボランティア実践の内容

内容は事前準備・説明会と、イベントでは入場口の業務を行った。この入場口の業務では、来場者から入場料をもらい、中へ通すという内容であった。

３　実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

イベントスタッフのボランティアを1 Day for Othersだけでなく、自主活動ではA社の蚤の市に参加をした。内容は事前準備・説明会と、イベントでは入場口の業務を行った。この入場口の業務では、来場者から入場料をもらい、中へ通すという内容なのだが、夏の炎天下で屋根もない中、途切れない待機列に接客をし続ける過酷な活動だった。私はこの活動を経て、蚤の市のイベントのスタッフは搾取されているボランティアで運営しており、もはや無償労働のような劣悪な環境であると感じてしまった事がボランティア実践と学びについて考える大きなきっかけになった。

そもそも、このイベントは出展料や入場料を取らないと参加ができない点で、誰にでも開かれているとは言えず、公共性に欠けているのではないか。主催している会社の前提からして、NPO等ではなく、一般的な株式会社だ。イベントを日本にとどまらず台湾でも事業を広げるなど、非常にファンが多い会社である。そのため、参加した他のボランティアスタッフに話を聞いてみると、A社が開催するイベントが好きだった為その手伝いをしたいと思った、という方が非常に多くおり、好きイコール無償で働くという公式が善意の上で当たり前に成り立っている。おそらく、大学で学んだボランティアとの意識のずれはこの前提認識のずれから生まれているのだろう。イベントスタッフの問題として、有償でアルバイトを雇う場合と無償のボランティアを募集する場合の差を考える必要がある。

例えば1 Day for Othersで参加した「あーすフェスタ」は、神奈川県の多文化共生社会を築いていく事を目的に、NPOや民族団体、外国籍県民から構成された企画委員会が中心となりイベントを開催している。対して、この蚤の市は株式会社で作品の仲介者を担うほか、蚤の市のようなイベントの開催、カフェの経営を行っている。先にも述べた通りそのカフェやイベントによってA社自体に根強いファンがついており、それを支えるためのファンコミュニティも形成されているほどだ。スポーツやアートのイベントに、ボランティアスタッフが動員される事は多々あり、それによってコミュニケーションのきっかけになり、地域活性化の効果をもたらす事が期待されている。

しかし、この例の中でも異例のイベントとして、2021年に開催された「東京オリンピック」が挙げられる。オリンピックには莫大なスポンサー収入がある事から、巨大な商業イベントだと言われている。大学の単位や部活動と引き換えに学生をボランティアスタッフとして動員するなど、慈善活動と称した労働力の搾取とも捉えられる現場が広がっていた。 そういった点では、蚤の市のボランティアもA社のファンコミュニティとしての役割を果たしていると言える。しかし、先に述べたように公式で「A社の部員」といった月額制のコミュニティを運営している上、ボランティア同士もイベントの間は多忙故に事務的な会話しかできず、イベントの後アプリを使用してSNSの交流の場は設けられるが、それ以降直接他の参加者と出会うことは無い事から、コミュニティとしての役割を期待しているとは思えない。

もし、ボランティアについて学んでいなければ、「無償の労働＝ボランティア」だと誤解をしたまま、違和感に気が付くこともできずに過ごしていただろう。しかし、この不条理に気が付き、ボランティアという名に隠れた搾取を問題提起する事ができると、サティフィケイトプログラムを通して学んだ。

4　今後の課題、方向

ボランティアの三大原則である「無償性・公共性・自主性」がないがしろにされたまま、好きだという自主性だけを理由に労働を搾取されていることに気が付き、疑問を呈していかなければならない。この意識は、問題視されている日本の創作活動での荒んだ労働状況にも通じていく。最近でもインボイス制度など、作家が政策によって苦しい立場に立たされている様子が浮き彫りになっていた。根本的な関わり合い方を変えていかなければ、この状況からも分かるように、改善される見通しは立たない。芸術活動を行い続けるためには、国や社会をはじめとした人々の手助けが必要だ。それは好きな人だけに期待をするのではなく、社会に必要なこととして皆が受け止め、支援をする事が当たり前になる必要がある。これを理想論で終わらせない為に、将来創作活動をしながら生きていきたいと考えている一人の社会に関わる大人として、まず作家が日本でどんな扱いを受けているのか、作品がいかに身近な存在で関わり合いを必要としているかの認知を深めていきたいと考えている。

ボランティア活動と芸術

文学部芸術学科 4 年　富田汐里

1　ボランティア活動に至るまでの経緯

私は、入学前にみた大学のホームページでボランティア活動が有名なことを知り、今までボランティアの経験はなかったが、挑戦してみたいと思った。入学後、ボランティアセンターからのお知らせで、明学独自のサティフィケイト・プログラムや 1Day プログラムの存在を知り、何から始めていいか分からなかった私は、手あたり次第に参加した。二年生になり、SNS で MGCloset というファッションに関する社会問題の発信を目的としたボランティア団体が発足したことを知り、その時期アパレルショップでアルバイトをしていた私は、直感でその団体に入ることを決めた。そのような経緯があり、私は本格的にボランティア活動を行うようになった。

2　ボランティア実践の内容

MGCloset での活動は、主にファストファッションにおける社会問題の発信を目的とする。具体的に、2019 年の秋に明治学院大学白金校舎アートホールで行った『古着でファッションショー』では、学内外の学生や知り合いから古着を集めて、リメイクやコーディネートを組んで、着られなくなった服を蘇らせた。この活動の中で、私は普通に芸術学科で過ごしていたら出会わなかったような他学部（主に国際学部）の MGCloset メンバーやボランティアセンターの方々と出会い、同じ目的に向かって対話することができた。このような経験から、ボランティアはやりたいことが見つからない学生のためのエンパワーメントになると感じた。

古着でファッションショーの様子

また、2020 年の活動では副リーダーとして、コロナ禍での活動に携わった。具体的には、問題発信のための YouTube チャンネルの開設や団体発足のきっかけとなった映画『The True Cost〜ファストファッション 真の代償〜』を上映するオンライン・シネマフェス、古着からマスクをつくることを推奨するマスク・プロジェクトなどの活動を行った。特に、YouTube 活動に尽力し、着回しコーデ企画や同じファッション関連のミッションを掲げる他団体とのコラボ企画を実現した。しかし、このような不特定多数に向けてのソーシャルメディアを利用した情報発信は、当然フィードバックとして視聴回数や登録者数に向き合わなければならないものであり、数を求めすぎて目的を見失ってしまう危険性を帯びる非常にリスクの高い活動であった。

You Tube 動画のサムネイル

3　実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

私は、大学生活の二つの場所での学びを通して「ボランティア活動と芸術」を結び付けることができた。一つ目は、上記で述べたボランティア団体 MGCloset での学びである。二つ目は、世界中で行われているアート活動を学術的に批評する芸術学科としての学びである。例えば「現代社会と芸術 2a」や「アートマネジメント論」という講義では、社会問題の提起が創作の出発点となっているアート活動を学んだ。

以上、二つの場所での経験と学びから、ボランティアと芸術を結び付け、娯楽や発散だけではないアート活動の奉仕的な役割を見出すことができた。さらに、ボランティアの一環として、アーティスティックでクリエイティブな活動を行うことは、ボランティア活動を楽しむことを肯定することであると感じた。そのことは、私自身がボランティア活動を行う際に、芸術をともに楽しむという考えかたを組み込んでいくという新たな視点を与えてくれた。また、しばしばボランティア活動において、活動を行う側の精神力が削られてしまうことが問題として挙がることがあるだろう。そのような問題に対しても、芸術活動を楽しむ視点をボランティアの考えかたに持ち込むことで、ボランティアをする側とされる側との二分化を避けることができるのではないかと考える。

4　今後の課題、方向

私は、ボランティア活動と芸術の繋がりを四年間の学びと活動を通して、実感へと変えることができた。芸術は、人と人とが世間体やその人の背景を取っ払って、互いを尊重し合えるものであり、それはボランティア活動においても私自身が楽しむことが社会貢献に繋がっていくことがある。私にとって、芸術活動もボランティア活動も、私自身の楽しい感情が周りの人に伝達していくことが、やりがいであった。このようなことから、私はこれからも自分も周りの人たちも楽しめる創作活動を続けていきたい。

卒業後は、地元の地域密着型のテレビ局に就職することに決めた。この選択も、これまで述べてきたような大学四年間の芸術とボランティアの学びがあったからであると強く思う。そして、テレビ局でのコンテンツ制作を通して、地域活性化や地域で暮らす人々の支援に尽力したいと考える。具体的には、私が実際 MGCloset で出会った仲間たちのように、信念や目標を持った地元の学生団体などの支援を行いたい。そのように、取材やリサーチを通して、地域の潤滑油として、人と人とを繋ぐ役割を担う仕事がしたいと考える。

また、仕事とは別に、今後必ず実現したいと思っていることに演劇のお寺公演がある。私の実家はお寺であり、そこには毎日のように様々な人々が出入りしている環境がある。そのような地域のちょっとしたコミュニティの場であるお寺で、孤立が進む高齢者と地元の若い人たちを繋げるような演劇の公演をうちたいと考える。このことは、まぎれもなく四年間の経験と学びから辿り着いた発想であり、今の私の最大の長期目標である。

居場所～ボランティア活動を通して～

文学部フランス文学科 3 年　二見朋香

1 テーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

私は 1 年次から「MGCloset（以下 MGC）」と「わたぼうし教室 横浜（以下わたぼうし教室）」というボランティア団体で活動をしていた。MGC とはファストファッションの裏側にある社会問題に興味関心を持ったメンバーが作った団体である。この社会問題を多くの人に知ってもらうために啓発活動を行っている。この団体は「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ 2020」の支援を受けて活動を行った。そしてわたぼうし教室は、外国にルーツのある子供たちに日本語や簡単な勉強を教える学習支援教室だ。

3 年次になり MGC の代表になったことを機に、2 つの団体のコラボ企画である「MGsChool」を立ち上げた。理由は、小中学生にファストファッションの裏側にある社会問題について知って欲しいと考えたからだ。服に興味のある子供たちが多かったので、この問題も知ったうえでファッションを楽しんでほしいと思った。

MGC の代表になり MGsChool を通して沢山の人と関わり、自分の思いを伝えることの難しさを知った。

2 ボランティア実践と学び

まずわたぼうし教室との出会いは「多文化共生各論 1,2」という授業だ。そこで初めて「外国にルーツのある子供たち」に出会った。私は「グローバル社会と市民活動入門 1」という授業を受け、彼らの存在を知った。横浜に多く住んでいると知り、彼らに関わるボランティア活動がしたいと思った。

わたぼうし教室で実際に行った活動は主に 2 つだ。学校の宿題を見ることと、子供たちに頼られる存在になることだ。前者では主に国語と算数を見た。漢字の書き順や音読、算数のプリントの丸付けや解説などだ。難しかったことは子供たちの集中力が続かないこと、訂正しても聞き入れてもらえなかったことだ。しかしご褒美を作ったり、繰り返し伝えたりすることで改善出来た。後者では、勉強の合間に日本語で話しかけたり、自由時間に一緒に全力で遊んだりすることによって、だんだん心を開いてくれた。

私が学習支援に関わるにあたり意識していたことが 3 つある。1 つ目は子供に心を開いてもらえるように、自分が心を開くように努力したことだ。最初は初めてのことばかりでどのように接したら良いかわからなかったが、周りの先生の行動をよく観察し真似した。例えば話すときに相手の学校のことを聞いたり、自分のことを話したりすることで、普通に話してくれることが分かった。なかなか話してもらえなかった子が、私に話すようになってくれたことがとても嬉しかった。

この活動は授業で行っていたので、「多文化共生各論 1,2」の授業では沢山の学びがあった。授業では外国にルーツのある子供たちの背景や現状を知ることが出来た。現状には沢山の問題があり、そこには彼らの親の状況が関わっていて、日本の労働環境も影響していた。そういう現状があることを知ることが出来た。またこの現状を多くの人に広めたいと思う。他にも同じような境遇の外国人労働者として、「留学生」や「技能実習生」についても学んだ。また彼らは自分が働ける場所を増やすために、夜間学校に通い日本語や日本の文化について学んでいた。彼らはいわゆる「移民」だと思う。移民に関する諸問題は、日本を含めた世界中に存在している。

ここで日本とフランスの移民事情を比べてみたい。「フランス社会の諸相 A,B」で私はフランスの移民について習った。共通点としては移民を「人」としてではなく、「労働力」として受け入れていた過去があることだ。相違点としては、フランスは同化政策のため日本とは対応の仕方が異なることだ。例えば教育の面では、勉強が出来ることと同じくらい礼儀が重視される。しかし移民の子の親はフランスにルーツを持っていないので、フランスの礼儀を知る機会が少ない。フランスの礼儀とは、普段の学校で学ぶことも含まれるが、一番重要だと感じるものは言葉遣いだ。言葉遣いを教えることは学校でもできるが、その必要性を理解することは難しいと思う。フランスにルーツのある家庭では、親も高度なフランス語を使用出来る家庭が多いため、必要性を作り出すことが出来る。しかしフランスにルーツのない家庭では、そのような言葉遣いを知っている親が少なく、子供もその必要性を理解するのは難しいように思う。そして同じように勉強が出来るようになっても移民の方が、失業率が高いというデータがある。「移民の失業率は 16.1％と高い水準にあり非移民の 8.5％と比べて 2 倍近い[1]。」

次に MGsChool についてだ。MGsChool とは MGC とわたぼうし教室のコラボ企画であり、ファストファッションの裏側にある社会問題を伝えるという目的がある。

イベント当日はハイブリッドで、オンラインでは MGC のメンバーが、対面では私とわたぼうし教室の方が参加した。オンラインでは、ファストファッションの裏側にある社会問題についての説明が行われた。私は彼女たちに対面の様子を伝えなければいけなかったが、上手く伝えることが出来なかった。その結果大事なことが伝えられず、イベントの時間は延びた。私は事前に MGC メンバーに、子供たちがどんな子なのか、どれくらい日本語が分かるのか、このイベントを通して本当に伝えたいことは何か、ということを全て伝えているつもりだった。しかし実際に企画を行っていく中で、初めて何も伝わっていないことを知った。

---

[1] 独立行政法人 労働政策研究・研修機構（2013.2）「移民人口、生産年齢人口の約１０％に ―失業率は非移民の２倍、政府が報告書」移民人口、生産年齢人口の約 10％に（フランス：2013 年 2 月）｜労働政策研究・研修機構（JILPT）

イベントは午前と午後の 2 部構成だったので、昼休みにわたぼうし教室の皆さんに関わっていただき、私が MGC メンバーに伝えたかったことをもう 1 度伝えてもらった。そのおかげで午後は無事成功させることが出来た。

私がそこから学んだことは、わたぼうし教室は私の居場所でもあったことだ。私は、わたぼうし教室は、外国にルーツのある子供たちがいじめなどを受けず安心して居られる場所として機能していると思っていた。もちろんその通りだが、それだけではなかった。このイベントが終わった時、わたぼうし教室の先生が「1 人でよく頑張ったね。困ったらいつでも戻っておいでね。」と声をかけてくれた。その時初めてわたぼうし教室が自分の居場所でもあることを認識した。そのことに気付けたことがとても嬉しかった。

私がこの経験から学んだことは、コミュニケーションを取ることの大切さだ。コロナ禍だからこそ、伝え方を工夫することや人に頼ることの大切さを学ぶことが出来たと思う。

3　今後の方向

私がやりたいことは、ボランティア活動を通して人の居場所を作ることだ。その理由は私と同じように居場所が無くて困っている人を助けたいと思うからだ。彼らに少しでも「自分もここに居ていいんだ。」と思ってもらえるような環境作りがしたい。そのためには、自分のような立場の人が居ることを他の人に知ってもらわなければならない。だから私はまず自分がどういう立ち位置に居て、何に困っているかということを伝え続けていきたいと思う。一歩踏み出すことで新しい人と関われたり、深い関係になることが出来たり楽しいことが沢山あると気付いた。ボランティア活動や自分自身の発信も、続けていきたいと思う。

感動体験が笑顔の源

社会学部社会学科 3 年　森橋江里夏

1　ボランティア活動に至るまでの経緯

私は NPO 法人戸塚てらこやで戸塚区内の小学生へ向けたイベントの運営･企画で 10 名の統括を行っている。昨年 10 月はパンプキンウォークラリー、12 月は巨大クリスマスツリー作りなど様々な企画を 3 ヶ月に一度、7 つの役職に分かれて作っている。他にもオンライン活動、学童訪問、月に 1 回自由に遊ぶ「ワールド」という活動などがある。

私が戸塚てらこやに参加した理由は戸塚てらこやの理念に共感したからだ。それは「感動体験」、「よき人との出会い」、「複眼の教育」の 3 点だ。1 つ目の感動体験は子どもたちにイベントなどを通して忘れられない体験を届けること。2 つ目のよき人との出会いは学校とおうちに居場所がある子どもたちにとっては親や先生と関わること。そこに大人でもない子どもでもない、私たち学生が入り関わりを持つことが大切という考えだ。最後に複眼の教育は子どもたちを地域で育てていくという視点を持つことだ。私はこの 3 点から大学生や大人を含む地域で子どもたちに感動体験を感じてもらうことで笑顔を増やしている。

2　ボランティア実践の内容

3 ヶ月に一度のイベントで一番印象的だったのが、2021 年 4 月テレビ番組 逃走中のパロディ版「脱走中～戸塚トレジャー 7 ～」という、ミッションを行いながら鬼から逃げるイベントで統括をしたことだ。今年はトレジャーハンターになってミッションを行いながら 7 つの財宝を探し、モリノタミから逃げ魔王を倒すという物語で進行した。ミッションは箱の中身はなんだろなゲームや輪投げゲームなどがあり、成功すると子どもが鬼になれたり鬼を 1 体消滅できたりするチケットをゲットできる内容で子どもたちと学生のわくわくを引き出すことができた。また新型コロナウイルス感染症の影響で「脱走中」が延期したため、「オンラインイベント脱走中」という脱出ゲームも行うことができた。

2 つのイベントを「You,スターだよ！」という題名にした。端的に言うと子どもたちが、自分がなりたい・やりたい・したいことにむかって頑張れたことは輝くということだ。具体的に言うと私は小学生の頃「逆上がりができるようになりたい」という思いがあった。しかし大学生の今もできない。でも逆上がり補助具を使ってならできた私は輝いていて、やりたいことにたどり着かなくても、その過程が大切ということを学んだ。こんな風に子どもたちにも脱走中でチャレンジしたという輝いた瞬間を思い出して、次も頑張ろう！という自信に繋がったら嬉しいと考えた。

「脱走中」当日、久しぶりの対面活動で緊張していたが、ミッションを通して「おれ、

あれやりたい」「やってみようかな」などの声が聞こえた。途中ミッションが失敗し泣いてしまい悔しい思いをした子もいたが、それは子ども達自身が心から“成功したい”と思ったからであり、輝いた瞬間を見ることができたと思った。また終了後、ある兄弟が迎えに来た親御さんに楽しかったことや挑戦したことをキラキラした目で話している姿が嬉しかった。目標に誰かに言いたくなるような経験をしてほしいという思いも含めていたため、達成することができたと思った。

３　実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

私はこの経験から「社会調査実習」で学んだ子ども達を地域で巻き込み育てていく大切さに気付くことができた。授業の中で戸塚昭和会さんにインタビューでコロナ禍の商店街についてお伺いした際「戸塚小学校に１１００人の児童がいるんです。それでマンションもできて、若い子供たちが多くなりました。戸塚は東海の宿場町ですから、昔から人が住んでいて、当然高齢の方もいらっしゃる、子どもからお年寄りまでいるので、全世帯をなるべく見られるようにしていきたい」「戸塚に住んでいる子ども達は夏祭りを一番楽しみにしている」など商店街に目を向けるだけでなく子ども達を地域で育てていることがわかった。これは戸塚てらこやの理念“複眼の教育”に通じる部分があると考えた。私はこのインタビューから色々な人と関わることが大切と気づき、社会人の OGOB も含めたイベントにしたり、会議で子どもの意見をいれることでコロナ対策を行ったりした。子どもたちにとって地域が老若男女問わず関わることができる安心できる場所と感じてもらう場所にしたいと考えた。

また「公的扶助論」の授業で子どもの貧困率が 14.0%、ひとり親世帯の子どもの貧困率が 48.3%と習った。戸塚てらこやは違う小学校や大学の人と出会う場所でもあり、相手の住んでいる環境を明かすことなく遊ぶことができる。今社会問題となっている子どもの貧困含め虐待やヤングケアラー、いじめなど様々な問題を抱えた子がいると思う。そんな子たちが戸塚てらこやでは自分をさらけ出せると思ってもらえることで、「脱走中」のように自分のやりたいことに夢中になれるのではないかと考えている。

４　今後の課題、方向

この二つの授業から、私は子ども達を大切にしていくのは“地域”というキーワードを意識していくべきと思った。私たちは地域の大学生としてちょっと大人だけど歳が近い身近なお姉さん、お兄さんになることで子どもたちの悩みに寄り添い、感動体験を一緒に味わうことができると思う。

今後私はコロナウイルスの蔓延が原因でできなかった分のイベントを沢山行い、多くの子どもたちと関わり、地域づくりの一員になりたい。戸塚商店会の方のように地域という広い目で見たうえで、子どもや高齢者、障害者と細分化されたカテゴリーでも見ていきたい。それは社会的弱者を取り残さず一人ひとりの悩みや相談を解決することが多くの人の解決につながるからだ。戸塚てらこやでも学生と子ども一対一で関わり

それが１つのチームとなり、その各チームをまとめてイベントが開催される。このように広い目でも狭い目でも見ることで、子どもたちに多くの体験や感動を与え地域の発展に貢献していきたい。

人と人とのつながり

社会学部社会福祉学科 3 年　瀬戸瑞生

1　ボランティア活動に至るまでの経緯

私は大学に入学してから本格的にボランティア活動を行ってきた。ボランティア活動を始めたきっかけは、「誰かの手助けをしたい」「学内では体験できない地方や幅広い年齢の方、様々なバックグラウンドを持つ方々と交流したい」「活動を通して視野を広げ新しい世界を見つけたい」という 3 点の想いからである。

2　ボランティア実践の内容

主な活動の場として「東日本復興支援プロジェクト吉里吉里セクション」がある。この活動は東日本大震災で被災した岩手県大槌町吉里吉里地区と交流する団体であり、1 年次は地域の小学生の授業を担ったり、地域の方々と交流会をしたりしてきた。2 年次以降コロナウイルスのため、現地訪問は困難になったため、過去の活動内容や復興の歩みをまとめた冊子を作成し、気持ちの面で交流を行ってきた。

3　実践と学びをどうつなげ、どう深めたか

この活動を行ううえで大学での学びがボランティア実践に大きく影響を与えたと考える講義は 2 つある。「共生社会の理解」と「福祉開発フィールドワーク」だ。

まず 1 つ目の「共生社会の理解」は 2 年次の秋学期に八木原律子先生の講義を受講した。内容としては、「共生社会」をキーワードとし、異なる文化や価値観、環境の違いを超えて、多様な人々の暮らしぶりから「共生社会」の実現について学ぶ講義である。この講義を受けたとき、吉里吉里セクションの活動としては、感染症流行により、現地訪問に限界があり活動方針に迷いを感じていた頃で、活動をしないまま感染症終息を待つより、何か行動をおこし交流を図りたいと考えていた頃であった。またその交流方法として、オンライン交流会を開くという案が挙がったが、実際この案は①現地はお年寄りが多く、通信機器を持っていない人やオンラインの利用が慣れていないこと。②現地が地方で都市部と離れているという事もあり、立地の問題で通信環境が整っていないこと。③現地でも集会などを自粛しているということで、多くの人が集まる機会が設けられないこと、また人を集めることを望んでいないこと。これらの理由から、オンラインでの交流は難しく、実現が不可能であった。そのため新たな案として、冊子作成という案が挙がった。オンライン交流会が難しいとされた条件を踏まえると同時に、交流する事に重点を当てていたが、「交流する＝同じ時間を共にする」だけではないということに気がついたからだ。またちょうど翌年が震災から 10 年で、セクションが始まってから 10 年という節目の年であるという点から、今までの復興の歩み

をまとめると同時に、10 年間私たちが活動を続けて来るために必要不可欠であった現地の方の支援と理解、またボランティアという立場であるにもかかわらず、現地に赴けていない私たちに親身になって相談に乗ってくださるなど、様々な感謝の気持ちを目に見える形で伝えたいという思いからの案だ。結果としてこの案が採用され後に作成に向け活動が始まる。振り返るとこの講義を受け、人間には一人ひとり異なる生活背景があり、地域によっても異なる環境があることを理解した事で、学生と現地の方にも環境や考え方が異なり、実現できない事があると理解することができ、すぐに新たな活動方針を立て進める事が出来たと考える。

次に「福祉開発フィールドワーク」は短期インターンシップを通じて様々な社会的課題の実態や非営利組織・社会的企業の運営方法について学ぶ内容の高城芳之先生の講義で、2 年次に通年で受講した。講義内で自分に大きく影響を与えたのは、町おこしをしている団体への短期インターンシップで、この団体は商店街の中心的役割に位置し、季節によってイベントを主催することや、加盟店と住人を繋げる役割を行っていた。この経験から人のつながりから活動の幅が広がることを実感し、「人と人のつながり」の大切さを強く感じた。またこの経験と同時期にセクションでは、冊子作成で過去に活動に携わった先輩方に連絡を取れるように LINE のグループを作成したが、招待方法として各年代の代表者がその学年の方と１つ上の学年の代表者に声をかけ、グループに入って頂くという方法をとった。この結果活動に携わったすべての学年の先輩方に声をかけることが出来、「人のつながり」が持つ力の大きさを感じた。また講義で PDCA サイクルを学んだことで、この 4 段階をより意識して繰り返し行う事が出来、慎重に活動を続けることが出来たと感じている。

4　今後の課題、方向

今後はボランティア活動で「人と人とのつながり」の大切さを感じたからこそ、どの様な形かは分からないが、大学内だけでなく社会に出てからも様々な場面で「人とのつながり」を大切にしていきたいと考える。そしてそのつながりから自分を高めることや、自分の活動の幅を広げるなど、可能性を広げていきたいと考える。そのためにまずは、相手の立場や生活背景を踏まえた上で自分からアクションを起こしていきたい。そして私が困難に直面したとき、多くの方が手を差し伸べて下さり、とても助けられた経験があるからこそ、私自身も困難を感じている人を支えることの出来る人間になりたいと考える。

また行動面に関しては人とのつながりをつくるために、様々な活動に携わっていきたいと思うが、ここでは PDCA サイクルを意識して行動していきたいと考える。その中でも私は行動をしたまま終わらせてしまうことがあるので、次のサイクルにつながる「評価」・「改善」の部分に特に力を入れ、より活動の質を高めていきたいと考える。ボランティアを通じて得た様々な経験を、今後の生活に活かしていきたい。

3　ボランティアファンド学生チャレンジ

総括

学生が自ら企画し、その活動を応援する奨励金制度「ボランティアファンド学生チャレンジ（＝以下ボラチャレ）」。2021 年度は前年同様、まだまだコロナ禍の影響が続き、計画どおりとはならなかった活動がほとんどである。

ただしコロナ禍も 2 年目となり、リモートによる活動や、各種宣言発令期間の合間に個別にできることを実施する等、状況に応じた対応を行うようになった。

とはいえ、コロナ感染者数のピーク（波）は、収まったかと思えば次々と変異株の出現で新たな感染拡大を迎える状況下で、安易に簡素化するのではなく、思いをきちんと実現させたいと何度も延期を余儀なくされ、4 度目の正直で実現できたプログラムもあった。対象者である子どもたちと、受入をしてくださったボランティア団体の方々の協力は大変ありがたかったと同時に、実施した学生の思いが伝わったからこそ、最後までお付き合いくださったのだと思う。

次のページから各団体のメンバーに報告を書いてもらっているが、そちらをお読みいただくと、各プロジェクトを進める中で、周囲の人々や関係団体などとのやりとりから多くの気づきや学びがあったことが随所に書かれている。

一方で、集団で現場に出かけて活動をすることについて大幅な制限があるため、どうしても私たちもその中での紆余曲折や学生が学んだことへのフォーカスしがちであった。しかし今後は、本来そのボランティア活動をどうして行うのか、実施した結果、対象者や周囲の関係者、ひいては社会に対してどういう影響を与えることができたのかなどの成果をお互いに共有しながら取り組んでいけるようにしていきたい。

（ボランティアコーディネーター　菅沼彰宏）

募集要項は、以下の通りである。

募集内容	テーマ：「社会課題にチャレンジ！」 社会の課題を発見し、解決のためにアクションを起こすチャレンジ精神のあるみなさんを支援します。分野は問いません。 奨励金：原則上限 20 万円
応募資格	明治学院大学の学生による学生団体、ゼミ、サークル等による活動の企画であること ・個人の活動は対象外となりますが、2 人以上でチームを結成すれば申請できます。 ・メンバーに卒業生や他大学生、社会人等が含まれる場合、メンバーの半数以上が本学学生であること。
助成対象期間	2020 年 12 月 1 日（火）～ 2021 年 11 月 30 日（火）

応募方法	「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ応募用紙」をメールにて提出
選考	提出書類をもとにボランティアセンターと面談
援助対象	活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、 使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など）、保険料 ※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用
活動報告/提出物	・中間活動報告会（2022 年春学期中）にて途中経過報告を行う ・活動終了後、2022 年 12 月末日までに、以下を提出 活動報告書および写真 「奨励金使途報告書」・領収書

2020 年度助成企画　※助成期間：2020 年 12 月～2021 年 11 月

プロジェクト名	団体名	助成金額	使用額
ぬいぐるみ旅行で旅行気分！	りもぐるみ	¥200,000-	¥1,650-
MGsChool	MGCloset	¥50,500-	¥3,390-
子どものよさを伸ばすには？～子どもの発達や支援の面から～	障害児医学ゼミ　18pe	¥140,000-	¥93,430-
ガールズフェスティバル	UP!UP!UP!	¥57,000-	¥10,000-

◇ぬいぐるみ旅行

プロジェクト名	ぬいぐるみ旅行で旅行気分！
団体名	りもぐるみ
企画の目的	コロナ禍で失われた交流をぬいぐるみによる旅行体験によって取り戻し、新たな交流や楽しさの提供に繋げる。

実施概要

◎りもぐるみの活動概要

私たちの主とした活動内容はぬいぐるみ旅行である。ぬいぐるみ旅行とは、参加者にぬいぐるみを送ってもらい、そのぬいぐるみと一緒に旅行をして写真を撮る。その写真をアルバムにしてぬいぐるみと共に参加者に届け、旅行気分を味わってもらうというものである。これにより、コロナ禍で失われた人々の交流を取り戻し、新たな交流へと繋げることを目標に活動をしている。いつでもボランティアチャレンジ(以下、いつボラと表記)での活動から引き続き、複数回ぬいぐるみ旅行を行う予定だったが、新型コロナウイルス感染症の再拡大などにより、申請時点での予定を大きく変更し、人々とのオンライン交流をメインとした一年間となった。

〇前半期(2020.12～2021.7 頃)の活動

いつボラの活動に引き続き、岐阜県下呂市のどんぐりの会(障碍者団体)を対象に活動を継続する予定であった。Zoom を利用したオンライン会議により、どんぐりの会の方に楽しんでいただくために会議を重ねた。しかし、どんぐりの会には高齢の方が多かったこと、ぬいぐるみを持っている方が少なかったこと等の理由から、どんぐりの会を対象にすることを断念した。この反省から、小中学生を対象に活動をした方がこの活動に興味を持ってもらえるのではないかと考えた。コロナ禍により、友達などとの交流を失われた小中学生がいると考え、そのような人を対象に活動を行っていくことにした。

〇後半期(2021.8～2021.11 頃)の活動

前半期の反省をもとに、ボランティアコーディネーターの田口めぐみさんに繋いでいただいた縁で、岐阜県下呂市の金山中学校を対象に活動をしていくことにした。金山中学校には日本にきたばかりで不登校ぎみになっている男子生徒がいたので、その生徒が登校することが楽しみになるようにと Zoom 交流を行っていくことになった。この活動は現在も継続中であり、今はその生徒とぬいぐるみを介した交流を始めている。また、金山中学校のボランティアについて考える会のゲストスピーカーとして招かれ、金山中学校の生徒と交流することができ、また新たな交流の可能性を広げることが出来た。

芝公園で記念写真。背景には東京タワー

感想・活動を通して得た学び

私たちの一年間の活動において一番良かったと考える点は、時世や状況によって活動が思うようにできなかったときに、臨機応変な対応で活動を続けることができた点である。今後活動をする上で活かしていきたい点である。

また、初めは不登校ぎみで学校に来たがらなかった生徒が、私たちとの交流を通して学校に来ることが楽しみになり、今は毎日誰よりも早く一番に登校しているという話を聞いたとき、とても喜びを感じると共に、私たちの活動は意味のあるものであることを再確認することが出来た。そして、日々のオンライン交流も、金山中学校との交流も、私たち自身がとても楽しみながら活動できている。私たちが喜ぶこと、楽しむことができる活動が人々を笑顔にしていることを日々実感しているので、これを忘れずに活動していきたい。

今後に向けて

現在、新メンバーを迎え、また新たな形でぬいぐるみ旅行を行っていく計画を進行中である。人数が増えたことにより、さらに活動の幅が広がったこと、私たちの代が終わっても活動が続いていく可能性があることをとても嬉しく思う。これからも私たちにできることを考えて活動し、私たちの目標である“人々を楽しませるボランティア、そして私たちも楽しむボランティア”を続けていきたいと思う。

下呂市立金山中学校へぬいぐるみ発送。白金校舎のボランティアセンター内にて記念写真

（経済学部経営学科２年　山本美月）

◇MGsChool

プロジェクト名	MGsChool
団体名	MGCloset
企画の目的	より多くの方にファッション業界の裏側にある社会問題について知ってもらい、興味を持ってもらうため。また高大生は SNS での発信を見ることが出来るが、小中学生は見ることが難しいと感じた。しかしより偏見が少ないのは小中学生である。そのため小中学生にこの問題について伝えようと思った。

実施概要

・わたぼうし教室

1 月から準備を開始。まず小中学生が学校でどのように SDGs について習っているのか、図書館で小中学校の教科書を借り調べた。その情報を共有したうえで、私たちはこの企画を通して何を伝えたいのかを考えた。それをもとにパワーポイントを作るための情報収集をインターネットを使い行った。また小学生はファストファッションの裏側にある社会問題をあまり知らないだろうと想定したため、どのようにしたら興味を持ってもらえるか考えた。最終的にはクイズを行うことや、古着からエコバックを作る、人や動物のモデル・服の型紙を使ってコーデを組んでもらうというワークショップを通して、興味を持ってもらうことにした。そのための準備も進めた。当日の進め方を確認するため「わたぼうし教室」の方と連絡を取り、必要なものを準備した。またフィードバックを頂くため、子供用、親御さん用、先生用のアンケートフォームの作成も行った。

コロナウイルスによる緊急事態宣言やまん延防止重点措置などの影響を受け、3,5,7 月に延期を余儀なくされた。それでも諦めることなく 9 月に対面とオンラインのハイブリットという形で、企画を実施することが出来た。

当日のイベントの流れ

午前

・挨拶（MGCloset の紹介と今回のイベントに対する思い）
・パワーポイント、クイズ
・ワークショップ
・アンケート記入

午後

・挨拶（MGCloset の紹介と今回のイベントに対する思い）

・ワークショップ
・パワーポイント、クイズ
・アンケート記入

・玉川学園（小中高生）
コロナウイルスの影響により実施は保留。結局実施することは出来なかった。先方の学校の授業が遅れているため時間を確保することが難しいこと、MGCloset メンバーが対面で行くことが出来ないことなどが課題として挙げられた。

服のコーデを組むワークショップの様子

感想・活動を通して得た学び

パワーポイントやレクリエーションの準備をオンラインで行うことは難しかった。コロナウイルスの影響により何度も企画内容の変更、延期を余儀なくされた。そのためわたぼうし教室では日本語が分からない子供たちが中心で参加することになった。「外国にルーツのある子供たち」と関わる機会もなく、どのような子供たちかわからないまま準備を進めることになった。「外国にルーツのある子供たち」がどんな人かは聞いていたがイメージが湧かなかった。そのため自分たちが思っていたよりも伝わらず、伝えることがとても難しかった。また自分たちの中では子供たちに楽しんでもらえるようなイベントを作ったつもりだったが、想像の範囲でしかなく実際は退屈していた。パワーポイントで一方的にたくさんの情報を与えるのではなく、自分で考えてもらったりする必要があったと感じた。

午後はわたぼうし教室の先生方のアドバイスにより、小学生に分かりやすいように簡単な日本語を使い、ゆっくり話したことで私たちが伝えたかったことを伝えることができた。また内容では、1 トンの重さを子供が知っているキリンに例えて具体的に示すなどパワーポイントを工夫することが出来た。またパワーポイントやアンケートにルビをふったり図を分かりやすくしたり、英語表記も行えた。

ここから学んだことは、わたぼうし教室の子供達はもちろん、MGCloset のメンバー同士のコミュニケーション方法も工夫が大切で、お互いを尊敬、気を遣わないと伝わらないことに気が付いた。

またオンラインなのでそれぞれでの活動となったが、全員で成功に向け改善策を考え実践できたことが、実際に会を作っているという達成感に繋がった。この活動を無事やり遂げられたことで、とても良い経験となり、自分たちの自信にもつながった。

今後に向けて

これからの活動の中では、まず今回のように啓発活動を行う際には、下調べをしっかり行い、メンバー内での意思疎通を大事にしたいと思った。また今回学んだ、人との関わり方、伝え方の工夫も大切にしたい。そして今回はオンラインでの活動ということで全体が見えなかったので、次回は全体が見えるような工夫を行いたい。

個人としては、これからのイベントを行う際には、自分の意見の提示をしたりするなど積極的に参加したい。

古着からエコバックを作るワークショップとアンケートの様子

オンライン参加の学生による社会問題の説明の様子

（文学部フランス文学科３年　二見朋香）

◇子どものよさを伸ばすには？

プロジェクト名	子どものよさを伸ばすには？
団体名	障害児医学ゼミ 18PE
企画の目的	1 人でも多くの保護者の方々が安心して子育てができるように、授業やゼミで私たちが学んだことを活かして子育て支援パンフレットを作成した。

実施概要

子育て中の保護者の方を対象とし、子育て支援パンフレットを作成・配布。子どもや保護者の方の日常生活における困り事や不安を軽減できるように、パンフレットには子どもと関わる上でのヒントや子どもの発達に関する知識、相談機関について記載した。このパンフレットが保護者の方にとって子どものことを知るきっかけとなり、子どもと保護者の方が上手く関われるようになってほしいという思いでゼミ生一同作成した。配布場所はボランティアセンター（横浜・白金）、児童館、図書館、小学校、知り合いの保護者の方など。

感想・活動を通して得た学び

パンフレット作成を通して、障害児の発達や支援方法に関して改めて知識を学び直すことができた。また、教授やボランティアセンターの方々、専門機関の方々からご指摘を頂いて推敲していく中で、読み手（保護者の方）にとって分かりやすいように文言を変えたり、見やすいイラストにする等を繰り返すことを通して、常に相手の立場に立って伝わりやすいように工夫することが大切であることに気がついた。子育てに不安を抱えている保護者の方の目線に立ち、具体的に子育て支援とはどういうものなのか、また、保護者の方にどういう言葉掛けをしたら安心してパンフレットを読んでいただけるかを意識してパンフレット作成に尽力することができた。

今後に向けて

今後も障害児やその家庭に関する支援について学びを深めるとともに、支援現場でも学んだことを活かせるように努めていきたい。また、実際に子育て支援の現場に入った際には、子どもの特性に合わせて接し方を臨機応変に変えていくことや、子どもや保護者の方が置かれている状況を常に配慮することを意識していきたい。

ゼミ生全員で完成したパンフレットを持って撮影

（心理学部教育発達学科 4 年　五十嵐詩織）

◇ガールズプロジェクト

プロジェクト名	ガールズプロジェクト
団体名	UP!UP!UP!
企画の目的	近年問題視されている【女性労働問題】についてイベントを通じて参加者に発信し、より多くの方々に【女性労働問題】について考える場を設ける事が目的である。 また学内の、フラサークル Lokahi、海外プログラム事業部、MGCloset の三団体が集まり、一つのイベントを行う事で、団体ごとの違う角度からこの問題についてアプローチしていく。

実施概要

メンバー内で、気になるジェンダー問題の勉強会を隔週で行い、メンバー内での知識を深めた。

具体的な内容としては、フラダンスにまつわるジェンダー問題、ファッションにおける男女差別、日本における男女の賃金格差について、学校教育の男女差別について、ジェンダーにまつわる本や作品を共有し合い、毎回のディスカッションを通して、考えを深めていった。

さらに、3 月 27 日には茨城大学の長田華子准教授をお招きし、『ジェンダー問題からみるファストファッションの世界』を開催した。イベント内では、講義によるインプットとディスカッションでアウトプットをすることで、参加者同士で考えを共有する時間も取ることができた。

その他、SNS での情報発信も積極的に行うことができた。

感想・活動を通して得た学び

今回の活動を通じて、学んだことは３つある。

まず、ボランティアチャレンジとして、初めて他団体と共同で勉強会からイベント開催まで行うことができた。

もともとは、違う環境で活動していた人たちだったため、活動の進め方、ミーティングの設定の仕方など様々なことの基盤が異なっていた。しかし、数回のミーティングや対話を重ねることで、互いの良いところを取り入れつつ、1 つの団体として活動していく指針ができ、最終的にはもともと所属していた団体の垣根を超えて、メンバーが１つになった。

そのようなメンバーで隔週のジェンダー問題について勉強会を行うことで、結果的に、自分たちの知識も付き、お互いの考え方を聞けたことで、新たな観点に気づくことができた。

また、答えや解決策がなかなか出にくい問題にどう立ち向かっていくのかという視点を学ぶことができた。ジェンダー問題の中でも、偏見や差別はその人が生まれてから培ってきた価値観や考え方によって引き起こされることも多いため、その人の考え方や社会の仕組みを根本的に変えることは難しいと感じた。しかし、そんな中でも、まずは自分たちから、そして次に身近な人から、という理解ある小さなコミュニティを増やしていくことの重要性にも気づいた。

さらに、私たちは関心と志が同じく、そのような問題に対して、どうしていくのが一番の解決策になるのかを真剣に話し合える仲間を作ることができた。

今後に向けて

今後は、今年度活動してきたことを踏まえて、まずは現状を知ってもらい、多くの人に身近にあるジェンダー問題について知ってもらいたい。そのため、キニトピ（勉強会）は今後も続けていき、常に新しい知識を持って、アウトプットできるときにイベントを開催するような形を取りたい。イベントが目的ではなく、知ってもらうこと、解決の糸口とすることをこれからもしていきたい。

（国際学部国際学科４年　藤井るな）

ボランティアファンド学生チャレンジ 2021 採択団体一覧

2021 年度の募集は「社会課題にチャレンジ!」をテーマとし、書類審査・面談を経て 4 プロジェクトが採択された。助成団体は以下の表のとおりである。

2021 年度助成企画

プロジェクト名	団体名	助成金額
教育格差是正キャンペーン	Ark	¥200,000-
生理用品プロジェクト	Voice Up Japan MGU	¥180,210-
平和の想いを伝えるバラと桜を明学に！～核兵器を知る、考える、伝える、きっかけに～	任意団体　Peace☆Ring	¥70,000-
足元から「食」を考える	Inspire Food MGU	¥80,000-

4　いつでもボランティアチャレンジ

「いつでもボランティアチャレンジ（略称　いつボラ）」は、本学の在学生が自ら企画したボランティア（社会貢献）を実践したいと思った「その時」に申請できる援助金制度である。年度内のいつでも申請ができ、ボランティアセンターの教員（センター長、センター長補佐）、職員（含むボランティアコーディネーター）で面談を実施して、助成の可否を判断する。

応募要項は、以下のとおりである。

応募資格	【個人】明学生（休学・停学中の学生は申請できません） 【団体】明学生のみで構成されている団体 ※採用は 2 回まで。年度毎の援助資金がなくなり次第、募集を終了します
応募条件	・「社会貢献活動」であること ・活動終了後 1 カ月以内の①報告書作成、②実施した活動発表 ・指定期限内の使用援助金領収書提出と使途報告
応募方法	「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」をボランティアセンター窓口またはメールで提出
選考方法	申請書類と面談で選考し、結果を代表者宛にポートヘボンで通知
助成内容	【個人】2 万円、【団体】5 万円を上限とする必要金額 ※選考時に減額されることがあります ※申請予算を使い切らなかった場合は、残金を返金する必要があります
援助対象	活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、 使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など） ※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用

2021 年度は、9 件の申請があり、7 件が採用、1 件が申請取り下げ、1 件が採用保留となった。なお、12 月に申請のあった 2 件については、新型コロナウイルスによる影響で、プロジェクトの実施が延期となる事情が発生し、年度内のプロジェクト完了ができなかった。

新型コロナウイルスの影響下において、対面でのプログラム実施が難しく、社会課題について、オンラインにてゲストを招き、講演会を行って、参加者同士で考える啓発活動型のプロジェクト実施が中心となったことが 2021 年度の特徴といえる。あわせて、コロナ禍が主たる原因であるが、計画変更を余儀なくされ、申請時の助成金を使用しきれなかった団体もあった。

年度内に完了したプロジェクトの内訳をみてみると、ジェンダーやセクシュアリティを扱う内容が 2 件、環境問題や再生可能エネルギーについて考える内容が 2 件、若者の投票率向上を考える内容が 1 件であった。申請した学生たちの社会問題への意識の高さを感じる一方、広報や参加者集めに苦戦し、メンバー内の意識の再確認に留まってしまう団体や次のステップへの行き詰まりが垣間見えた団体もあった。

2022 年度については、コロナ禍の一定程度の終息の兆しが見えてくることを願い、申請者のより実践的なボランティア活動への挑戦を期待したい。

（職員　青木 洋治）

受付日	実施日	プロジェクト名	決定額	使用額	申請者（団体の場合は団体名）
6 月 10 日	8 月 4 日	みんなで考えよう、ジェンダーの問題	¥15,000	¥16,705（税込）※1	ユートピア
7 月 20 日	10 月 29 日	Who is responsible for the future? ～#私たちの未来を手放さない）～	採用(¥0)	¥0	UBUNTU（ウブントゥ）
10 月 8 日	11 月 26 日	今大学から考えよう～持続可能な社会のために～	¥25,000	¥20,046	NEOm
10 月 8 日	10 月 22 日	選挙カフェ～あなたが政治に求めるものはなんですか？～	¥10,000	¥10,000	選挙カフェ
11 月 19 日	12 月 19 日	ガールズフェスティバル	¥37,000	¥0	UP!UP!UP!
12 月 14 日	-	りもぐるみ presents ぬいぐるみ交流で旅行気分！with 金山中学校	¥50,000	-※2	りもぐるみ
12 月 21 日	-	初心者歓迎！サッカー教室	¥45,000	-※2	鈴木 他 2 名

※1 ユートピアの支出超過は謝礼の消費税分。

※2 りもぐるみ、サッカー教室については、プロジェクト未完了のため、次年度報告書にて報告。

みんなで考えよう、ジェンダーの問題―ユートピア―

文学部英文学科２年　仙頭巧都

【活動の目的】

私たちユートピア、ジェンダーセクションの今年の目標は「ジェンダー、セクシュアリティの問題はみんなに関係があるということを多くの人に知ってもらい、気軽にそうした問題について話しやすい環境を作る」というものです。しかし、まだまだ「ジェンダー」「セクシュアリティ」という言葉を聞くと、どうしても「私には関係ない」、「難しそう」というイメージを持っている人や、興味はあるがそうした情報や意見を交換できる場所が無くて困っているという人は少なくないと思います。そこで、多くの人にそうした問題について考えるきっかけを提供し、私たちの企画したイベントを通じて参加した人たちがジェンダー、セクシュアリティの問題に対して主体的に行動ができるようになってもらいたいと考え、このプロジェクトを企画しました。

【活動内容】

イベントは、８月４日水曜日の 19 時から 21 時の２時間で Zoom にて行いました。

ゲスト講師に金沢学院大学、文学部講師宮永隆一朗先生をお招きし、性の問題がなぜジェンダーという言葉や枠組みに放り込まれてしまうのかという問題について話していただきました。また、講演後には参加者の方々とディスカッションを行い、様々な意見を交換しました。

【活動を通して出た課題】

・１つめのディスカッショングループ割り当ての Zoom での準備が不十分で、参加者の方を待たせる時間ができてしまった

・時間が押してしまい、全体的にバタバタしてしまった、など

→今後イベントを企画する際は上記のような当日考えられるトラブルをしっかり考えたうえで準備、リハーサルを行う

【得た学び＆今後について】

２時間という限られた時間の中ではあったものの、講演の中で先生にジェンダー、セクシュアリティの基本的な問題から発展的な問題まで取り扱っていただき、そしてディスカッションで参加者の方と意見を交換することができて、自分たちにとってもすごく勉強になるイベントになりました。また、色々な人の力をかりてイベントを１つやり遂げることができたというのはすごく貴重な体験であったと思います。今回のイベントででた課題も得た経験も、決して無駄にすることなく今後の活動に生かしていこうと思います！

学生団体　UBUNTU　　いつでもボランティアチャレンジ活動報告書

環境問題　はじめの一歩サミット

～Who is responsible for the future?～

日時：2021 年 10 月 29 日　17:00～19：30　@zoom

私たちは"環境問題についてみんなで気軽に話しあう"ことを目的としたイベントを開催した。ゲストに「Fridays for Future Tokyo」を迎え、現在の環境の状況についての講演をしていただき、参加者や主催者、ゲスト関係なくみんなでどうするべきか話し合った。今回のイベント出席は全員が学生であるので、若者として何をすべきなのか、また明学生として大学をどのように変えるべきなのか、新しいアイデアや改善点など様々な面白い意見が出た。またお互いにおすすめの環境系の専門書や、SNS アカウント、大学内で行われている取り組みなどを紹介し合い親睦を深めることが出来たと思う。

一人一人が意識を持ち行動することも大切だが、政府や学校などの大きな組織に対し改善を求めること、SNS 等を使い周りの人をも巻き込みムーブメントを大きくしていくことが重要となってくると痛感した。

↑オンラインでゆるくトークしました。

[ゲスト] Fridays for Future Tokyo

グレタが国会前で座り込みを行ったことから若者中心に世界中に広まったムーブメント。気候正義に基づいた行動をとってもらうため政府や企業に働きかける。FFFTokyo は、国会議事堂や省庁があるという特徴を活かしたスタンディング等のアクションや今回のような学校講演を行っている。

<UBUNTU メンバーの感想>

中村：今まで環境問題に興味を持っていなかったものの、今回の企画を通していかに自分が世界の問題に対して興味を持たずに生きていたかを考えさせられ、もっと日常生活において SDG s に興味をもって行動していくことの大切さを改めて実感しました。もっと環境問題や国際問題に興味を持って行動していこうというように意識が変わった良いきっかけにもなりました。

三浦：今回のイベントは私たちが一から作るということで、何度もミーティングをし、時間をかけて作りました。それぞれが忙しい中で準備を進めていましたが、当日までに準備を終え本番を迎えることができました。参加者の人数は多くありませんでしたが、だからこそ、それぞれと話す機会を持つことができました。私たちが目指していた、繋がりを広げるきっかけになったのではないかと思います。日々の生活の中であまり話さないことを、話す機会を作ることができて良かったです。

山田：環境問題と言っても様々な問題や、アプローチの方法があるので自分の視点とは違った新しい知識や意見を聞くことが出来、すごく濃い時間を過ごしました。「環境問題」はまだまだ日本では危機感を持っている人は少ないと思っていましたが、学内にも意識を持って考え行動しようとしている人がいることを知り励みになりましたし、改めて私たち「若者」が行動する必要を感じました。

明治学院大学環境活動団体

NEOm

ゲストスピーカーをお招きしたオンラインシンポジウム「今、大学から変えよう～持続可能な社会のために～」を開催しました！

【活動内容】

2021年11月26日にオンラインイベントを開催しました。

「今、大学から変えよう～持続可能な社会のために～」

ゲストスピーカーに、FoEの高橋英恵さん、Spiral Clubの中村もえぎさん、グリンピースジャパンインターン生の佐藤風太さんをお招きし、それぞれの得意分野から気候変動問題やそれに対して行動すること、再エネへパワーシフトすることなどについてお話しして頂きました。

ゲストスピーカーのご登壇の他、NEOmメンバーとの対談や参加者の方も交えたセッションも行いました。ご参加頂いた方には、明学在学生だけでなく、OBの方や他大学の学生、一般の方も居られ、「実際にパワーシフトをしていく上でどのような提案の仕方が効果的で必要なのかを学べたこと、また同じ志を持つ学生と出会えて良かった」「私の大学もパワーシフトしたいと考えている。今後の活動の参考になった」といったご感想を頂きました。環境問題やパワーシフトについて日々勉強中の私たちにとっても、専門の方をお招きした今回のイベントはとても有意義な時間となりました。

いつでもボランティアチャレンジでは、ゲストスピーカーの方々への謝礼を創出することができました。ゲストのお三方に参加していただいたことで、NEOmの活動をより多くの方に知って頂き、今後の活動の幅を広げることにも繋がりました。

ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

【活動で得た学び】

イベントを開催して、同じ興味を持ちながらも仲間がいない、行動の仕方がわからないと感じている学生が多いことがわかりました。今回のイベント参加者の半数が他大学の学生であったことから、これは明学に限らず多くの大学で共通することであると考えられます。感想の中には「パワーシフトに興味のある学生でひたすらおしゃべりするイベントを企画してほしい」という声もあり、大学内外問わず環境問題について気軽に話せる場を設けることは、学生にとって必要だということがわかりました。

再エネについては、さまざまな情報が蔓延っている中、イベントでは再エネであれば何でもいいわけではないことや、実際の再エネ電力を調達する方法など、専門的な知識を得ることができました。

また、学生の活動に興味を持ってくださる一般の方やOBの方も多く、世代を超えて手を取り合い力を合わせていくことが可能であること、その重要性を学びました。

【私たちについて】

NEOmは、New Energy Organization MGUの頭文字をとっています。明学で使われる莫大な電力を再生可能エネルギーに転換することを目指して設立されました。現在は学部学年問わず15名の学生で活動しており、署名活動やイベントの企画をしています。学生はもちろん、教職員もOBOGもみんなが参加できる環境コミュニティとなることを目指して、気軽に環境のことについて話せる対話の場を作っていきたいです。

選挙カフェ
～あなたが政治に求めるものはなんですか？～
いつでもボランティアチャレンジ報告書

活動実施日：2021年10月22日(金)昼休み12:50～13:30、28日(木)17:30～19:00
企画者：高瀬薫、金勇利、田上凪

【活動報告】
2021年10月31日投開票の第49回衆議院選挙を控え、選挙権を持つ大学生に向け「政治がどのように日常生活に絡んでいるのか」「そもそもなぜ選挙に行く必要があるのか」これらを改めて考える機会があってもいいのではないかと考え企画しました。

22日は、社会問題を中心にU30向けの情報発信を行う一般社団法人NO YOUTH NO JAPANメンバーの方とボラセンをzoomで繋ぎ、現在の選挙制度のレクチャーと、質疑応答形式でのパネルディスカッションを行いました。Zoomミーティング入室者と対面参加者合わせて15名程度の方々が集まってくれました。

28日は、国際学部有志企画はやらないカフェ、学内で社会問題に関する情報発信をしている有志団体VOICE UP MGUとコラボし、哲学対話を行いました。「いい政治って何？」という問いを皮切りに、選挙や現在の政治に関する個人の経験や気づき、もやもやなどを共有し、「みんなで悩む」ことで、「みんなで考える」ための対話を行いました。ZOOMと対面合わせて26人の方々が集まってくれました！ありがとうございました！

10月28日哲学対話の様子

10月28日哲学対話の様子

10月28日哲学対話の様子

【活動から得た学び】
知ってるつもりだったけどどこかにモヤモヤがある、そんな選挙制度や仕組みについて、改めて学び直す機会になりました。
イベント終了後も、残った人たちの間で「そもそもいまの選挙制度ってどうなの？」「この前あった地元の市長選では・・・」という話題が自然に生まれていました。自分の実感していることを安心して話すと同時に、それを聞き合い、それぞれ自ら考える時間となりました。また、投票先を選ぶ際の根拠をより「自分ごと」として、参加者、企画者問わず学び合うことができました。（理想を言えば、このような空間が、イベントとして作り出さなくても普段の生活の中にあれば良いのに、と考えます。）

また大学も完璧ではありません。少し自分の周辺に目を向ければ、学生生活の何気ない一面でも、問題は見えてきます。つまり、学生生活を送っている我々もその問題の身近な当事者であると同時に、その問題を解決することができる唯一の存在であることを再認識できたと思います。実は大きく遠いところにあるように問題も、皆で対話し、悩み、考え、「連帯する」ことで、その問題をグッと近くそして普遍的なものにすることができることに気づくことができたと思います。

【“政治”の枠を超えて】
大学において、「吸収するもの」がある場は授業だけではありません。人との関わり合いによって、知識のみならず多様な「生き方」を知るチャンスを大学は持っています。
「政治についてみんなが安心して話せて聞き合える、考えられる場を作りたい」という想いを込めたこの企画。「大学生」という枠を超え、教授や職員さんたちも集まる場になりました。対話を通し、自分とは異なる視点や意見に幅広く触れながら、集まった一人一人の人生を少しでも豊かにする一助になっていれば、と思います。

ガールズフェスティバル

活動実施日 12 月 19 日

活動内容

1 年半、ジェンダー問題についての勉強会や理解促進のためのイベントなどを行ってきたことの総まとめとしてのイベントを開催。ジェンダー問題において“多様性”をキーワードとして、今まで問題に全く興味のなかった人を対象に問題定義、ディスカッションを行った。ファッションやフラダンスの動画を撮影したものを問題定義の題材として、関連するジェンダー問題について考え、身近にあるジェンダー問題に気づき、今後自分の生活に落とし込んで考えてもらうきっかけとすることを目的とした。イベントの参加後アンケートも行ったところ、ジェンダー問題に興味を持っていた人はフラダンスに興味を持つようになったり、相互的に興味の範囲が広がったという意見もあったので、1 つの社会課題を啓発するだけでなく、様々な社会課題について多面的に取り組めたことに意義があると考える。

活動を通して得た学び

ジェンダーに関する様々な問題は、生活と常に隣り合わせである。そのため、自分の思考からなる行動や発言によって、誰かを傷つけたり、排除してしまうことがある。これは、ジェンダー問題に限らず自分と違う人を差別し、偏見が生まれる問題全般に言えることである。自分とは違う他者を否定するのではなく、全ての人が自分と違って当たり前なので、理解できなくても否定せずに受け止める“多様性”が社会には必要であるということを学んだ。

今後の課題

このようなイベントを開催するにあたって、初めに対象者をしっかりと決めることが必要であると感じた。今回のイベントでは、ジェンダー問題にあまり興味のない人に向けてだったが、実際に参加したメンバーは既に関心のある人だったため、ディスカッションはもう少し高度なものでもよかったかもしれないと感じた。
また、広報をする際にジェンダー問題という言葉を使うと、もともと興味のある人しか集まらなくなってしまうため、難しいと感じた。今後、イベントを行う際には、イベント内容やポスターの内容にも対象者を意識した運営をできるようにしたい。

5　1 Day for Others（1 日社会貢献プログラム）

2021 年度の「1 Day for Others」については、2020 年度と同様にコロナ禍における制約のある中での実施となった。新型コロナウイルス感染状況の先行きが見えない中、2020 年度と同様に、受入先の皆様と学生の感染を防ぐことを第一として「オンライン」でのプログラム実施を基本に、昨年の 10 プログラムを上回る 22 プログラムを実施し、延べ 244 名の学生が参加した。まずは、実施において、「オンライン」で社会課題に対し、学生が自分事として考え、行動することができる環境づくりにご尽力いただき、プログラムを提供くださった受入団体の方々に改めて感謝申し上げたい。

プログラムの内容についても、講義形式など座学中心であった昨年に比して、明確な支援をする相手の存在を感じることのできるプログラムが実施できたことも、2021 年度の特徴である。

一例を挙げると「国連 WFP 協会」と協働した「WFP チャリティエッセイコンテスト」(応募 1 作品につき、給食 3 日分（90 円）の学校給食支援に役立つコンテスト)への参加プログラムや「シャンティ国際ボランティア会」の「絵本を届ける運動」(絵本が不足している地域へ届ける絵本へ翻訳シールを貼るボランティア)に参加するプログラムなど、オンラインであっても直接的な支援につながる活動ができたことは、一つの成果といえる。

また、1 月には、対面実施における学生派遣基準のガイドラインを制定し、試験的に対面プログラムの実施にも踏み切った。本学横浜校舎近隣の「横浜市立倉田小学校」の授業内で牛乳パックを使ったキャンドルホルダーづくりのサポートボランティアであったが、新型コロナウイルス感染に細心の注意を払いながらも、対面で活動をできた喜びや充実感を参加した学生から感じ取ることができた。残念ながら、その後「まん延防止等重点措置」が本学の所在する東京都、神奈川県に発令されたため、他にも計画していた対面プログラムもあったが、中止の決定を余儀なくされた。

2022 年度についても、社会情勢を見据えながらのプログラムの実施になることが予想されるが、参加する学生のボランティア活動のはじめの一歩となるようなプログラム、社会に関心を持つきっかけになるプログラムを提供できるよう、様々な受入先の方々と一層連帯を深めていきたい所存である。

（職員　青木 洋治）

◆やってみよう！一日でできる手話

受入団体	学生手話団体 orange
実施日	2021 年 6 月 5 日(土)　14:00-17:30
参加学生	29 名(1 年生 10 名、2 年生 11 名、3 年生 8 名)
参加者の声	・学生が教え、学生が学ぶという環境でより能動的に手話を学ぶことができた点が良かった。 ・手話は一度も触れたことがなかったのですが、楽しく、分かりやすく手話に触れられて、たくさん学べて良かった。

◆多世代交流拠点「芝の家」をオンラインで体験しよう。

受入団体	芝の家
実施日	2021 年 6 月 23 日(水)　13:10-15:30
参加学生	29 名(1 年生 7 名、2 年生 3 名)
参加者の声	・自己紹介の中に自分のお気に入りのものを紹介する内容を入れたことで話が盛り上がり、沢山交流ができたので良かった。 ・自分が考えたミニクイズにみんなが楽しそうに取り組んでくれたことが嬉しかった。

◆エッセイを書いて、給食を届けよう!

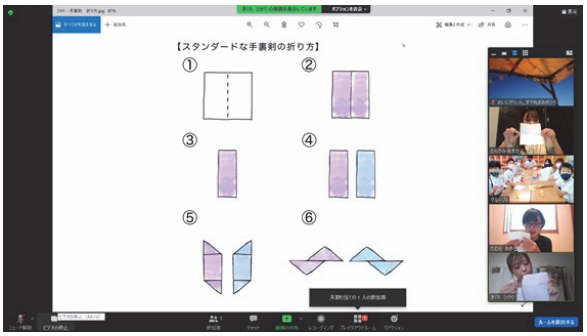
受入団体	特定非営利活動法人国際連合世界食糧計画 WFP 協会
実施日	2021 年 7 月 14 日(水)　15:15-17:15
参加学生	22 名(1 年生 10 名、2 年生 9 名、3 年生 3 名)
参加者の声	・エッセイを書いて支援ができるというところがよりボランティアを実感できて良かったです。 ・実際に現場で働いている方のお話を聞くことができたという点がとてもよかったです。

◆グローバル企業とボランティア～自身で考え行動する社会貢献～①

受入団体	株式会社セールスフォース・ドットコム
実施日	2021 年 8 月 5 日(木)　13:30-15:00
参加学生	18 名(1 年生 5 名、2 年生 6 名、3 年生 7 名)
参加者の声	・社会人の方とコミュニケーションをとりながらボランティアもできたところが良かった。 ・ボランティア活動を行なっている企業はとても興味深かった。働く中で、具体的に社会に貢献できていることを実感することは人生を豊かにすると思った。

◆中華学校の子どもたちとオンラインで遊ぼう。

受入団体	横浜山手中華学校
実施日	2021 年 8 月 25 日(水)　13:00-14:30
参加学生	15 名(1 年生 8 名、2 年生 6 名、3 年生 1 名)
参加者の声	・私の班は折り紙をしました。拙い私の説明でしたが、中華学校の生徒の皆さんが積極的に取り組んでくださったおかげで、とても楽しくボランティアを終えることができました。 ・事前にリハーサルを設けてもらえたことで、当日焦ることなく進行することが出来ました。また、子どもたちが出し物をしてくれたのも、とてもかわいくて上手で楽しかったです！



手裏剣の折り方の説明

中華学校の子どもたち

◆岐阜県の作業所で働く皆さんと交流しよう。

受入団体	ぎふちょう金山
実施日	①　2021 年 8 月 26 日(木)　10:00-11:30 ②　2021 年 9 月 16 日(木)　10:00-12:00
参加学生	5 名(1 年生 4 名、3 年生 1 名)
参加者の声	・お仕事紹介とレクという双方向の交流ができるプログラムで、互いに楽しめたところが良かった。 ・夏休みだからこそ普段より多くの時間を使ってぎふちょう金山の皆さんと仲を深められたと思います。一度きりでなく今後も関わりを持ち続けられたら嬉しいです。

◆ボルネオ島の保全活動から環境問題や SDGs を考える

受入団体	特定非営利活動法人　ボルネオ保全トラスト・ジャパン
実施日	2021 年 11 月 10 日(水)　13:30-15:00
参加学生	6 名(1 年生 2 名、2 年生 3 名、3 年生 1 名)
参加者の声	・ボルネオ島のプランテーションが抱える問題や、状況を詳しく説明していただけてよかったです。環境問題を意識した買い物の方法や考え方、フェアトレードマークのことも教えていただけたので、今日からでも実践できたら良いなと思います。 ・今、授業で環境問題を扱う授業を受講しているので、今回学んだことを授業で活用したい。

プランテーションで分断されたボルネオ島の森林

◆グローバル企業とボランティア～自身で考え行動する社会貢献～②

受入団体	株式会社セールスフォース・ドットコム
実施日	2021 年 11 月 24 日(水)　13:30-15:00
参加学生	17 名(1 年生 8 名、2 年生 4 名、3 年生 3 名、4 年生 2 名)
参加者の声	・ブレイクアウトルームに分かれて、社員の方に質問ができたこと。少人数のグループだったので、話しやすかった。 ・ボランティアを一つの軸として考えている企業があり、その企業ならではの社会貢献の方法がある、ということがわかった。

◆働く前に知っておきたい ワークライフバランス講座

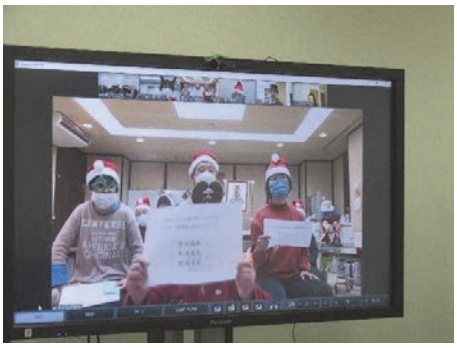
受入団体	特定非営利活動法人マドレボニータ
実施日	2021 年 11 月 27 日(土)　10:00-12:00
参加学生	12 名(1 年生 4 名、2 年生 4 名、3 年生 2 名、4 年生 2 名)
参加者の声	・ゼミで女性の育児について調べごとをしているので出産までの過程だけでなく、出産後のことも調べていきたいと思った。また来年度対面でこのボランティアに行ける機会があれば参加したい。 ・今後の長期的な人生プランを考えるきっかけとなった。そして、妊娠・出産に関する知識を得ることができた。

◆命のボランティア講座

受入団体	神奈川県赤十字血液センター
実施日	2021 年 12 月 11 日(土)　10:00-11:40
参加学生	18 名(1 年生 11 名、2 年生 6 名、3 年生 1 名)
参加者の声	・献血に対する基礎知識をつけることができた。献血の現状・必要性を知ることができた。 ・若年層の献血を増やすためにどのようなことができるか、学生間でディスカッションできたのが良かったです。

◆岐阜県の作業所で働く皆さんとクリスマス交流会！

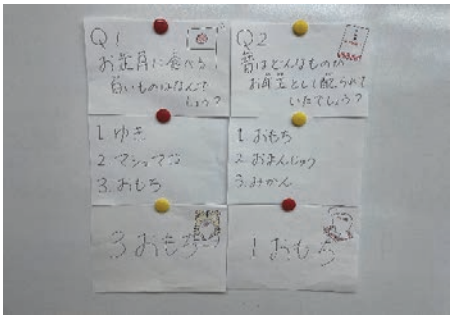
受入団体	ぎふちょう金山
実施日	①　2021 年 12 月 13 日(月)　15:15-16:00 ②　2021 年 12 月 20 日(月)　15:15-16:00
参加学生	8 名(1 年生 6 名、3 年生 1 名、4 年生 1 名)
参加者の声	・遠隔であることを忘れるくらい、交流やレクに没頭できて、とても楽しかったです。



作業所で働く皆さんとの様子

◆下呂市立竹原小あおぞら学級の小学生とオンライン交流会！

受入団体	下呂市立竹原小学校
実施日	①　2022 年 1 月 17 日(月)　8:25-9:25 ②　2022 年 1 月 19 日(水)　8:25-9:25
参加学生	10 名(1 年生 1 名、2 年生 3 名、3 年生 4 名、4 年生 2 名)
参加者の声	・オンラインを通じたコミュニケーションとは思えないほど楽しく、活気のある濃い時間でした。 ・コロナが長く続きボランティア活動にも消極的になっていたのですが、今回を経てボランティアへの意欲が湧きました。



出題されたお正月クイズ

◆上倉田キャンドルナイト「キャンドルホルダーづくり」

受入団体	横浜市立倉田小学校
実施日	①　2022 年 1 月 18 日(火)　9:30-11:30
参加学生	4 名(1 年生 2 名、2 年生 2 名)
参加者の声	・小学 2 年生の子どもたちと目を合わせて話したり、一緒に鬼ごっこをしたり、作業を手伝ったりしたことは、今後も大学で教育を学び続けるためのモチベーションになりました。

子どもたちが作成したキャンドルホルダー

◆柏尾川の風物詩。こいのぼりをつくろう！

受入団体	柏尾川魅力づくりフォーラム
実施日	①　2022 年 1 月 27 日(木)　13:00-16:00 ②　2022 年 1 月 28 日(金)　13:00-16:00
参加学生	①　4 名(1 年生 1 名、3 年生 2 名、4 年生 1 名) ②　5 名(1 年生 3 名、2 年生 2 名)
参加者の声	・一緒にプログラムに参加した方々と和気藹々と鯉のぼりを作ることが出来てとても楽しかった。 ・子供の頃に戻ったように活動を楽しむ事ができた。

作成したこいのぼり

◆やってみよう！1 日でできる手話講座②

受入団体	学生手話団体 orange
実施日	2022 年 2 月 26 日(土)　14:00-17:30
参加学生	19 名(1 年生 7 名、2 年生 6 名、3 年生 6 名)
参加者の声	・手話をもっと多く学び、実際に聴覚障害を持った人を助けられるようになりたいと感じました。 ・聴覚障がいの当事者の方の中にも、様々な違いがあり、関わり方の良い勉強になりました。間違いを恐れず、手話を使っていくことが手話習得の一番の近道ということがわかりました。

◆「SDG s 12：つくる責任、つかう責任」日本の農業を考えよう

受入団体	特定非営利活動法人樹恩ネットワーク（JUON NETWORK）
実施日	2022 年 3 月 1 日(火)　13:00-14:30
参加学生	12 名(1 年生 5 名、2 年生 3 名、3 年生 4 名)

参加者の声	・今までは SDGs と日本の農業の関連について考えたことがなかったので、新しい発見をすることができた。また、日本の農家の減少について私たちにできることは何か、どのような解決策があるのかを考えるきっかけになった。

◆フェアトレードを通したまちづくりとは？

受入団体	逗子フェアトレードタウンの会
実施日	2022 年 3 月 4 日(金)　13:30-15:30
参加学生	9 名(1 年生 5 名、2 年生 2 名、3 年生 2 名)
参加者の声	・フェアトレードの商品などについて知れたので、お店で見かけた時は買いたいなと思う。

◆絵本作家さんのお話を聞いて子ども達のために読み聞かせをしよう

受入団体	下呂市立金山小学校・おはなしもくば
実施日	①　2022 年 3 月 7 日(月)　9:00-11:00 ②　2022 年 3 月 8 日(火)　8:25-9:10
参加学生	6 名(1 年生 3 名、2 年生 1 名、3 年生 2 名)
参加者の声	・実際に小学生を前に絵本読みを経験出来て、失敗も含め朗読の良さなど実感することができた。 ・小学生の子達からの感想を聞いて、言葉がどう伝わったのかを知り、今後の小学校での実習や子供と関わる機会があった時に話し方などで活かしたいと思う。

◆難民の友に、難民と共に～アルペなんみんセンターの事例から、地域での難民受け入れについて考える～

受入団体	（公財）かながわ国際交流財団・明治学院大学「内なる国際化」プロジェクト
実施日	2022 年 3 月 10 日(木)　14:00-16:40
参加学生	5 名(2 年生 3 名、3 年生 1 名、4 年生 1 名)
参加者の声	・今までは日本の難民問題について、知識がなく、全く知らないし気づかない状態にあった。しかし、今回、日本にいる難民の方のお話を聞くことによって、日本では難民は多いが、「難民認定される人」は少ないという現状に気づくことが出来た。それは、彼らの人権の話にもつながることであり、一人一人が意識を変え、寄り添うことで、行政の対応にも変化を与えることが出来ることであるという学びを得た。

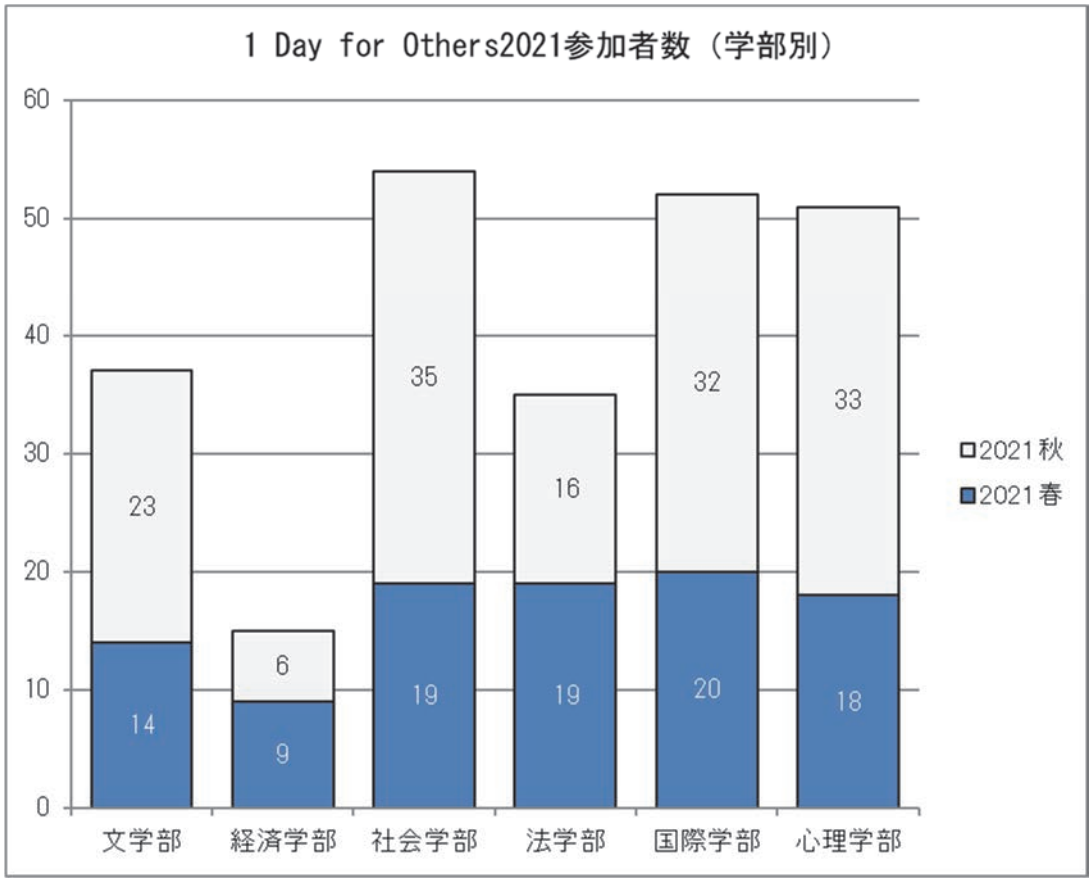
◆地域ボランティア団体の意見交換会の進行をしてみよう！

受入団体	とつか区民活動センター
実施日	①　2022 年 2 月 10 日(木)　10:00-12:00 ②　2022 年 3 月 12 日(土)　12:45-15:30
参加学生	1 名(1 年生 1 名)
参加者の声	・様々な活動をする地域活動ボランティア団体さんの話を聞いて地域でのボランティアにさらに興味が湧いた。自分に合う活動があるか調べて、ぜひ参加してみたい。

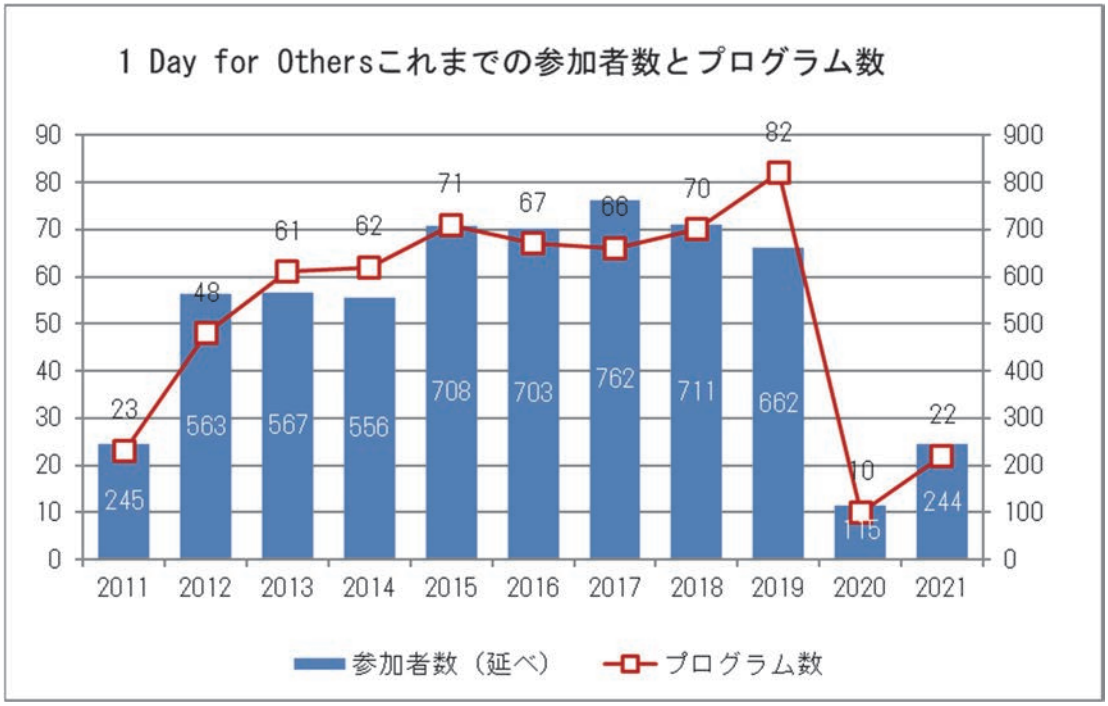
◆海外の絵本の不足している地域に絵本を届けよう～本の力を、生きる力に～

受入団体	公益社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA)
実施日	2022 年 3 月 24 日(木)　14:00-16:00
参加学生	9 名(1 年生 3 名、2 年生 4 名、3 年生 2 名)
参加者の声	・絵本を基にして難民の方々の現状についてのお話を聞きました。見せてくださった紹介動画に映るタイの難民キャンプの方々のお話が心に残っています。読書は誰にとっても幼少期の成長に関わる大事な経験だと考えて、より今回の絵本を届けるプログラムに力を入れようと思いました。

作った翻訳絵本とともに


1 Day for Others2021参加者数（学部別）
60
50
40
30
20
10
0
23
14
6
9
35
19
16
19
32
20
33
18
2021秋
2021春
文学部
経済学部
社会学部
法学部
国際学部
心理学部

0


1 Day for Othersこれまでの参加者数とプログラム数
90
80
70
60
50
40
30
20
10
0
900
800
700
600
500
400
300
200
100
0
23
48
61
62
71
67
66
70
82
10
22
245
563
567
556
708
703
762
711
662
115
244
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
参加者数（延べ）
プログラム数

6　ボランティアカフェ

「ボラカフェ」は 2020 年度のコロナ禍における模索の中で、自宅から参加できるオンライン対話の場「おうち de ボラカフェ」として始まったものである。2021 年度は実際に対面しての対話の場を設けたいと試行錯誤してきたが、春学期当初よりコロナ禍の影響を受け、年度を通して全 6 回開催した内、11 月と 2 月の 2 回を対面とオンラインとのハイブリッド型で実施したにとどまり、その他はオンラインのみでのプログラムとなった。

しかしながら、新しい試みも少なからず行なわれた。2021 年度の特徴は、第一に教職員の参加が増加したこと、第二に卒業生の多くがゲストに迎えられたこと、第三に SDGs をテーマに連続性を持てたことである。

参加者は、各回とも 20 名前後であったが、学生以外に少なからず教職員が参加し、学生と共に対話する場をつくることができた。企画においても、学生による企画が 2 回、ボラセン以外の教職員による企画が 2 回あり、ゲストも学生や教員が務めた。

また、6 回の内 3 回は、各地で活躍している卒業生をゲストに迎えて話をしてもらった。学生時代の学びや活動から、現在の企業での取り組み、帰郷してのまちづくり、新しい博物館の運営にいたる遍歴などをお話しいただき、在学生にとって卒業後のキャリアを考える上での大きな励みになったと思われる。

2021 年度は国際学部との連携も進み、3 人の卒業生は偶然だが全員国際学部の卒業生であった。また、初めてゲストとしてお話いただいた竹尾先生も国際学部の所属であり、3 月には国際学部の横浜国際学会（YISA）との共催によって、在学生だけでなく卒業生も共に対話の場に参加し、参加者層を広げることができた。

後半は、大学全体の SDGs 促進の一環とすべく、「SDGs カフェ」と名付けて SDGs の各ゴールをテーマに掲げながら企画をおこなった。2022 年度も引き続き、SDGs の各ゴールに関連させて企画を進めていく予定である。

開催日	タイトル	ゲスト	企画	参加数
7/6（火）13:30-15:00	フェアトレードについて学ぼう！環境に優しい生産と消費とは	小田進さん（パタゴニア勤務、国際学部卒業生）	エシカルくらぶ（学生サークル）	17 名
10/27（水）13:30-15:00	喜界島でグローカルに生きる	住岡尚紀さん（喜界町役場企画観光課ふるさと未来創生室、国際学部卒業生）	ボランティアコーディネーター	16 名

11/25（木）13:00-14:00	国際学部竹尾先生に聞く：島崎藤村ゆかりの地、小諸でのソーシャルビジネスの取り組み	竹尾茂樹先生（国際学部教授）	猪瀬浩平センター長（教養教育センター教授）	25 名
12/23（木）15:15-16:45	SDG５：ジェンダー平等の実現のために「誰もが社会で活躍する方法～ワークショップで理解を深めよう！」	澤柳孝浩（プラン・インターナショナル・ジャパン）	近藤優衣（法律学科３年）	10 名
2/17（木）13:30-15:00	SDG４：だれもとり残さない教育とは？「こどもの居場所づくりと自立支援～学習支援ボランティアの現場から」	鈴木日菜子さん（法学部法律学科３年） JIA RU （社会学部社会福祉学科４年）	ボランティアコーディネーター	17 名
３月５日（土）13:30-15:00	SDG10：不平等をなくす「見えないことを理解する～百聞は一触にしかず～」	川又若菜さん（国際学部卒業生、特定非営利活動法人　視覚障がい者のための手でみる博物館）	横浜国際学会共催	19 名

（ボランティアコーディネーター　磯野）

2021 年度　ボラカフェ報告

◆フェアトレードについて学ぼう！環境に優しい生産と消費とは

実施日	2021 年 7 月 6 日（火）　13 時 30 分～15 時（90 分）
場所	オンライン
ゲスト	小田進さん（国際学部卒業生、パタゴニア勤務）
企画	エシカルくらぶ（フェアトレードなどエシカル（倫理的）の視点から生産や消費を考え実践することを目指して結成された明学生サークル）
参加者	17 名（学生 1 2 名、教職員 4 名、ゲスト 1 名）
内容	エシカルくらぶの進行により、簡単なフェアトレードの説明があった後、ゲストの小田さんから、アウトドアのアパレルメーカーであるパタゴニアのフェアトレードの取組みについて話を聞いた。パタゴニアでは、環境負荷の少ない素材を選定する、ジーンズの染料に使用される化学薬品などの汚染を減らす、縫製工場の公正な労働環境を守る、使用後の回収とリサイクルなどを行っている。2014 年からフェアトレード USA とのパートナーシップを通じ認証済みの衣類を展開し、安全基準を満たした提携工場から調達するだけでなく、パタゴニアから直接賞与を払う。約 700 種類の製品の内、フェアトレード認証済みの製品は 2014 年には 11 品目であったが、2021 年には全体の 82%（560 種類）となった。 講演後、グループディスカッションにより自分たちができることを考えた。
参加者の声	・フェアトレードが食べ物だけでなくアパレル業界にもあることを知った。今回のお話を聞いて私はついつい何でも安い商品に目を向けがちだが、安い商品な値段の背景に何があるか考えて購入したいと思った。 ・ビジネスで社会問題の解決は可能なのか、という疑問がすごく共感できて、自分に置き換えていろいろ考えることができました。明学出身の方のお話は特にとても参考になるので、これからもゲストスピーカーに明学卒のかたを呼んでいただけたら嬉しいです。

◆喜界島でグローカルに生きる

実施日	2021 年 10 月 27 日（水）　13 時 30 分～15 時（90 分）
場所	オンライン
ゲスト	住岡尚紀さん（喜界町役場企画観光課ふるさと未来創生室、国際学部卒業生）
企画	ボランティアコーディネーター（菅沼、磯野）
参加者	16 名（学生 9 名、教職員 6 名、ゲスト 1 名）

内容	住岡さんは鹿児島県の離島から世界に憧れて上京し、明学では国連ボランティアとしてウガンダに行き、卒業後は喜界島に戻って「グローカル」に働いている。学生時代の学びや活動から現在に至るまでのチャレンジ・葛藤と、現在の仕事で取り組んでいることなどを聞いた。「決断とは何を断つかを決めること」「大変とは大きく変わること」「グローバル人材とは、海外経験が豊富な人ではなく、比べる対象が増えることで視野が広がることではないか」など、数々の名言があった。 お話を聞いた後、グループディスカッションをして感想を共有した。
参加者の声	・言語の壁や環境など不安で心配なこともあるけれど、考える前に行動することが大切だと知った。コロナ禍で大変な時期だからこそ大きく変わるチャンスだと思い、自分のやれることを明確にし、行動していきたいと感じた。勇気をもらいました。 ・住岡さんも悩みながら、自分の人生を決めてきた経緯を聞けてとても参考になりました。私も同じく海外に行こうと語学の勉強を焦っており、またコロナ禍での留学をどうするべきか悩んでいたので今の状況下でできることに取り組むお話には影響を受けました。

◆国際学部竹尾先生に聞く

【島崎藤村ゆかりの地、小諸でのソーシャルビジネスの取り組み】

実施日	2021 年 11 月 25 日（木）　13 時～14 時（60 分）
場所	ボランティアセンター（横浜コラボレーションスペース） ＊オンライン参加とのハイブリッド形式
ゲスト	竹尾茂樹先生（国際学部教授）
企画／聞き手	猪瀬浩平先生（教養教育センター教授、ボランティアセンター長）
参加者	25 名（学生 9 名、教職員 15 名、ゲスト 1 名） ＊対面 11 名、オンライン 14 名
内容	講話では、小諸市の地理や歴史などの紹介から、小諸と明治学院との関わりについてお話された。島崎藤村は洗礼を受けた高輪台教会の元牧師、木村熊二が開いた小諸義塾に藤村は教師として赴任する。そこで長野県の被差別部落について執筆した最初の小説が『破戒』である。藤村が書いた明治学院の校歌も藤村の信仰が表れている。 2006 年に明学と小諸市は、協働連携協定を締結。竹尾先生ご夫妻は、島崎藤村の『千曲川のスケッチ』に登場する一膳めしやである揚羽屋を改装し、飲食・宿泊施設を運営している。行政や地域の人々と連携しながら、街並みを活かし、地域を活性化していく試みである。現在、改装作業から学生に手伝

	ってもらうことで明学との連携が進んでおり、地域の人からの期待もみられる。
所感	対面、オンラインで参加があり、ミーティングオウルを使って双方の参加者とやりとりができ、初めて「カフェ」らしい対話のスタイルが実現した。教職員や卒業生の参加が多く、また、小諸市提携推薦により入学した学生をはじめ長野県出身の学生や職員もおり、あらためて明治学院大学と小諸市とのつながりの深さ、歴史を認識する機会となった。

◆SDGs ゴール５：ジェンダー平等の実現のために

「誰もが社会で活躍する方法～ワークショップで理解を深めよう！」

実施日	2021 年 12 月 23 日（木）　15 時 15 分～16 時 45 分（90 分）
場所	オンライン
ゲスト	澤柳孝浩（プラン・インターナショナル・ジャパン）
企画／サポート学生	近藤優衣（法律学科３年）
参加者	10 名（学生 7 名、教職員 3 名）
内容	SDG s カフェの企画を学生から募集した。当日はサポート学生の近藤さんによる進行で、参加者自己紹介を兼ねたアイスブレイクがあり、近藤さん自身の企画趣旨とジェンダーへの関心について聞いた。ゲストの澤柳さんの講演では、ジェンダーとはなにか、SDG s ゴール５はなにを目指しているのか、世界と日本のジェンダー格差の現状などを、クイズを用いた参加型ワークショップ形式で理解を深めた。その後、参加者が２つのグループに分かれ感想を共有し、さらに全体共有・質疑応答を行った。
参加者の声	・ジェンダー問題を教育の面から考えることが出来た。 ・問いを通して自分のジェンダーへの価値観について深く認識できた。 ・ジェンダー格差が日本ではひどいことや、刑法にもそれが反映されているため、いち早く対応すべきであると思いました。

◆SDGs ゴール４：だれも取り残さない教育とは？

「こどもの居場所づくりと自立支援～学習支援ボランティアの現場から」

実施日	2022 年 2 月 17 日（木）　13 時 30 分～15 時 00 分（90 分）
場所	ボランティアセンター（横浜、学生ラウンジ） ＊対面、オンライン参加のハイブリッド形式
ゲスト	JIA RU（社会福祉学科４年） 鈴木日菜子（法律学科３年）

	＊特別ゲスト：中和子さん（ユッカの会）
企画	ボランティアコーディネーター（磯野）
参加者	17 名（学生 10 名、教職員 5 名、他 2 名）
内容	ボランティア大賞奨励賞を受賞した二人の学生を囲んで、学習支援ボランティアのあり方について参加者とともに話しあった。初めにコーディネーターより、動画「目標 4　質の高い教育をみんなに 小学生からの SDGs」を見ながら、世界だけでなく国内においても教育格差が生まれている現状について解説した。 その後、ゲストの二人から各 15 分ずつ活動について話しを聞いた後、どうしたら学校とは異なる学習の場を必要とするこどもたちを支えられるのか、また過度な依存を生まずに自立を支援できるのかなど、質疑応答をしながら話しあった。
参加者の声	・教育支援において、依存させすぎることは良くないと気づくことができた点が良かった。 ・ボランティア活動について考えようとするとどうしても「してあげる」という考えに陥ってしまうと思います。実際、私もそのような考え方が何処かにあったのかもしれません。しかし、その考えは間違ってると気づくことができました。

◆見えないことを理解する～百聞は一触にしかず～
視覚障がい者のための手でみる博物館　館長 04KS 川又若菜さんのお話

実施日	2022 年 3 月 5 日（土）　13 時 30 分～15 時 00 分（90 分）
場所	オンライン
ゲスト	川又若菜さん（岩手県盛岡市 NPO 法人視覚障がい者のための手で見る博物館館長、国際学部卒業生 04KS）
共催／企画	YISA（横浜国際学会）共催／YISA 事務局（飯島）、ボランティアコーディネーター（菅沼、磯野）
サポート学生	長尾佑梨絵（18KS）、四戸芳佳（21LF）
参加者	19 名（在学生 9 名（内国際学部 4 名）、卒業生 8 名（内国際学部 8 名）、教職員 4 名）
内容	初めに YISA とボラセンの紹介を行った後、ゲストの川又さんにお話しいただいた。 盛岡にある「視覚障がい者のための手で見る博物館」は、1981 年に開館。全盲の桜井政太郎さんが集めたり製作した約 3000 点もの標本や模型、剥製な

内容	どが展示されている。体調不良から 2011 年に閉館を余儀なくされたが、桜井さんの同僚だった川又さんの父親を介して博物館の存在を知った川又さんは、盛岡市へ帰郷し実家の 1 階に現在の博物館を再オープンした。ここでは「百聞は一触にしかず」をモットーに、触察の可能性や奥深さを伝えている。言葉や文章だけでは理解できないこともあり、全体把握が難しいため、大きいものを小さい模型にしたり、比較してもらったりしている。視覚障がい者に「自分たちのための博物館」だと思ってほしく、完全予約制で対象者を限定している。視覚障がいにも先天か後天か、どの程度見えるのかなど個性の違いが大きく、相手の状況やニーズをよく聞くことが大事である。また、障がい者は自分ができないと周りに遠慮してしまい声を出せない。町で見かけたら「大丈夫ですか？」ではなく「お手伝いしましょうか？」と積極的に声をかけてほしい。 川又さんのお話の後、サポート学生の進行により在学生、卒業生、教職員が共にグループトークを行った。
参加者の声	・手で触れる博物館という初めて出会うお話に目から鱗でした。 ・話を聞くまでは障害者の方々との関わり合いを「支援」と捉えることが多かったが、実はお互いに新たな視点を共有し合う「異文化交流」のようなものであることに気付いた。 ・川又さんのお話はとても落ち着いた語りかけで、とてもわかりやすかったです。視覚障害のある方が触察する際に、寄り添うように静かに語りかける様子を思い浮かべました。川又さんの語り掛けがどれほど理解を深めているかと考えると、その運営におけるご尽力に頭が下がる思いがしました。そして、このような貴重な機会を提供する場所が存続するように、社会が支えていけると良いのにと思いました。

Ⅱ．新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題
「2021 年度新入生ボランティア活動アンケート」

1. アンケートの実施方法と回答者数

ボランティアセンターでは、2001 年度から毎年 4 月に新入生にボランティアへの意識などを把握するためのアンケートを実施している。しかし、新型コロナウイルスの蔓延により 2020 年度はアンケートを実施しなかった。そのため、2021年度は2年ぶりのアンケートを実施である。また、例年は学科ガイダンス時に対面でアンケートを実施していたが、2021 年度はポートヘボンのアンケート機能を利用して Web アンケートで実施した。

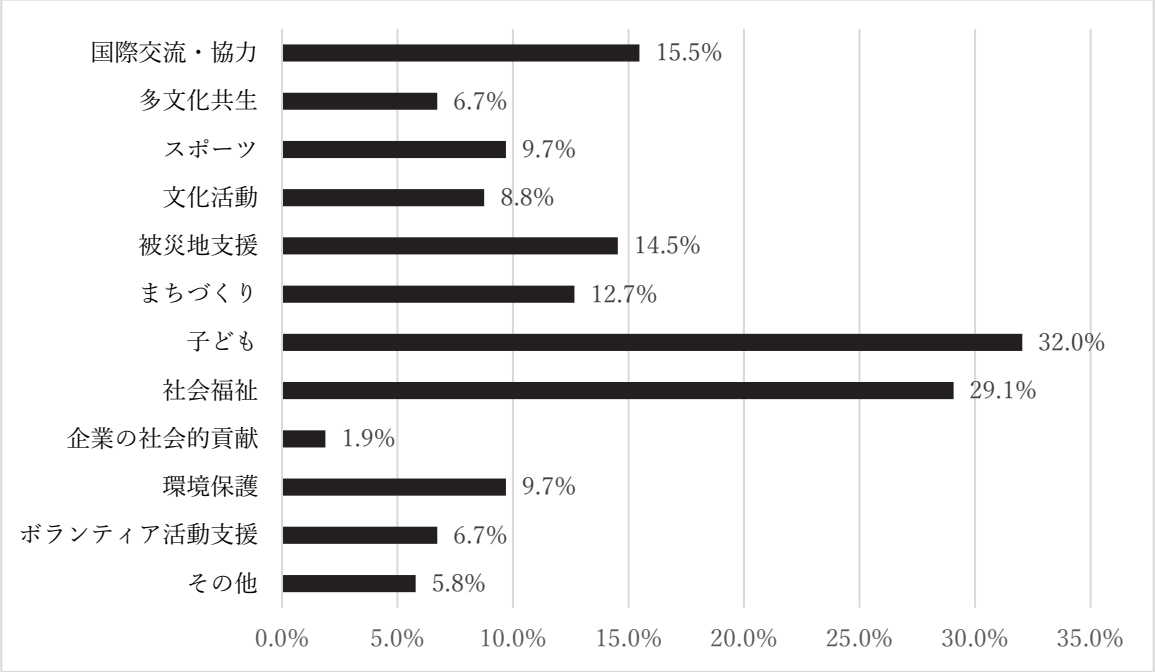
こうした事情もあり、2021 年度のアンケート回答率は例年に比べて大幅に低下した。例年は全入学者のうち 90%ほどが回答し、2500 人前後の回答を得ている。一方で、2021 年度は入学者数 2983 人に対して、回答率 6.4%で 191 人の回答となった。そのため 2021 年度アンケート回答者は、ボランティアに興味関心が強い人や、普段からこういったアンケートに協力する人に偏っていると考えられる。この点をふまえたうえで、2021 年度および例年のアンケート回答から新入生のボランティア意識とセンターの課題について述べていく。

2. 大学入学前のボランティア活動

2021 年度新入生の大学入学前のボランティア活動への参加については、参加経験のある人が 53.9%（103 人)、ない人が 46.6%（89 人）である。参加経験のある人は 2018 年度が 44.5%、2019 年度が 47.9%と上昇傾向がみられる。しかし、2021 年度の大幅な上昇についてはアンケート回答者の影響もあるだろう。

参加経験がある 103 人に、「参加したことがあるボランティアの分野（複数回答可)」を聞いた。参加経験のある 103 人を母数として、各分野の割合を図 1 にまとめた。例年、「子ども」、「社会

図１　入学前に参加したボランティアの分野（複数回答可）



福祉」、「環境保護」と「まちづくり」の４分野が揃って高い傾向にあるが、今年度は「子ども」と「社会福祉」が飛び抜けて高い。コロナ禍におけるボランティアとして、子どもたちの学習支援や社会福祉ボランティアが盛んになっていることが要因として考えられるだろう。

どのような経緯でボランティアに参加したかについては、「学校の行事として参加した」が 24.8%（26 人）、「自分から興味があって参加」が 41.9%（44 人）、「どちらの場合もあった」が 33.3%（35 人）であった。

3. ボランティア活動に対する関心

「ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか」という問いについて、経年のデータを図２にまとめた。「大いに興味がある」と「ある」を合わせた割合は、例年 70%前後で上昇傾向にある。今年度に関しては、合わせて 92.6%とアンケート回答者のほとんどがボランティア活動に興味を持っている。これに関しては先述の通り、今年度のアンケートが学科ガイダンス時ではなく、Web であったことが大きく影響していると考えられる。

図２　ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか

	2015		2016		2017		2018		2019		2021（今年度）	
	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）
大いに興味がある	553	19.6	512	17.8	581	20.4	527	19.4	445	19.1	86	45.0
ある	1,297	45.9	1,339	46.7	1,511	53.0	1,320	48.7	1,198	51.5	91	47.6
どちらともいえない	713	25.2	731	25.5	588	20.6	645	23.8	548	23.6	8	4.2
あまりない	166	5.9	188	6.6	135	4.7	167	6.2	103	4.4	3	1.6
全くない	44	1.6	41	1.4	24	0.8	41	1.5	25	1.1	1	0.5
未回答	53	1.9	59	2.1	10	0.4	11	0.4	6	0.3	2	1.0
全体	2,826	100.0	2,870	100.0	2,849	100.0	2,711	100.0	2,325	100.0	191	100.0

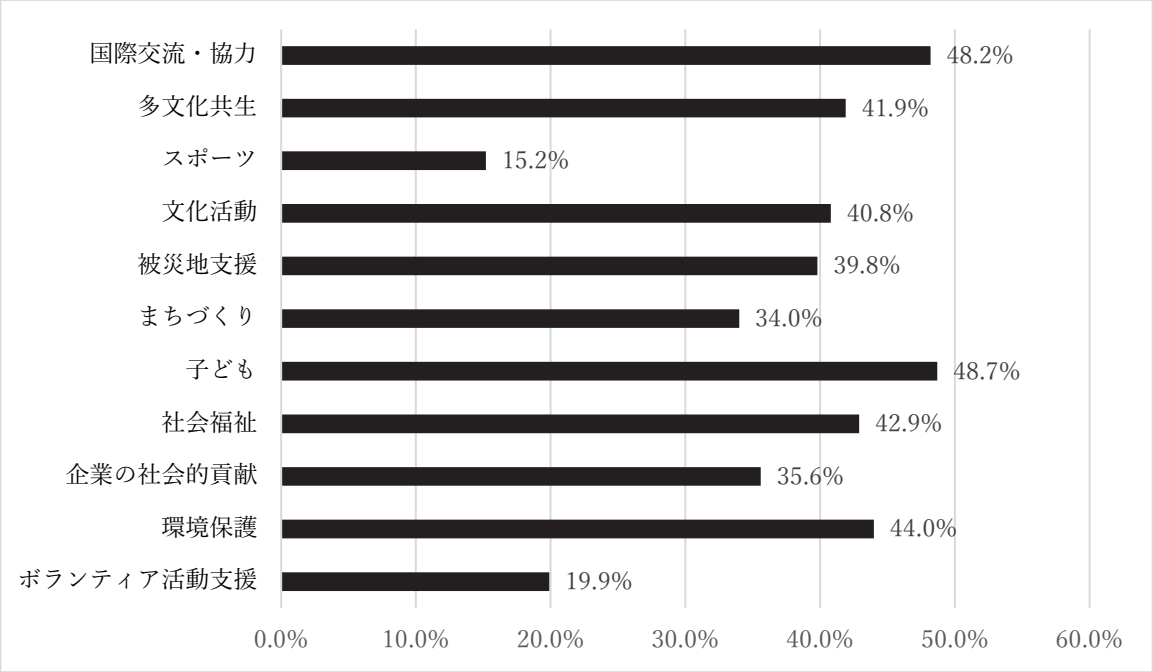
また、「ボランティアに関するニュースに興味がありますか」と聞いたところ、「大いに興味がある」が 25.1%（48 人）、「興味がある」が 47.1%（90 人）、「どちらともいえない」20.4%（39 人）であった。例年みられる傾向だが、「ボランティア活動を通して学ぶこと」に比べてニュースへの関心では、中間的な回答が多くなる。

次に、ボランティア活動の中で、新入生がどういった分野に興味を持っているのか、みていきたい。「どのようなボランティア活動に興味がありますか（複数回答可）」と聞いたところ、多くの項目について 40%前後の学生が興味を持っていると回答した。母数を回答者数の 191 名として、それぞれの分野に興味を持っている人の割合を図３にまとめた。

入学前に実際に参加したボランティアでは「子ども」と「社会福祉」に大きく偏っていたが、興味関心の先は多岐に渡る。また、図 3 で記載していないが、その他の分野として、LGBTQ 関連を挙げる人もいた。大学だからこそできるボランティア活動も多いだろう。ボランティアセンターとしては、学生に向けて幅広い分野のボランティアに関する情報発信や、多様なボランティ

アに取り組めるようサポートをしていきたい。

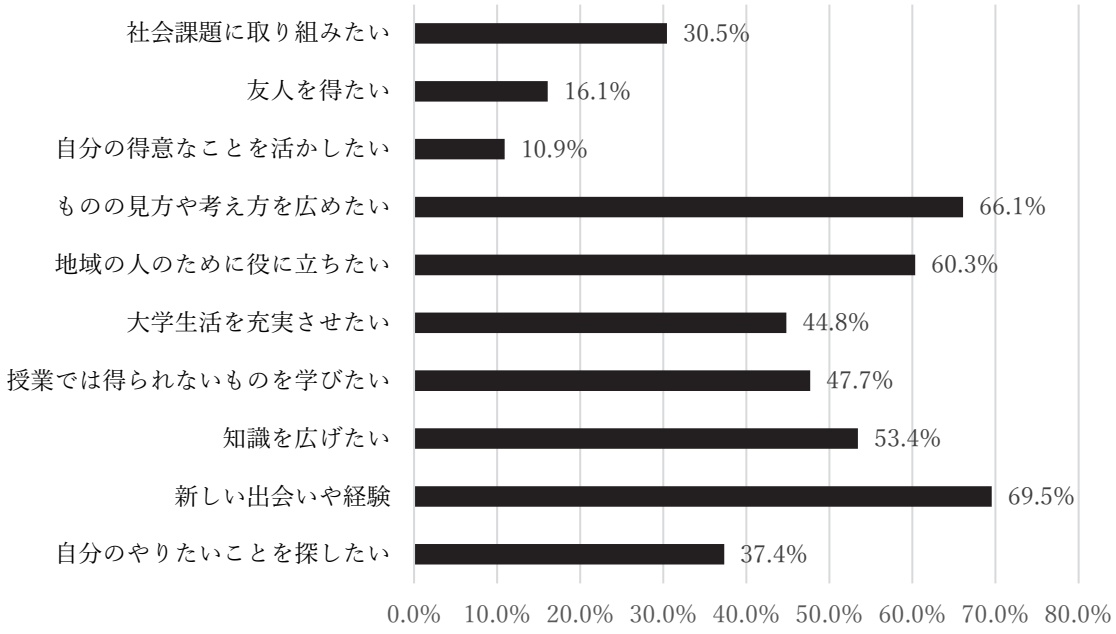
図３　どのようなボランティア活動に関心があるか



4.　大学でのボランティア活動

「大学時代にボランティア活動に参加したいですか」と聞いたところ、「参加したい」が 91.1%（174 人）、「いいえ」が 8.4%（16 人）、未回答が 0.5%（1 人）であった。加えて、「参加したい」と回答した 174 人に、「ボランティア活動に参加したい理由について教えてください（複数回答可）」と聞いた。その結果について、母数を参加したい 174 人としてそれぞれの項目の割合を図 4 にまとめた。

図4　ボランティア活動に参加したい理由（複数回答可）



今年度の特徴としては、すべての動機について例年に比べて割合が高くなった。例えば、「新しい出会いや経験」でいえば、2019 年度は 56.4%であったが、今年度は 69.5%となっている。アンケート回答者がボランティアに強い関心を持った人たちということも要因として考えられるが、学生のボランティアに対する意識が高まっているのではないだろうか。

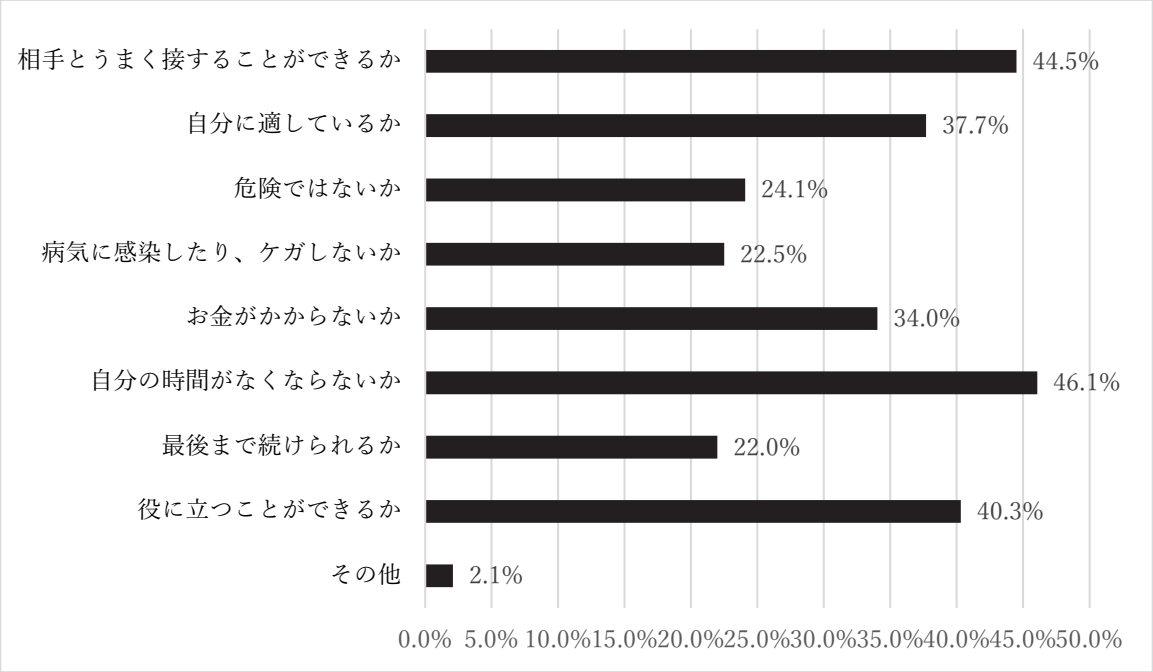
例年みられる傾向として、「新しい出会いや経験」、「ものの見方や考え方を広めたい」（66.1%）、「知識を広げたい」（53.4%）などの「自己実現型」の項目に対して、「地域の人のために役に立ちたい」（60.3%）、「社会課題に取り組みたい」（30.5%）などの「問題解決型」の項目の方が低くなっている。「社会課題に取り組みたい」については「問題解決型」の項目が少なかったため、新しく取り入れた項目である。ボランティアセンターとしては、こういった「問題解決型」の動機を持つ学生が多くなるように、外部や新入生に向けて情報発信を続けていきたい。

5.　ボランティア活動に関して心配なこと

ボランティアセンターとしては、学生がボランティアに参加しやすい環境づくりをしていきたい。そこで、「ボランティア活動に対する心配なことはなんですか（複数回答可）」と聞いた。母数をアンケート回答者 191 人として、それぞれの項目について割合を図 5 にまとめた。

「相手とうまく接することができるか」（44.5%）、「自分に適しているか」（37.7%）、「役に立つことができるか」（40.3%）など、ボランティア活動を上手くできるかどうかに関する不安を多くの人が持っていることがわかる。実際、「その他」の自由記述でも「活動が本当に人のためになっているのか」や「自己満足で終わらないか」と回答している人がいる。また、「自分の時間がなくならないか」、「お金がかからないか」など、自分のリソースがボランティア活動に割かれてしまうことを懸念している人も多い。こうした不安を払拭できるように学生のボランティア活動をサポートしていきたい。

図 5　ボランティア活動に対する心配なこと



6.　明治学院大学のボランティアとボランティアセンターの課題

最後に、「1 Day for Others」や「ボランティア・サティフィケイト・プログラム」などの明治学院大学のボランティアについて論じていきたい。「明治学院のボランティア活動について知っていましたか」と聞いたところ、「はい」が 74.9%（143 人）、「いいえ」が 24.1%（46 人）であった。また、「はい」と回答した人に「どのように明治学院大学のボランティア活動を知りましたか（複数回答可）」と聞いたところ、「大学のホームページ」と回答した人が一番多く 87.4%（125 人）、「オープンキャンパス」27.9%（40 人）、「SNS」12.5%（18 人）と続いた。

1 日社会貢献プログラムの「1 Day for Others」は、これまでにボランティアを経験したことがない新入生とっては比較的参加のしやすい機会であろう。一方で、「明治学院大学教育連携ボランティア・サティフィケイト・プログラム」は、3 年間かけて修了するプログラムであり、ボランティア実践と大学での学びを結びつけながら腰を入れて取り組みたい学生にとって魅力あるプログラムである。「1 Day for Others に参加してみようと思いますか」、「明治学院大学教育連携ボランティア・サティフィケイト・プログラムに参加してみようと思いますか」とそれぞれ新入生に聞いた結果を図 6 にまとめる。

図６　明治学院大学のボランティアプログラムに参加したいか

	1 Day for Others		ボランティア・サティフィケイト・プログラム	
	回答者数	割合（%）	回答者数	割合（%）
参加する	28	14.7%	12	6.3%
できれば参加したい	87	45.5%	44	23.0%
内容を確認してから参加を考える	71	37.2%	109	57.1%
参加しない	4	2.1%	25	13.1%
未回答	2	1.0%	2	1.0%
全体	191	100.0%	191	100%

例年みられる傾向だが「1 Day for Others」について、「参加する」と「できれば参加する」を合わせて 60%ほどと、かなり多くの学生が参加したいと思っている。「ボランティア・サティフィケイト・プログラム」は合わせて 30%ほどと、「1 Day for Others」に比べると参加したいと考える学生の割合は低くなっている。どちらのプログラムについても共通しているのが、「内容を確認してから参加を考える」と回答している人の割合がかなり多くなっている。プログラムの魅力を新入生に伝えていくことが非常に重要になってくるだろう。

例年は 90%以上の学生にアンケートを通して、こういったプログラムについても知ってもらうことができた。しかし、2020 年度と 2021 年度については、アンケートに回答した学生の割合は極めて低い。すでに明治学院大学のボランティア活動やボランティアセンターについて知っている学生のボランティア活動のサポートも引き続き行なっていく必要がある。それと同時にこれらの時期に入学した学生への積極的な情報発信もいまの世代の学生たちに向けたボランティアセンターの大きな役割である。

Ⅲ．ボランティアセンター資料

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

・明治学院大学校友会
　ご支援を頂戴しました。

2021 年度マスコミ報道一覧

日付	媒体名	内容
1 月 21 日	東京新聞	任意団体Ｐｅａｃｅ☆Ｒｉｎｇが行った、核兵器廃絶を願って名付けられたバラ「ＩＣＡＮ」の植樹
1 月 21 日	神奈川新聞	２０１７年にノーベル平和賞を受賞したＮＧＯネットワーク「核兵器廃絶国際キャンペーン（ＩＣＡＮ）」にちなんだバラの植樹
1 月 22 日	朝日新聞 DIGITAL	学生と被爆者が核兵器廃絶を願う新種のバラの苗を植樹

資料

各委員一覧

2021 年度　各委員一覧

ボランティアセンター運営委員

永 野　茂 洋（副学長）【委員長】
日 下　元 及（文学部）
中 村　友 哉（経済学部）
米 澤　旦（社会学部）
河 野　奈 月（法学部）（～12 月）
西 村　万里子（法学部）（1 月～）
頼　俊 輔（国際学部）
野 村　信 威（心理学部）
長谷部　美 佳（教養教育センター）
坂 口　緑（宗教部長）
小 林　潤一郎（教務部長）
宮 本　聡 介（学生部長）
武 村　美津代（事務局長）
猪 瀬　浩 平（センター長）
林　公 則（センター長補佐）
岡 本　実 哲（センター長補佐）
磯 野　昌 子（ボランティアコーディネーター）
菅 沼　彰 宏（ボランティアコーディネーター）
田 口　めぐみ（ボランティアコーディネーター）

ボランティアセンタースタッフ

猪 瀬　浩 平（センター長）
林　公 則（センター長補佐）
岡 本　実 哲（センター長補佐）
波多野　洋 行（次長）
高 橋　千 尋（課長）
磯 野　昌 子（ボランティアコーディネーター）
菅 沼　彰 宏（ボランティアコーディネーター）
田 口　めぐみ（ボランティアコーディネーター）
青 木　洋 治
金 子　美 咲
瀬 下　幸 恵
大 野　洋 子
林　志津子

ボランティア活動推進委員

猪 瀬　浩 平（センター長）【委員長】
高 倉　誠 一（社会学部）
植 木　献（教養教育センター）
長谷部　美 佳（教養教育センター）
可 部　州 彦（有識者）
谷 口　浩 一（学外有識者）
唐 木　富士子（学外有識者）
原 田　勝 広（学外有識者）
黒 澤　友 貴（学外有識者）
林　公 則（センター長補佐）
岡 本　実 哲（センター長補佐）
磯 野　昌 子（ボランティアコーディネーター）
菅 沼　彰 宏（ボランティアコーディネーター）
田 口　めぐみ（ボランティアコーディネーター）

明治学院大学ボランティアセンター規程

2001年 7月18日　大学評議会承認
2004年 5月19日　大学評議会承認
2004年10月20日　大学評議会承認
2005年10月 7日　常務理事会承認
2005年12月 9日　常務理事会承認
2006年 1月13日　常務理事会承認
2006年 7月14日　常務理事会承認
2010年 3月12日　常務理事会承認
2014年 3月14日　常務理事会承認
2018年 5月11日　常務理事会承認

（設置）

第１条　明治学院大学(以下，「本学」という。)に明治学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第２条　センターは，共通教育機関として，「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり，ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

（業務）

第３条　センターは，前条の目的を達成するため，以下の業務を行う。

(1) サービス・ラーニングプログラムの企画，実施
(2) 学生等に対するボランティアの立ち上げなど，学生の自主的活動の支援と助言
(3) 地域や国際社会への貢献を目指し，社会との協働によるボランティアプログラムの開発
(4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
(5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
(6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
(7) その他，学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

（活動）

第４条　センターは，第２条の目的を達成するため，以下の学生の活動を支援する。

(1) キャンパス周辺の地域に貢献する活動
(2) ボランティア入門プログラムに伴う活動
(3) 地震，津波，台風，洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
(4) 海外でのボランティア等に関する活動
(5) 学外の人道支援機関，特定非営利活動法人（ＮＰＯ），企業等との連携活動
(6) ボランティア参加への啓発活動
(7) その他

（運営委員会規程）

第５条　センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため，明治学院大学ボランティアセン

資料

ター運営委員会を置く。

2　センター運営委員会規程は，これを別に定める。

（構成）

第6条　センターには次の職員を置くことができる。

(1) センター長　1名

(2) センター長補佐　若干名

(3) ボランティアコーディネーター　若干名

(4) 非常勤ボランティアコーディネーター　若干名

(5) 事務職員　若干名

（センター長）

第7条　センター長は本学専任教員の中から，学長が任命する。その任期は2年とし，再任を妨げない。

2　センター長は，センターの業務を統括する。

（センター長補佐）

第8条　センター長補佐は，本学専任教員の中から，センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし，再任を妨げない。

2　センター長補佐は，センター長の業務を補佐する。

（ボランティアコーディネーター）

第9条　ボランティアコーディネーターの任用等は，「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2　非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は，「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

（評価・評価委員会）

第10条　ボランティアコーディネーターは，契約更新時にセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は，その結果を学長に報告する。

2　非常勤ボランティアコーディネーターは，契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

3　前2項に基づき設置する評価委員会は，副学長，学生部長，センター長，センター長補佐，大学事務局長，その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

（活動推進委員会）

第11条　センターに，その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2　推進委員会は，センター長の諮問に応じて助言または提案を行い，推進委員によって構成される。

3　前項の推進委員は，ボランティア活動に識見を有する専任教職員，学生等，およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家（若干名）からなり，その任期は2年とし，再任を妨げない。専任教職員にあっては，所属長の推薦により，その他の者にあっては運営委員会の議を経て，センター長が委嘱する。

4　センター長は，必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

（学生メンバー）

第12条　センターの業務の遂行にあたって，センター長は，学生の参加と協力を求めることができる。

（規程の改廃）

第 13 条　本規程の改廃は，センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付　則

1　この規程は，2001 年 7 月 18 日から施行する。

2　この規程の施行により，「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。

3　2002 年 4 月 1 日一部改正施行（第 3 条第 2 項，教養教育センター設置による。）

4　2004 年 4 月 1 日一部改正施行(第 3 条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。)

5　2004 年 8 月 1 日一部改正施行(第 4 条ボランティア･コーディネーター, 事務職員数の変更による。)

6　2005 年 11 月 1 日一部改正施行（第 7 条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。第 8 条評価・評価委員会，新設）

7　2006 年 1 月 1 日一部改正施行（コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。）

8　2006 年 1 月 1 日一部改正施行（第 7 条 2 項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。）

9　2006 年 4 月 1 日一部改正施行（第 3 条事務局職制変更による）

10　2010 年 4 月 1 日一部改正施行(基本理念作成委員会の答申に基づき，第 2 条目的および第 3 条業務を見直し, 第 4 条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除, 第 5 条センター長補佐の人数を変更, 第 7 条センター長補佐は専任教員の中から選する，第 9 条 2 項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記，3 項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加，第 10 条 4 項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加)。

11　この規程は，2014 年 4 月 1 日から施行する。（第 3 条 3 項，第 4 条学生の活動内容の追加，第 5 条 3 項の削除，第 11 条 2 項，第 11 条 3 項推進委員の学外有識者・実務家を 2 名から若干名へ変更，第 12 条見出し変更）

12　この規程は、2018 年 5 月 11 日から施行する。（第 6 条ボランティアコーディネーターの人数変更、第 10 条評価を受ける周期の変更）

明治学院大学ボランティアセンター報告書　第 18 号　2021

発　　行　2022 年 9 月

発 行 者　明治学院大学ボランティアセンター

〒108-8636　東京都港区白金台 1-2-37

明治学院大学白金キャンパス 10 号館 1F

TEL　03-5421-5131　　FAX　03-5421-5144

〒244-8539　神奈川県横浜市戸塚区上倉田町 1518

明治学院大学横浜キャンパス 4 号館 1F

TEL・FAX　045-863-2056

E-mail　voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp

https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/

印　　刷　社会福祉法人東京コロニー　コロニー印刷

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売、
ネットワークにより転送することを禁じます。

VEGETABLE OIL INK

地球環境保護のために、大豆油インクを使用しております。